

第二百二十七條 左ノ事件ニ關スル町村會ノ議決ハ郡參事會ノ許可ヲ受クルコトヲ要ス

- 一 町村ノ營造物ニ關スル規則ヲ設ケ並改正スル事
  - 二 基本財産ノ處分ニ關スル事(第八十一條)
  - 三 町村有不動産ノ賣却讓與並質入書入ヲ爲ス事
  - 四 各個人特ニ使用スル町村有土地使用法ノ變更ヲ爲ス事(第八十六條)
  - 五 各種ノ保證ヲ與フル事
  - 六 法律勅令ニ依テ負擔スル義務ニ非スシテ向五箇年以上ニ亘リ新ニ町村住民ニ負擔ヲ課スル事
  - 七 均一ノ税率ニ據ラスシテ國稅府縣稅ニ附加稅ヲ賦課スル事(第九十條第二項)
  - 八 第九十九條ニ從ヒ數個人又ハ町村内ノ一部ニ費用ヲ賦課スル事
  - 九 第一百一條ノ準率ニ據ラスシテ夫役及現品ヲ賦課スル事
- 第二百二十八條 府縣知事郡長ハ町村長助役委員區長其他町村吏員ニ對シ徵戒處分ヲ行フコトヲ得其徵戒處分ハ譴責及過怠金トス郡長ノ處分ニ係ル過怠金ハ

- 十圓以下府縣知事ノ處分ニ係ルモノハ二十五圓以下トス
- 追テ町村吏員ノ懲戒法ヲ設クル迄ハ左ノ區別ニ從ヒ官吏懲戒例ヲ適用ス可シ
- 一 町村長ノ懲戒處分(第六十八條第二項第五)ニ不服アル者ハ郡長ニ訴願シ其郡長ノ裁決ニ不服アル者ハ府縣知事ニ訴願シ其府縣知事ノ裁決ニ不服アル者ハ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得
- 二 郡長ノ懲戒處分ニ不服アル者ハ府縣知事ニ訴願シ府縣知事ノ懲戒處分及其裁決ニ不服アル者ハ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得
- 三 本條第一項ニ掲載スル町村吏員職務ニ違フコト再三ニ及ヒ又ハ其情狀重キ者又ハ行狀ヲ亂リ廉耻ヲ失フ者財産ヲ浪費シ其分ヲ守ラサル者又ハ職務舉ラサル者ハ懲戒裁判ヲ以テ其職ヲ解クコトヲ得其隨時解職スルコトヲ得可キ者ハ(第六十七條)懲戒裁判ヲ以テスルノ限ニ在ラス
- 總テ解職セラレタル者ハ自己ノ所爲ニ非スシテ職務ヲ執ルニ堪ヘサルカ爲メ解職セラレタル場合ヲ除クノ外退隱料ヲ受クルノ權ヲ失フモノトス
- 四 懲戒裁判ハ郡長其審問ヲ爲シ郡參事會之ヲ裁決ス其裁決ニ不服アル者ハ府縣參事會ニ訴願シ其府縣參事會ノ裁決ニ不服アル者ハ行政裁判所ニ出訴



スルコトヲ得

監督官廳ハ懲戒裁判ノ裁決前吏員停職ヲ命シ並給料ヲ停止スルコトヲ得

第二百二十九條 町村吏員及使丁其職務ヲ盡サス又ハ權限ヲ越エタル事アルカ爲メ町村ニ對シテ賠償ス可キコトアルトキハ郡參事會之ヲ裁決ス其裁決ニ不服アル者ハ裁決書ヲ交付シ又ハ之ヲ告知シタル日ヨリ七日以内ニ府縣參事會ニ訴願シ其府縣參事會ノ裁決ニ不服アル者ハ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得但訴願ヲ爲シタルトキハ郡參事會ハ假ニ其財産ヲ差押フルコトヲ得

第八章 附則

第三百十條 郡參事會、府縣參事會及行政裁判所ヲ開設スル迄ノ間郡參事會ノ職務ハ郡長府縣參事會ノ職務ハ府縣知事行政裁判所ノ職務ハ内閣ニ於テ之ヲ行フ可シ

第三百十一條 此法律ニ依リ初テ議員ヲ選舉スルニ付町村長及町村會ノ職務並町村條例ヲ以テ定ム可キ事項ハ郡長又ハ其指命スル官吏ニ於テ之ヲ施行ス可シ

第三百十二條 此法律ハ北海道、沖繩縣其他勅令ヲ以テ指定スル島嶼ニ之ヲ施行

セス別ニ勅令ヲ以テ其制ヲ定ム

第三百十三條 前條ノ外特別ノ事情アル地方ニ於テハ町村會及町村長ノ具申又ハ郡參事會ノ具申ニ依リ勅令ヲ以テ此法律中ノ條規ヲ中止スルコトアル可シ  
第三百十四條 社寺宗教ノ組合ニ關シテハ此法律ヲ適用セス現行ノ例規及其他ノ習慣ニ從フ

第三百十五條 此法律中ニ記載セル人口ハ最終ノ人口調査ニ依リ現役軍人ヲ除キタル數ヲ云フ

第三百十六條 現行ノ租稅中此法律ニ於テ直接稅又ハ間接稅トス可キ類別ハ內務大臣及大藏大臣之ヲ告示ス

第三百十七條 此法律ハ明治二十二年四月一日ヨリ地方ノ情況ヲ裁酌シ府縣知事ノ具申ニ依リ內務大臣ノ指揮ヲ以テ之ヲ施行ス可シ

第三百十八條 明治九年十月第三百三十號布告各區町村金公借共有物穀取扱土木起功規則、明治十一年七月第十七號布告郡區町村編制法第六條及第九條但書、明治十七年五月第十四號布告區町村會法、明治十七年五月第十五號布告、明治十七年七月第二十三號布告、明治十八年八月第二十五號布告其他此法律ニ抵觸スル



成規ハ此法律施行ノ日ヨリ總テ之ヲ廢止ス  
第三百二十九條 内務大臣ハ此法律實行ノ責ニ任シ之カ爲メ必要ナル命令及訓令ヲ發布ス可シ

○勅令第七十一號 明治二十三年四月三十日  
行政事務又ハ司法事務ニ關シ郡區ヲ以テ其區域ヲ定メタルモノニシテ市制ヲ施行シタル場合ニ於テハ特ニ市ノ屬スヘキ區域ヲ定メタルモノヲ除クノ外左ノ區別ニ隨ヒ其所屬ヲ定ムルモノトス

- 一 區ヲ市トナシタルモノニ付テハ市ノ區域ニ依ル但東京市京都市大阪市ニ在テハ仍舊ノ區域ニ依ル
- 二 郡内ノ町村ヲ市トナシタルモノニ付テハ仍舊其從前屬シタル郡ノ區域ニ包含スルモノトス
- 三 二郡以上ニ渉ル町村ヲ合シテ市トナシタルモノニ付テハ其人口ノ最モ大ナル部分ノ屬シタル郡ノ區域ニ包含スルモノトス
- 四 此勅令發布前ニ行ヒタル選舉ハ第三ノ規定ニ合ハサルモノアルモ其當選者ニ限リ改選ヲ要セス

區域變動ノ爲メ關係ノ郡ヨリ選舉スヘキ縣會議員ノ數ニ増減ヲ爲スヘキ必要アルトキハ本年ノ通常縣會ノ議決ヲ取リ明治二十二年法律第七號第二條第二項ニ依リ處分スヘシ

○太政官布告第十五號 明治十三年四月八日

明治十一年七月第十八號布告府縣會規則左ノ通改正候條此旨布告候事

第一章 總則

第一條 府縣會ハ地方稅ヲ以テ支辨スヘキ經費ノ豫算及ヒ其徵收方法ヲ議定ス  
第二條 府縣會ハ通常會ト臨時會トノ二類ニ分ツ其定期ニ於テ開ク者ヲ通常會トナシ臨時ニ開ク者ヲ臨時會トナス

第三條 通常會臨時會ヲ論セス會議ノ議案ハ總テ府知事〔縣令〕ヨリ之ヲ發ス

第四條 臨時會ハ其特ニ會議ヲ要スル事件ニ限リ其他ノ事件ヲ議スルヲ得ス

第五條 府縣會ノ議決ハ府知事〔縣令〕認可ノ上之ヲ施行スヘキ者トス若シ府知事〔縣令〕其議決ヲ認可スヘカラスト思慮スルトキハ其事由ヲ〔内務卿〕ニ具狀シテ指揮ヲ請フヘシ

前項ノ場合ニ於テ府知事〔縣令〕ハ時宜ニ依リ之ヲ再議ニ付スルヲ得再議ノ後猶



其議決ヲ認可スヘカラスト思慮スルトキハ〔内務卿〕ノ指揮ヲ請フコト前項ニ同  
シ（十四年第四號布告）  
（ヲ以テ本項追加）

第六條 府縣會ハ毎年通常會議ノ初メニ於テ地方稅ニ係ル前年度ノ出納決算ノ  
報告書ヲ受ケ府知事〔縣令〕ニ説明ヲ求ムルコトヲ得若シ異見アルトキハ議長ノ  
名ヲ以テ直チニ〔内務大藏兩卿〕ニ上申スルコトヲ得

出納決算ノ報告書ニ付府縣會ヨリ説明ヲ求ムルトキハ府知事〔縣令〕若シクハ其  
代理人之ヲ説明スヘシ（十五年第六十八號布告）  
（ヲ以テ本項追加）

第七條 通常會期中議員ノ内二人以上ノ發議ヲ以テ其府縣内ノ利害ニ關スル事  
件ニ付建議ヲナサントスル者アラハ先ツ議會ノ許可ヲ得テ之ヲ會議ニ付シ可  
決スルトキハ其會ノ所見トシ議長ノ名ヲ以テ直チニ〔内務卿〕ニ建議シ又ハ府知  
事〔縣令〕ニ建議スルヲ得（十五年第十號布告）  
（ヲ以テ本條改正但書追加）

但臨時會ニ於テハ其會議ヲ要シタル事件ニ限り建議スルヲ得

第八條 府縣會ハ府知事〔縣令〕ヨリ其府縣内ニ施行スヘキ事件ニ付會議ノ意見ヲ  
問フコトアルトキハ之ヲ議ス

第九條 府縣會ハ議事ノ細則ヲ議定シ府知事〔縣令〕ノ認可ヲ得テ之ヲ施行スルコ

トヲ得

府縣會ハ議員ノ内召集ニ應セス又ハ事故ヲ告ゲスシテ參會セサル者ヲ審査シ  
其退職者タルヲ決スルヲ得

府知事〔縣令〕ト府縣會トノ間ニ於テ法律ノ見解ヲ異ニシ又ハ權限ヲ爭フコトア  
ルトキハ雙方ヨリ其事由ヲ具狀シ政府ノ裁定ヲ請フヘシ此場合ニ於テ府知事  
〔縣令〕ハ其議事若クハ會議ヲ中止スルコトヲ得（十四年第四號布告）  
（ヲ以テ本項追加）

### 第二章 選舉

第十條 府縣會ノ議員ハ郡區ノ大小ニ依リ每郡區ニ五人以下ヲ選フ

每郡區議員定數ノ外補闕員トシテ十人以下ヲ増選スルヲ得（十五年第十號布告）  
（ヲ以テ本項追加）

第十一條 議長副議長ハ議員中ヨリ公選シ之ヲ府知事〔縣令〕ニ報告シ府知事〔縣令〕  
ハ之ヲ〔内務卿〕ニ報告スヘシ

議長副議長及ヒ議員ハ俸給ナシ但會期中滞在日當及ヒ往復旅費ヲ給ス其額ハ  
會議ノ議決ヲ以テ之ヲ定ム第十二條書記ハ議長之ヲ選ヒ庶務ヲ整理セシム其  
俸給ハ會費ノ中ヨリ之ヲ支給ス

第十三條 府縣ノ議員タルコトヲ得ヘキ者ハ滿二十五歲以上ノ男子ニシテ其府



縣内ニ本籍ヲ定メ滿三年以上住居シ其府縣内ニ於テ地租拾圓以上ヲ納ムル者ニ限ル但左ノ各款ニ觸ル、者ハ議員タルコトヲ得ス

第一款 瘋癲白痴ノ者

第二款 舊法ニ依リ一年以上懲役及國事犯禁獄ノ刑ニ處セラレ滿期後五年ヲ經サル者(十五年第十號布告)  
新法ニ依リ公權ヲ剝奪及停止セラレタル者又ハ一年以上輕重禁錮ノ刑ニ處セラレ主刑滿期後五年ヲ經サル者(十五年第十號布告)

第三款 身代限ノ處分ヲ受ケ負債ノ辨償ヲ終ヘサル者

第四款 官吏(教導職)及陸海軍諸卒現役ノ者(十五年第十號布告)

第五款 府縣會ニ於テ退職者トセラレタル後四年ヲ經サル者

第十四條 議員ヲ選舉スルヲ得ヘキ者ハ滿二十歳ノ男子ニシテ其郡區内ニ本籍ヲ定メ其府縣内ニ於テ地租五圓以上ヲ納ムル者ニ限ルヘシ

但前條ノ第一款第二款第三款第五款ニ觸ル、者及陸海軍人現役ノ者ハ選舉人タルコトヲ得ス(十五年第十號布告)  
(十五年第十號布告)

第十五條 (二十年法律第六號ヲ以テ本條廢止)

十七年第十號布告ヲ以テ神佛敎導職ヲ廢ス

第十六條 選舉ノ投票ハ豫定ノ日ニ郡區廳ニ於テ之ヲ爲シ郡區長之ヲ調査シ選舉會中ノ取締ヲ爲スヘシ但便宜ニ因リ郡區廳外ニ於テ選舉會ヲ開クコトヲ得

第十七條 (二十年法律第六號ヲ以テ本條廢止)

第十八條 (二十年法律第六號ヲ以テ本條廢止)

第十九條 (二十年法律第六號ヲ以テ本條廢止)

第二十條 一人ニシテ數郡區ノ選ニ當ルトキハ其何レノ郡區ニ屬スヘキハ當人ノ好ニ任スヘシ

第二十一條 議員ノ任期ハ四年トシ二年毎ニ全數ノ半ヲ改選ス第一回二年期ノ改選ヲ爲スハ抽籤法ヲ以テ其退任ノ人ヲ定ム

第二十二條 議長副議長ノ任期ハ二年トシ議員ノ改選毎ニ之ヲ公選スヘシ

第二十三條 前二條ノ場合ニ於テハ前任ノ者ヲ再選スルコトヲ得

第二十四條 議員中第十三條ニ掲クル諸款ノ場合ニ遭遇スルカ其府縣外ニ轉籍スルカ其他總テ關員アルトキハ更ニ之ニ代ル者ヲ選舉ス(十五年第十號布告)  
(十五年第十號布告)

但補缺員アルトキハ順次投票ノ多數ヲ以テ之ヲ取り尙缺員アルトキハ本條



未文ノ手續ニ據ル(十五年第十號布告)

第三章 議則

第二十五條 議員半數以上出席セサレハ當日ノ會議ヲ開クヲ得ス

第二十六條 會議過半數ニ依テ決ス可否同數ナルトキハ議長ノ可否スル所ニ依ル

第二十七條 府知事〔縣令〕若クハ其代理人ハ會議ニ於テ議案ノ趣旨ヲ辨明スルヲ得但決議ノ數ニ入ルコトヲ得ス

第二十八條 會議ハ傍聽ヲ許ス但府知事〔縣令〕ノ要メニ依リ又ハ議長ノ意見ヲ以テ傍聽ヲ禁スルヲ得

第二十九條 議員ハ會議ニ方リ充分討論ノ權ヲ有ス然レトモ人身上ニ付テ褻貶毀譽ニ涉ルコトヲ得ス

第三十條 議場ヲ整理スルハ議長ノ職掌トス若シ規則ニ背キ議長之ヲ制止シテ其命ニ順ハサル者アルトキハ議長ハ之ヲ議場外ニ退去セシムルヲ得其強暴ニ涉ル者ハ警察官吏ノ處分ヲ求ムルヲ得

第四章 開閉

第三十一條 府縣會ハ毎年一度十一月ニ於テ之ヲ開ク其開閉ハ府知事〔縣令〕ヨリ之ヲ命ス會期ハ三十日以内トス但區部郡部會ヲ開ク地方ニ於テハ七日以内延期スル事ヲ得(十五年第六十八號布告)

第三十二條 通常會期ノ外會議ニ付スヘキ事件アルトキハ府知事〔縣令〕ハ臨時會ヲ開クコトヲ得其會期ハ七日以内トス但該會ヲ要スル事由ヲ直ニ〔內務卿〕ニ報告スヘシ(十五年第六十八號布告)

第三十三條 會議ノ論說國ノ安寧ヲ害シ或ハ法律又ハ規則ヲ犯スコトアリト認ムルトキハ府知事〔縣令〕ハ會議ヲ中止セシメ〔內務卿〕ニ具狀シテ其指揮ヲ請フヘシ

府縣會ニ於テ若シ法律上議定スヘキ議案ヲ議定セス又ハ會期內ニ於テ議案ヲ議決シ終ラサルトキハ府知事〔縣令〕ハ更ニ其議定ヲ要セス〔內務卿〕ニ具狀シテ認可ヲ得テ之ヲ施行スルコトヲ得(十四年第四號布告)  
議員招集ニ應セサル者半數ヲ過キ議會ヲ開クヲ得サルコトアルトキハ府知事〔縣令〕ハ其事由ヲ〔內務卿〕ニ具狀シ指揮ヲ請フヘシ(十四年第四號布告)  
第一項ノ場合ニ於テ〔內務卿〕ハ府縣會ヲ停止スルコトヲ得而シテ更ニ開會ヲ命



スル迄ノ間ハ府知事「縣令」ニ於テ地方税ノ經費豫算及徵收方法ヲ定メ「内務卿」ノ認可ヲ得テ之ヲ施行スルコトヲ得(十五年第六十八號布告ヲ以テ本項追加)

第三十四條 會議中國ノ安寧ヲ害シ或ハ法律又ハ規則ヲ犯スコトアリト認ムルトキハ「内務卿」ハ何レノ時ヲ問ハス議員解散ヲ命スルコトヲ得(十四年第四號布告ヲ以テ開會云ノ七字ヲ刪ル)

前項ノ場合ニ於テ前議員ノ未ダ議定セサル議案アルトキハ後任議員ヲシテ之ヲ議定セシムヘシ(十四年第四號布告ヲ以テ本項追加)

第三十五條 「内務卿」ヨリ解散ヲ命シタルトキハ其解散ヲ命シタル日ヨリ九十日以内ニ更ニ議員ヲ改選スヘシ

第五章 常置委員(十三年第四十九號布告ヲ以テ本章追加)

第三十六條 府縣會ハ其議員中五人以上七人以下ノ常置委員ヲ選任スヘシ

常置委員定數ノ外數名ヲ増選シ缺員アルトキハ順次投票ノ多數ヲ以テ之ヲ補充スルヲ得(十五年第十號布告ヲ以テ本項追加)

區部會郡部會ヲ開設シタル府縣ニ在テハ區郡各部ニ之ヲ選任スヘシ(十五年第十號布告ヲ以テ本項追加)

第三十七條 常置委員ハ府縣會ノ議定ニ依リ事業ヲ執行スルノ方法順序及豫備費ノ支出ニ付府知事「縣令」ヨリ諮問アルトキハ其意見ヲ述フ(十五年第六十八號布告ヲ以テ本項追加)

常置委員ハ地方税ヲ以テ支辨スヘキ專業ニシテ臨時急施ヲ要スル場合ニ於テハ其經費ノ豫算及徵收方法ヲ議決シ追テ府縣會ニ報告スルヲ得(十五年第六十八號布告ヲ以テ本項追加)

第三十八條 常置委員ハ通常府縣會議ノ初メ委員會會議ニ於テ議決シタル事件ノ要領ヲ報告シ且通常會ト臨時會トヲ論セス府知事「縣令」ヨリ發スヘキ議案ヲ前以テ請取リ會議ニ向テ其意見ヲ報告スヘシ

第三十九條 常置委員會議所ハ府縣廳内ニ置キ定日ニ會議スヘシ

第四十條 常置委員ノ諮問會議ハ別ニ議案書ヲ用ユルヲ要セス(十五年第十號布告ヲ以テ常置委員ノ下諮問ノ二字ヲ加フ)

第四十一條 諮問會ハ府知事「縣令」ヲ以テ議長トナシ其他ノ會議ハ委員中ヨリ之ヲ選舉スヘシ(十五年第十號布告ヲ以テ改正)



第四十二條 常置委員ハ半數以上出席セサレハ當日ノ會議ヲ開クヲ得ス會議ハ過半數ニ依テ決ス可ク否同數ナルトキハ議長ノ可否スル所ニ依ル

第四十三條 常置委員會議ノ議事ハ書記ヲシテ筆記セシムヘシ

第四十四條 府知事縣令ハ主務ノ僚屬ヲ委員議會ニ出シ其會議ニ係ル事件ニ付辯明ヲ爲サシムルヲ得

第四十五條 常置委員會議ハ傍聽ヲ許サス

第四十六條 常置委員ノ任期ハ二ケ年トシ議員ノ改選毎ニ之ヲ改選ス但期限ニ至リ再選スルヲ得(十五年第十號布告ヲ以テ二ケ年トシ下議員云々ノ十三字ヲ加フ)

第四十七條 常置委員會議所ノ書記ハ府縣ノ屬官中ヨリ府知事縣令之ヲ選任ス(十五年第十號布告ヲ以テ議長ヲ府知事縣令ト改ム)

第四十八條 常置委員ハ三拾圓以上八拾圓以下ノ月手當及ヒ往復旅費ヲ給ス其額ハ府縣會ノ議決ヲ以テ定ム

第四十九條 常置委員ノ月手當旅費其他委員會議所ノ費用ハ地方稅ヨリ支給ス  
○勅令第五十六號 明治二十年十一月四日

第一條 地方稅ヲ以テ支辨スヘキ事業ニ關シ寄附スル金穀物件ハ府縣會ノ議決ヲ經テ寄附者ノ指定シタル費途又ハ使用ニ充ツヘシ  
第二條 地方稅ノ雜收入ハ他ノ收入豫算ト同シク府縣會ノ議定ニ付スヘシ  
第三條 本令ハ明治二十一年度ヨリ施行ス

### 第四十九章 外國人關係

○內務省達無號 明治十八年十月二十日

警視廳 府縣東京ヲ除ク

外國人取扱巡查心得別紙ノ通相定候條右ニ憑準シ取扱フヘシ此旨相達候事

(別紙)

外國人取扱巡查心得

公使及公使館屬員取扱ノ事

第一條 本邦駐在ノ外國公使ハ其國政府ヲ代表スルノ官職ニシテ其駐劄スル所ノ政府並ニ人民ヨリ常ニ特別ノ禮遇尊崇ヲ受クルヲ以テ各國ノ通法トス故ニ



巡查タル者ハ平素此意ヲ體シ其待遇ニ注意シ左ニ記載スル特別ノ法ニ從ヒ取扱フヘシ又普通外國人朝鮮國人及條約未濟國人ヲ除クト雖モ彼我ノ交際上ニ關係アルヲ以テ之ヲ取扱フノ際最モ慎重ニ意ヲ用ヒ第十條以下ニ記載アル普通外國人取扱ノ箇條ニ依リ深切丁寧ヲ主トシ決シテ輕忽ノ所爲アルヘカラス又犯罪ヲ未然ニ防制スルコトニ心懸クヘシ

第二條 公使犯罪ノ場合ニ於テハ之ヲ差止ムルニ止マリ決シテ逮捕スヘカラスアルモノトス故ニ巡查其職務ヲ執行スルニ方リ是等ノ場合ニ際シ其公使タルヲ知リタルトキハ勿論自ラ公使タルコトヲ稱スルカ若クハ公使タルヲ知リ得ヘキ名刺ヲ渡ストキハ只敬禮ヲ表シ其進行ノ自由ヲ妨碍スヘカラス

第三條 公使ノ居館竝ニ其敷地内ハ其本國政府ノ官舎官地ト同視スヘキモノナルヲ以テ我警察權ノ及ハサル區域ナリトス故ニ巡查ハ何等ノ場合ト雖モ其公使館ノ許可ヲ得スシテ制服着用ノ儘其門内ニ入ルヘカラス尤公使館ヘ非常ノ警報ヲ爲シ或ハ盜賊等潛入ノ實跡アルヲ認ムルトキハ單ニ其知ラセテ爲スニ止マリ其敷地内ヲ徘徊スヘカラス又公使館ノ許可ヲ得スシテ其門内ニ入テ人ヲ捕縛スルコトヲ得ス但公使若クハ公使館員ノ請求ニ由リ館内ニ入ルモノハ

此限ニアラス

第四條 公使及ヒ公使館屬員ニ屬セシ什器若クハ物品ハ何等ノ場合ニ於テモ之ヲ差押エヘカラス又其許諾ナクシテ公使公使館屬員ノ荷物ヲ解キ検査スル等ノコトアルヘカラス

第五條 停車場儀式場旅行中或ハ衆人群集ノ中ニ於テ公使タル身分ヲ有スルノ人タルヲ知ルカ若クハ自ラ公使ト稱ヘ或ハ名刺等ニテ之ヲ知ルトキハ其通行ニ妨碍ナキ爲メ補助ヲ與ヘ或ハ馬車ヲ上下スルノ際過チナカラン爲メ相當ノ注意ヲ加フヘシ但公使馬車ヲ上下スルニ際會シ馬車ノ戸ヲ開閉スルモノナキトキハ之カ開閉ヲ助クル等ノ注意ヲ爲スヘシ

第六條 公使大禮服ヲ着用シ若クハ大禮服ヲ着セサルモ我國ノ勳章ヲ帶ヒテ通行スルトキハ勿論其他ノ場合ニ於テモ公使ト認ムル者ニ遇ヘハ必ラス敬禮ヲ表スヘシ

第七條 公使館附書記官竝ニ書記生其他附屬員ハ公使ト同様何等ノ場合ニ於テモ差押エヘカラサルモノナリ故ニ相應ノ敬待ヲ加ヘ成ルヘク其便利ヲ與フヘシ但內國人ニシテ公使館屬員タル者モ亦本文ノ通敬待スヘシ又從僕ト雖モ先



ツ公使館ノ許可ヲ得ルニアラサレハ逮捕スヘカラス然レトモ從僕タル者現ニ  
輕罪以上ノ罪ヲ犯シ逃走ノ恐レアル場合ニ於テハ直チニ取押ヘ警部ヘ申報ス  
ヘシ

第八條 公使ノ姓名並ニ公使館附屬員ノ姓名ハ常ニ警視廳又ハ警察本部ニ備ヘ  
タル外交官人名表ヲ熟閱シ之ヲ記憶シ置クヘシ

第九條 公使公使館屬員又ハ其家族ノ旅宿スルヲ知ルトキハ常ニ其旅舍近傍ヲ  
警戒スルニ注意スヘシ又公使或ハ公使館屬員タルヲ知ラスシテ不敬ノ舉動者  
アルトキハ之ヲ制止スヘシ又其旅舍ノ主人等ニモ不敬ナキ様注意シ置クヘシ  
通常外國人取扱ノ事

第十條 凡テ外國人ニ關シ處分ヲ要スヘキ事件ノ出來シタルトキハ警部ノ指揮  
ヲ受ケ獨斷專行ノ所爲アルヘカラス但現行犯罪ノ場合ニ於ケルカ如キ事急ニ  
シテ其指揮ヲ俟ツニ逞アラサルトキハ臨機處分スルヲ得ヘシ

第十一條 外國人ニ接スルトキハ務テ言語容姿ヲ和ラカニシ深切丁寧ナルニ注  
意スヘシ

第十二條 外國人旅行ノ節ハ宿泊又ハ休息所ニ就キ旅行免狀ノ有無ヲ問フヘシ

但公使公使館屬員ハ第五條ニ依ルヘシ

第十三條 外國人公使館ニ總領事ヲ除ク旅行免狀ヲ所持セサルカ又ハ免許ノ日限ヲ經過シ  
タルカ又ハ旅行ノ道筋ヲ違ヘタルトキハ懸篤ニ説諭シ發程シタル地ニ立戻ラ  
シムヘシ若シ肯セサルトキハ其國號居留所ヲ記載セル名勅ヲ請取名刺無之者  
ハ手帳ニ其國號氏名居留所ヲ記載セシメ警部ニ申報スヘシ但公使館屬員及ヒ  
領事官並ニ領事館屬員ハ發程地ニ立戻ラシムル限ニアラス

第十四條 旅行免狀遺失ノ旨申述フルトキハ其事由及ヒ國號氏名居留所等ヲ聞  
糺シ警部ノ指揮ヲ受クヘシ

第十五條 遊歩規程外ニ於ル外國人ヲ撞見スルトキハ免狀ノ有無ヲ問ヒ無免狀  
ノ者ハ其名前ヲ聞取り若クハ手帳ニ記名セシメ懸ニ説諭シ規程内ニ立戻ラシ  
ムヘシ但免狀ナキ者夜間等ニテ立戻リ難キト認ムルトキハ最寄旅店ヘ誘引シ  
一時寄泊セシムルハ妨ケナシ

第十六條 外國人旅宿等ヲ求メ得スシテ案内ヲ依頼スル者アルトキハ懇切ニ取  
扱ヒ其國號氏名居留所等聞糺シ相應ノ旅宿ニ誘引シ止宿料等取極ルヲ認メ最  
寄警察署ニ申報スヘシ



第十七條 不開港場へ水先案内ノ外國人上陸スルトキハ其免狀ノ有無ヲ聞糺シ若シ無免狀ノ者ナレハ該所ニ留メ置キ警部ノ指揮ヲ受クヘシ

第十八條 御通輩ノ節外國人路傍ヲ通行スルハ妨ケナシト雖モ若シ道路狹隘ニシテ儀仗ニ障碍アル場所ニ於テハ回避スヘキ旨懸ニ説諭スヘシ但公使公使館屬員ノ如キハ自ラ此等ノ禮節ヲ心得タル者ナレハ巡查ヨリ指圖カマシキコトヲ爲スハ不敬ニ涉ルコトアリ故ニ説諭等ヲ用ユルニ及ハサルコトハ心得ヘシ

第十九條 前條ノ場合ニ於テ車馬ヲ疾驅スル者アレハ之ヲ諭シテ徐行セシムヘシ若シ儀仗ニ障碍アルトキハ前條ト同シク懸諭スヘシ

第二十條 誤テ儀仗ヲ侵シタル者アルトキハ其國號居留所ヲ記載セル名刺ヲ請取リ之ヲ放遣シ直チニ警部ニ申報スヘシ

第二十一條 外國人銃獵スル者アルトキハ銃獵免狀ノ有無ヲ問ヒ免許ヲ得スシテ銃獵ヲ爲ス者アレハ穩ニ之ヲ制止シ其國號氏名居留所旅宿等ヲ聞糺シ證據人同僚ヲ除ク及ヒ證據物ヲ取纏メ速ニ警部ニ申報スヘシ若シ制止ヲ肯セサルトキハ之ヲ差押へ警察署ニ引致スヘシ

第二十二條 鳥獸獵條約條款ニ違背シタル者ハ證據物或ハ證據人ヲ得テ之ヲ警

察署ニ同行スヘシ但公使公使館屬員ハ同行スルノ限ニアラス

第二十三條 若シ警察署ニ同行ヲ肯セサルトキハ免狀ニ記載アル姓名ヲ寫取リ且見届ノ證トシテ免狀中ニ捺印又ハ花押ヲ記シ放遣シ其事由ヲ警部ニ申報スヘシ

第二十四條 銃獵者誤テ人ヲ殺傷シタルトキハ其國號氏名居留所旅宿等ヲ聞糺シ證據物件等ヲ取纏メ直ニ警察署ニ同行スヘシ但公使公使館屬員ハ同行スルノ限ニアラス

第二十五條 外國人巡查ニ對シ亂暴等ノ所爲アルトキハ之ヲ制止シ尙ホ肯セサルトキハ警察署ニ引致スヘシ

第二十六條 外國人違警罪ヲ犯ス場合ニ於テハ其姓名ヲ尋テ名刺ヲ請取リ之ヲ警部ニ申報スヘシ但輕罪以上ノ場合ニ於テハ第十條ニ據ルヘシ

第二十七條 外國人夜中燈火ナクシテ馬又ハ馬車ヲ疾驅月明ノ夜ハ宣クスルトキハ懸ニ説諭シテ點燈セシメ若シ其用意ナキトキハ徐行スヘキ旨ヲ諭シ且

第二十八條 馬車ヲ疾驅シテ內國人ニ疵傷ヲ負ハセ或ハ物品ヲ毀損スル等ニテ



相對示談ヲ望ム者ハ之ニ任セ異議アルトキハ其外國人ノ國號氏名居留所旅宿等ヲ聞糺シ名制ヲ請取り速ニ警部ニ申報スヘシ

第二十九條 公園社寺官地内等ニ揭示スル規則ニ背キ或ハ通行禁止ノ道路橋梁等ヲ通行セントスル者ハ穩ニ之ヲ制止シ若シ之ヲ肯セサルカ又ハ已ニ通行シタルトキハ其國號氏名居留所旅宿等ヲ聞糺シ名刺ヲ請取り警部ニ申報スヘシ

第三十條 外國人其所有ノ人力車ニ乘リ夜中燈火ナクシテ疾驅スルトキハ車夫ニ向ヒ第二十七條ノ例ニ從ヒ説諭スヘシ尤雇人力車ナルトキハ車夫ノ住所氏名ヲ聞糺シ放遺シ直ニ告發ノ手續ヲ爲スヘシ

第三十一條 外國人車馬止ノ榜示ヲ犯シテ通行セントスルトキハ車夫馭者馬丁ニ向ヒ説諭シテ引戻サシムヘシ若シ外國人又ハ車夫馭者馬丁ニ於テ引戻ヲ肯セサルトキハ其住所氏名等ヲ聞糺シテ放遺シ之ヲ警部ニ申報スヘシ雇馬車人力車若クハ借馬ナルトキハ直ニ告發ノ手續ヲ爲スヘシ

第三十二條 公使館屋ノ内國人違警罪ヲ犯シタルトキハ犯人ノ住所氏名ヲ聞糺シ直チニ告發スヘシ若シ其住所氏名ヲ詳述セス又ハ逃走セントスル者ハ警察署ニ引致スヘシ

第三十三條 人家稠密ノ場所ニ於テ發砲シ或ハ火技（線香花火鼠花火等ヲ弄フ者）アルトキハ穩ニ之ヲ制止シ其國號氏名居留所旅宿等ヲ聞糺シ名刺ヲ請取り警部ニ申報スヘシ若シ制止ヲ肯セスシテ止ムヲ得サルトキハ差押ユルモ妨ナシ

第三十四條 外國人出火場ニ於テ消防ノ妨ヲ爲シ又ハ乘馬スル者アルトキハ穩ニ説諭シ其場ヲ退去セシムヘシ

第三十五條 外國人ノ家畜類内國人ヲ傷害スルトキハ直チニ取押へ繫鎖ヲ施シ畜主ニ引渡スヘシ若シ狂獐ニシテ取押へ難キトキハ畜主ノ承諾ヲ得テ撲殺スヘシ尤承諾ヲ得ルニ違アラサル場合ニ於テハ確實ナル證人ヲ立テ之ヲ撲殺スルモ妨ナシ但其傷害ニ係ル要償ノ如キハ雙方ノ示談ニ任スヘシ

第三十六條 居留地外ノ旅宿其他ニ於テ私ニ外國人ヲ止宿セシメ又ハ居留地外ニ住居スル官私雇外國人ノ家宅ニ同居若クハ止宿スルコトヲ見聞シ事實ヲ確知シタルニ於テハ警部ニ申報スヘシ

第三十七條 居留地外ニ於テ外國人ノ商業ヲ營ムヲ見聞シタルトキハ禁止ノ旨申諭シ其國號氏名居留所旅宿等ヲ聞糺シ直ニ警部ニ申報スヘシ但既ニ商業ヲ爲シタル證蹟アルモノハ證據物件ヲ取纏メ速ニ警察署ニ送致スヘシ



第三十八條 外國人ノ住居ヨリ出火スルトキハ臨機消防ニ從事スヘシト雖モ家主請求スルニアラサレハ室内ニ入り又ハ物品ヲ運搬シ家屋墻壁等ヲ破毀スヘカラス

第三十九條 外國人途上ニ於テ醉倒スルヲ認ムルトキハ懇切ニ介抱シ住所氏名ヲ問ヒタル上本國領事官ニ引渡スヘシ領事官駐在セサル地ニ在テハ本人住居又ハ最寄ニ於ケル其相知者ノ許ニ送り達スヘシ住所分明ナラサル者ハ警察署ニ連行キ醉ノ醒ルヲ俟テ國號氏名居留所旅宿等ヲ聞知シ放遣スヘシ

第四十條 外國人不慮ノ危難ニ遇フヲ見聞スルトキハ直ニ之ヲ救護スヘシ  
第四十一條 外國人喧嘩爭鬪ヲ爲シ若クハ暴行等ノ所爲アルトキハ穩ニ之ヲ制止シ尙ホ肯セサルトキハ差押ヘ且警察署ニ引致スヘシ

第四十二條 外國人途上ニ於テ發病困難ノ趣ヲ見聞シタルトキハ速ニ相當ノ手當ヲ施シ其國號氏名居留所旅宿等ヲ問ヒ直ニ警部ニ申報スヘシ  
第四十三條 外國人途上ニ於テ變死シタル者アルトキハ其原狀ヲ變セサル様取締ヲ爲シ速ニ警部ニ申報スヘシ

第四十四條 外國人市街ヲ歩行シ又ハ買物等ヲ爲ストキ内國人數人取圍ミ見物

スルヲ撞見セシトキハ制止スヘシ

### 外國人犯罪取扱

(沿革)明治七年一月達第十四號ヲ以テ司法警察規則ヲ定ム○同年九月達第百廿八號ヲ以テ司法警察規則附録ヲ定ム○九年四月達第三十九號ヲ以テ司法警察規則ヲ廢シ附録ハ廢セス○十六年三月司法省丙第一號ヲ以テ刑事裁判上外國公使館内國人ニ對シ發スル令狀執行手續ヲ達ス

○太政官達第百二十八號 明治七年九月二十九日

使 府 縣

### 司法警察規則附録

#### 外國公使及公使館屬員ノ事

第一條 外國公使ハ我國憲ヲ以テ羈縻スヘカラサル通義ナレハ是ヲ擴充スル時ハ其家族並公使館屬員ノ書記官隨員公使ノ僕隸書記官ノ家族及書記官及其家屋車馬迄モ同様ナリト思量スヘシ

第二條 内國人公使館又ハ公使ノ書記官ニ備ハレ公使館ノ名籍ニ在ル間ハ公使館ノ屬隸ト見做シ若シ事故アリテ逮捕セサルヲ得サルカ或ハ呼出シテ糾問セサルヲ得サル時ハ外務省ヲ歷テ公使館ヘ報知シ其唯諾ヲ待チテ後呼出スヘシ尤其者ヲ處分スルハ公使ノ關係スルコトニアラス



第三條 内國人各公使館及書記官ニ備ハレ中ハ其公使又ハ代理ヨリ其者ノ名籍ヲ外務省ヘ届出外務省ハ其届書ヲ速ニ司法警察官吏ヘ送達シ置ヘシ警察官吏ハ常ニ其姓名ヲ簿記シ置ヘシ若シ途中ニテ或ル人ヲ引留其名籍ノ在ル所ヲ聞糺ス時公使館ニ備ハレ中ト稱スル時其簿記ト校照シ愈相違ナキ時ハ一旦公使館迄同道シ照會ヲ遂ケタル後其處分ヲ施スヘシ若シ其姓名簿中ニ在ラサル者ニテモ其本人決シテ相違ナキ旨ヲ述ル時ハ公使館ヘ同道シ右ノ如ク處置スヘシ但重科ニテ捕縛セサルヲ得サル者ハ第六條ニ照シテ處分スヘシ

外國公使館ノ事

第四條 外國公使館内ヘハ事故アリテ館主ヨリ請求スル時ノ外決シテ立入ルヘカラス若シ重科ヲ犯シタル罪人ト見認タル者奔逃シテ門内ニ匿入セシ等毫髪ノ間モ猶豫スヘカラサル時ハ其把門者ニ告ケ其館主ノ許可ヲ受テ後館内又ハ邸内ヲ探索スヘシ

第五條 右公使館書記官ノ住宅内ニ在ル内外屬員ハ勿論車馬家畜ノ未ニ至ル迄一切手ヲ觸ルヘカラス若シ職務上止ムヲ得ス手ヲ降スヘキ事故アラハ是ヲ外

務省ニ打合セ而シテ其處分ヲ爲スヘシ

外國公使館屬員罪ヲ犯シ竝犯罪ノ内國人公使館ニ住居スル時ノ事

第六條 外國公使館ノ屬員ナル外國人殺傷或ハ剽盜放火強姦等目前ニ顯ハレタル罪ヲ公使館外ニテ現ニ行フヨ見及フカ或ハ現ニ見スト雖モ衆人ヨリ報告シ確證アリテ片時モ猶豫ナシカタキ時ハ其人ヲ其場ニ引留置即刻公使館ヘ報知ノ上同館ヘ引渡シ又外務省ヘ報知シ是ヲ公使館ニ引渡セシ手續ヲ申スヘシ決シテ手鎖捕縛等ノ事アルヘカラス或ハ屬員ノ内國人ハ引留置即刻公使館ヘ報知シ改メテ彼ヨリ引渡ヲ受クルノ手續ヲ施シ又是ヲ外務省ニ申スヘシ

第七條 犯罪ノ風聞アルカ或ハ他人ノ白狀ヨリ明了ニ其罪科ノ知レタル内國人現ニ公使館内ニ備ハレテ公使館ニ住居スル時ハ其館外周圍ノ各路ヲ遮斷シ而後外務省ヘ報知シ同館ヘ照會ヲ乞ヒ館主ニ引渡シヲ要求シ其人ヲ受取リテ後之レヲ捕縛スヘシ若シ館主之ヲ拒ム時ハ其旨ヲ猶外務省ニ通知シテ其處分ヲ定ムヘシ

○司法省達丙第一號 明治十六年三月十二日



大審院 警視廳裁判所 府縣東京府

刑事裁判上在本邦外國公使館ニ備ハレタル内國人ニ對シ發スヘキ令狀ハ明治七年第二百二十八號公達ニ據リ公使館ニテ唯諾ノ上執行セシムヘキハ勿論ニシテ其唯諾ヲ經ルノ手續ハ明治十四年第五十三號公達ノ旨モ有之ニ付大審院並裁判所ハ其事柄ヲ明記シ當省ヘ申出指令ノ上其令狀ヲ發シ又警視廳府縣ニ於テハ其長官ヨリ内務省ヘ申出右唯諾ヲ經ルノ手續ヲ了シ令狀ヲ執行セシムヘキ儀ト心得ヘシ爲念此旨相達候事

但本文令狀執行者ハ專ラ明治七年第二百二十八號公達ノ趣旨ニ據リ聊不都合ノ取計無之様厚ク注意セシムヘシ

○司法省訓令刑甲第四號 明治二十二年一月十七日

警視廳 北海道廳 府縣東京府

清國人帝國內ニ於テ重罪輕罪ヲ犯シ治罪法第百條第百一條ニ相當シ急速ヲ要スル場合ニ於テハ逮捕其他警察上ノ處分ヲ爲スヘシ  
但本文ノ場合ニ於テ其處分方ハ司法警察訓則第四百七十七條ノ區分ニ從フヘシ

○外務省内訓 明治二十三年六月十八日

外國ニ於テ罪ヲ犯シタル外國人其管内ニ逃亡シ來リタルコトヲ認知シタルトキ及外國領事カ其管内ニ於テ外國人ヲ逮捕シタル場合ニ於テ本人ハ外國ニ於テ罪ヲ犯シ本邦ニ逃亡シ來リタル刑事被告人ナルカ又ハ逃亡既決囚ナルコトヲ探知シタルトキハ本人ノ國籍出發地名犯罪ノ性質等ヲ聞知シ其管内ニ到着後ニ於ケル本人ノ舉動等ヲ速ニ當省ヘ申報セラルヘシ

○布告無號 明治二年二月五日

先般東京開市ニ付鐵砲洲外國人居留地最寄ノ町々場所御取極メ家屋敷相對借ノ儀兼テ御差許相成居候所右場所狹少ニテ開市差支ノ筋モ有之ニ付今般改テ稻荷橋真福寺橋紀伊國橋汐留橋濱殿橋東手右ノ川筋ヲ境界ト相定區内一圓外國人相對借ノ儀御差許相成候間爲心得相達候事

但相對借年限可爲五ヶ年事

○布告第二十七號 明治十年三月六日

外國人傭入候節ハ左ノ通可相心得此旨布告候事

一 各官廳ニ於テ外國人傭入候節ハ其國所姓名業務給料住所期限及繼備解備



共其時々外務省へ通知スヘシ

一 人民ニ於テ外國人ヲ備入ント欲スル者ハ其管轄廳ヲ經由シテ前項ノ件々外務省ニ届出ツヘシ

一 私備外國人ヲ其業務等ノ都合ニヨリ居留地外へ居住爲致度者ハ地方官添書ヲ以テ外務省へ伺出其許可ヲ受クヘシ

○太政官達第三十二號 明治十六年八月三日

官 省 院 局

自今各廳ニ於テ外國人ヲ備入レ及ヒ備繼又ハ其給料等ヲ増加セントスル時ハ豫メ伺出又ハ給料ヲ減省スルモノハ其都度届出ヘシ此旨相達候事

但警視廳及ヒ府縣ノ分ハ主管ノ上司ヨリ伺出ヘシ

○内務省達丙第四十一號 明治十六年十月廿五日

警 視 廳 府 縣

本年八月太政官第三十二號ヲ以テ外國人備入及解雇方等ノ儀達相成候ニ付テハ備入備繼又ハ其給料等ヲ増加セントスルトキハ其金額事由ヲ詳記シ主管ノ省へ具申可致且解備又ハ給料ヲ減省スルモノハ其都度届出ヘシ此旨相達候事

○内務省達乙第四十二號 明治九年三月三十日

府 縣

外國人居留地外ニ住居之儀是迄雇人ニ限リ特別許可有之其同姓之親戚及外國人婢僕ハ届出之上同居爲致差支無之儀ニ候處其他之外國人ヲ一時之止宿ニ非スシテ同居爲致候儀ハ不相成候條人民之内外國人ヲ雇入候者へモ夫々達方可取計此旨相達候事

○太政官達無號 明治七年二月八日

院省使備入ノ外國人東京府下在留ノ者ハ其國名人名住所備期限等詳細取調同府へ可通達且向後新ニ備入又ハ備繼及轉居等ノ節モ同様可相心得此旨相達候事但備入ノ外若シ同居ノ外國人有之候ハ、國名人名身分及同居ノ譯柄等取調可致通達事

○内閣訓令第四號 明治二十三年四月二十五日

各 官 廳

明治十六年太政官第三十二號達ヲ廢ス但外國人雇入並雇繼雇止ノ節ハ其時々内閣ニ報告スヘシ



○布告無號 明治三年閏十月十二日

東京在留外國人遊歩規程別紙之通ニ候條此旨相達候事

(別紙)

東京居留外國人遊歩ノ規程別紙圖面(ス)之通新利根川<sup>又江</sup>トモ云フ川口ヨリ北ノ方金町迄夫ヨリ西ノ方水戸街道千住宿大橋迄夫ヨリ隅田川ヲ登リ上古谷上郷迄夫ヨリ小室村高倉村小矢田村萩原村宮寺村三木村田中村諸村ヨリ朱引之通日野渡場迄夫ヨリ玉川口迄ヲ以テ限リトシ右區内ハ外國人共遊歩御差許之儀ニ付勝手ニ徘徊イタスヘク就テハ彼我禮義モ異リ殊ニ彼方貴人モ手輕ニ旅行イタシ候振合ニテ在々人民ノ未タ外國人之情態ヲモ熟知セサル故接對方ニ於テ不都合ノ筋ハ勿論不作法等有之候テハ不相濟儀ニ付末々迄相互ニ心附兼テ御布告之趣心得違無之様可致事

一 外國人遊歩之節若途中ニオイテ休息又ハ薄暮ニオヨヒ止宿等相望候ハ、所役人方へ案内イタシ差支無之場所ニ候ハ、望通取計可遣旅籠代ノ儀ハ相對ヲ以請取可申事

一 外國人出先ニオイテ差掛リ人足履度旨申出候ハ、相當之賃錢請取身元相

分リ居候モノ差出候様可致事

一 外國人共門塀等アル場所ハ勿論招キニアラスシテ人家へ猥リニ不立入等ニ候得共若シ庭構園地等一見イタシ度旨申聞候ハ、立入不苦場所へハ案内致スヘク差支有之場所ハ相斷可申事

一 社寺ハ庶人立入拜禮致候場所迄立入候儀ハ不苦靈祕ニイタシ庶人猥リニ不爲立入場所其餘廟所墳墓又ハ境内ノ切之場所ハ相斷可申尤彼方懇望ニテ其主司ニオイテモ強テ差支無之候ハ、臨機之取計ヲ以差許候トモ不苦事

一 東京開市場之外諸村ニオイテハ外國人ト商賣取引不相成筋ニ候得共通行之節聊ノ土産物等賣得ノ儀相望候ハ、賣渡候テ不苦萬一拔荷密商等ノ所業ニ及ヒ候ハ、屹度答可申付候條若拔荷密商等見出候歟又ハ企候モノ有之ヲ承リ込候ハ、速ニ東京府又ハ其支配之役所へ可訴出其品ニ寄褒美可被下事

一 宗門之儀前々ヨリ之御法度相守彌以堅ク可相制若異宗門之噂イタシ又ハ申勸候モノ等有之候ハ、其段早速其支配之役所へ可訴出事

一 阿片烟草吸喫致候儀ハ嚴禁ニ付萬一竊ニ相用候歟又ハ所持イタシ候歟或ハ外國人ヨリ密ニ買取候モノ及見聞候ハ、前同様可訴出事



一 外國人ニ對シ亂暴狼籍ニ及ヒ候テハ禮儀ヲ失ヒ候恥辱ノミナラス第一御威光ニモ相拘リ以ノ外ノ事ニ付兼テ御布令モ有之今後右様心得違ノ者ハ無之筈ニ候得共町村ニオイテモ兼テ手筈申合せ置萬一狼籍ニ及候者有之節ハ所ノモノ打寄擗取若シ手ニ餘リ候ハ、打果シ候トモ不苦若シ取逃シ候ハ、地元町村ヨリ時刻ヲ不移其支配之役所並東京府へ口上ヲ以成トモ手分ケイタシ迅速ニ届出可候其餘詮議ノ手掛ニ可相成儀等及見聞候ハ、聊之事ニテモ不隱置是又早々可申出其品ニ寄夫々御褒美可被下事

附亂暴ヲ受候外國人ノ國名姓名等相分リ候丈ケ承糺シ可申立且當人ハ手當行届候丈ケ介抱致シ精々心附可遣萬一絶命ニ及候ハ、大切ニ守護イタシ差圖相待可申事

右之條々急度可相守若シ後日之引合ヲ通シカタメ及見聞候儀ヲ押隱シ追テ顯ル、ニオイテハ當人ハ勿論所役人迄モ夫々嚴重咎可申付候條心得違無之様可致自今以後年一度ツ、其所役人ヨリ前書之趣小前之モノへ爲讀聞無遺失様可相守モノ也

○布告第三百五十六號 明治五年十一月二十三日

外國人願濟ノ上内地通行ノ節宿料並ニ人馬賃錢等過當ニ申掛間敷ハ勿論ニ候得共最初取極ノ權ナラサルヨリ往々遣拂方齟齬ニ至ル向モ有之由依テ自今差掛リ人馬雇方並ニ止宿ノ儀申入候ハ先ツ其宿料及賃錢等ノ約束ヲ定メ其上取扱可申萬一違約ノ者モ有之ニ於テハ速カニ其筋へ可申出候事

○太政官達第百八十九條 明治八年十一月二日

關係使府縣

外國人遊歩規程内ニ於テ籠旅渡世ノ者ニ限リ外國人止宿差許候條外國人止宿セシメ候節ハ宿主ヨリ戸長又ハ扱所へ可届出若シ病氣療養ノ爲メ永ク止宿セシメ候節ハ日數七日毎ニ管轄廳へ届出候様可致此旨相達候事

○内務省達丙第六十四號 明治八年十一月十二日

關係府縣

外國人遊歩規程内市街村落ニ於テ止宿ノ儀ニ付第百八十九號御達ノ趣モ有之候ニ付テハ外國人病氣養生ノタメ旅亭へ長ク止宿ノ儀宿主ヨリ都度々々届出ル時ハ其廳ニテ承リ置クヘシ若シ右外國人止宿ヲ名トシ地所家屋ヲ賃借スルカ商賣取引スルカ又ハ其事ヲ企ル趣相顯レ候節ハ場所立掃ハセ可申此旨相達候事



○太政官達第四十號 明治十一年九月九日

關係使府縣

明治八年十一月第一第八十九號ヲ以外國人遊步規程内止宿ノ儀ニ付相達置候處自今旅籠渡世ニアラスト雖モ兼テ懸意ノ外國人ヲ招泊セシメ又ハ疾病其他止ムヲ得サル事故アリテ宿泊セシムルハ若シカラス尤戸長又ハ役場へ届クルハ前達ノ通可相心得此旨相達候事

○太政官達第三十八號 明治十二年十月九日

使府縣

旅行免狀ヲ所持スル外國人旅行ノ節疾病其他不得已事故アルトキハ旅籠渡世ノ者ニ無之トモ一時宿泊セシメ不苦尤同時ニ必ス其事故ヲ詳記シ戸長役場へ可爲届出若シ滯留數日ニ及フトキハ七日毎ニ爲届出候様可致此旨相達候事

○太政官達第八十七號 明治七年七月十日

院省使府縣

公私雇入ノ外國人自今職務上又ハ疾病等無餘儀事故有之各地へ旅行候節ハ事由ヲ詳記シ其時々外務省へ申出通行免狀ヲ可受此旨相達候事

但從來渡置候通行免狀ハ同省へ可返付候事

○内務省達丙第四十四號 明治八年七月十八日

本月二日相達候外國人内地旅行願出候節相渡候免狀裏書示令ノ文字ヲ心得ト相改候且省使雇入外國人右同斷ノ節相渡候免狀別紙ノ通改正候條此旨爲心得相達候事

(別紙)

第 號

外國人旅行免狀

國籍

姓名

身分

寄留地名

旅行趣意

旅行先及ヒ路筋

旅行期限



右ハ 旅行ノ保證ヲ以前書掲載ノ場所へ旅行致度旨申立差許候條道筋無故障  
相通可申事

明治 年 月 日

外務省

裏書

内地旅行外國人心得

- 一 内地ヲ旅行スル外國人ハ總テ各地方ノ規則ニ遵依スヘシ
- 一 此免狀ノ日附ヨリ三十日間ニ必ス出立スヘシ
- 一 本文旅行日限ヲ定ムルト雖途中事故アリテ期限中ニ歸著スル能ハサル外國人ハ豫メ郵便ヲ以其國公使ヲ經テ其事故ヲ外務省へ申立ヘシ
- 一 此免狀返納期限ハ歸著ノ日ヨリ五日以内タルヘシ尤長崎函館等ノ遠方ヨリ出立シテ元地ニ歸著スル外國人ハ其國公使ヲ經テ外務省へ三十日以内ニ返送スヘシ
- 一 旅行中止宿所ニ於テ必ス其宿主ニ此免狀ヲ示シ止宿ヲ請フヘシ尤途中ト雖遲卒又ハ區戸長ヨリ免狀ノ検査ヲ請フ時ハ必ス此免狀ヲ示スヘシ如何ナ

ル事故ヲ以辭柄トナストモ之ヲ示サ、ル外國人ハ差押ノ處分ヲ受クヘシ

一 此免狀ハ一人一已ノ用ヲナシ他人へ貸與フルヲ許サス

一 此免狀ヲ受テ内地ヲ旅行スル外國人ト雖各地方ニ於テ日本人民ト賣買取引及ヒ諸約定ヲ爲スヲ許サス

一 此免狀ニヨツテ旅行スル外國人内地ニテ日本人民ノ屋宅ヲ賃借シ又ハ寄留スルヲ許サス

一 遊獵ノ免許鑑札ヲ所持スル外國人ト雖内地ニ入テハ發砲遊獵スルヲ許サス

一 旅行中事故アリテ半途ヨリ歸著シ猶行盡サ、ル残りノ場所へ旅行セント欲スル外國人ハ假令許可セル場所ト雖一旦此免狀返納致シ更ニ旅行ノ許可ヲ受クヘシ

一 本文並此心得中掲載セル條例ヲ犯シタル外國人ハ外務省ヨリ一々其保證シタル公使へ告訴スヘシ

計十一款

○内務省達乙第百五十九號 明治八年十二月五日



外國人ノ内身分等級等有之者内地旅行ノ節ハ其都度相達來候處自今別段ノ取扱ヲ要セサルモノハ一々不相達候條免狀ニ記載有之身分ヲ證認シ不都合無之様可取計旨管下其向々へ相達置可申此旨相達候事

○内務省達乙第六十號 明治八年十二月七日

官民雇入外國人職務上ニ付各地方へ出張外國人ヲ從者ニ召連候節是迄主從一紙ノ免狀相渡來候處自今時宜ニ依リ別紙體裁ノ免狀從者へ相渡候儀モ有之候條此旨爲心得相達候事

(別紙)

第何號

何省使府縣雇

何國人

姓名召仕

外國人

朱印

右ハ何省使府縣何國人誰同省使府縣事務ヲ以何處ヨリ何處へ出張ニ付同所へ從行ノ儀開屆候條道筋無故障相通可申事

明治 年 月 日

外務省 朱印

○内務省達 明治八年七月二日

外國人内地々質物産等ノ學術研究或ハ病氣養生等無餘儀事故ヲ以テ内地旅行致候節沿道宿驛旅亭止泊ノ節宿主免狀檢査不致者モ有之且外國人ノ内ニモ免狀檢査相拒ミ候者モ有之候哉ニ相聞候ニ付今般外務省ニ於テ通行免狀表裏面共別紙雛形ノ通改正致候條宿驛旅籠渡世ノ者ニ於テ兼テ相心得外國人旅泊ノ節ハ右免狀一見ヲ了シ免狀ノ番號并國名姓名宿張ニ記載シ置後日取調ノ節胡亂ノ申出無之様可致最モ免狀改方等ニ付外國人身柄ニ應シ夫々相當ノ取扱致候様各管下宿驛へ兼テ布達可取計依テ別紙免狀雛形相添此旨相達候事

但遲卒區戸長等平常一々免狀相改候テハ煩雜ニ涉リ候ニ付以來ハ臨時取調等ノ節免狀相改候儀ト可相心得候事

(別紙)



(表書)

第 號

外國人旅行免狀

國 籍

姓 名

身 分

寄留地名

旅行趣意

旅行先及路筋

旅行期限

右ハ 〃ノ保證ヲ以テ前書掲載ノ場所ヘ旅行致シ度旨申立差許候條道筋無故障相通可申事

明治 年 月 日

(裏書)

外務省印

内地旅行外國人

心 得

- 一 内地ヲ旅行スル外國人ハ總テ各地方ノ規則ニ遵依スヘシ
- 一 此免狀ノ日付ヨリ三十日間ニ必ス出立スヘシ
- 一 本文旅行日限ヲ定ムルト雖モ途中事故アリテ期限中ニ歸着スル能ハサル外國人ハ豫メ郵便ヲ以テ其國公使ヲ經テ其事故ヲ外務省ヘ申立ヘシ
- 一 此免狀返納期限ハ歸着ノ日ヨリ五日以内タルヘシ最モ長崎箱館等ノ遠方ヨリ出立シテ元地ニ歸着スル外國人ハ其國公使ヲ經テ外務省ヘ三十日以内ニ遞送スヘシ
- 一 旅行中止宿所ニ於テ必ス其宿主ニ此免狀ヲ示シ止宿ヲ請フヘシ尤途中ト雖モ遷卒又ハ區戸長ヨリ免狀ノ檢査ヲ請フ時ハ必ス此免狀ヲ示スヘシ如何ナル事故ヲ以テ辭柄トナストモ之ヲ示サ、ル外國人ハ差押ノ處分ヲ受クヘシ
- 一 此免狀ハ一人一己ノ用ヲナシ他人ヘ貸與フルヲ許サス
- 一 此免狀ヲ受テ内地ヲ旅行スル外國人ト雖モ各地方ニテ日本人民ト賣買取



引及諸約定ヲ爲スヲ許サス

一 此免狀ニ依テ旅行スル外國人内地ニテ日本人民ノ屋宅ヲ賃借シ又ハ寄留スルヲ許サス

一 遊獵ノ免許鑑札ヲ所持スル外國人ト雖モ内地ニ入りテハ發砲遊獵スルヲ許サス

一 旅行中事故アリテ半途ヨリ歸着シ猶行盡サ、ル殘ノ場所ヘ旅行セント欲スル外國人ハ假令許可セル場所ト雖モ一旦此免狀返納致シ更ニ旅行ノ許可ヲ受クヘシ

一 本文並此心得中掲載セル條例ヲ犯シタル外國人ハ外務省ヨリ一々其保證シタル公使ヘ告訴スヘシ

計十一款

○外務省訓示 明治廿一年二月三日

今般外國人取扱及外國人旅券之義ニ付別紙甲乙號之通り愛知縣知事伺ニ對シ及指令候條其縣ニ於テモ右同様之場合差起候節ハ該指令之趣ニ準シ取扱可致此段爲心得愛知縣知事伺及指令書寫別紙甲乙號ヲ以テ及訓示候也

(別紙)

(甲號)外國人取扱之義ニ付伺 明治二十年十月十四日

一 人民ニ於テ學校教師トシテ外國人ヲ雇入管下ニ僑居候者ハ其業務課目明細書ヲ雇主ヨリ差出サシメ時々學務係視察可致旨明治十二年四月廿一日付送第二號ヲ以テ御達相成候處右ハ今日ト雖モ猶其手續ヲ履行スヘキ筈ニ候哉

一 病氣保養又ハ學術研究ノ旅行免狀ヲ所持セル外國人内地ニ滞留中公私學校ノ教師ト爲ツテ生徒ヲ教授シ(其俸給ノ有無ニ關セス)或ハ教會場等ニテ宣教ヲナスモ妨ナキヤ

一 同上ノ外國人内地ニ滞留中自己ノ名義ヲ以テ學會等ヲ開設シ人衆ヲ招集(其廣告ノ有無ニ關セス)スルキハ警察官ニ於テ懸諭差止め可然哉

一 同上ノ外國人疾病其他不得止事故有之滞留數日ニ及フキハ七日毎ニ戶長役場ヘ可届出旨明治十二年十月九日付第三十八號ヲ以テ御達相成候然ルニ若シ疾病其他不得止事故アルニアラス徒ニ滞留數日ニ及フキハ警察官ニ於テ懸諭退去セシメ可然哉



右相伺候條至急御指揮有之度候也

○外務省指令 明治二十年十一月二十一日  
伺之趣左ノ通可心得候事

第一項 申出之通

第二項 旅行免狀ハ病氣保養若クハ學術研究ノ爲メニノミ賦與スルモノニシテ  
學校教師トナルカ如キハ右目的外ノ事タルヲ以テ之ヲ許可スヘカラス尤モ教  
會場等ニ於テ臨時宣教ヲ爲スハ不問ニ措クヘシ

第三項 自己ノ名義ヲ以テ學會等ヲ開設スルハ相成ラス

第四項 旅行免狀ニハ内地旅行ヲ爲シ得ル期限ヲ記載スルノミニシテ各地方滯  
留日數ノ制限ナキヲ以テ免許期限内ハ退去セシムルニ及ハス

(乙號)外國人旅券等ノ義ニ付伺 明治二十一年一月二十日

第一項 雇外國人中旅行ノ途次雇入契約ヲ爲ス者アリ右ハ全ク健康保養又ハ學  
術研究ノ身分ニ付更ニ往復旅行免狀ヲ貴省ヘ請求致來候處或ハ最初ノ旅券尙  
ホ其期限内ニ在ルヲ以テ之ヲ携帶旅行セント欲スル者有之候得共爰ニ雇主ア  
ツテ新ニ旅券并ニ僑寓證ヲ下付シタル上ハ舊旅券ハ自然無効ノ者ト被存候就

テハ右外國人ニシテ最寄開港場へ旅行セントスルキ私雇外國人ハ各地旅行免

狀第二項ニ據リ雇主ヨリ其管轄廳へ添書ヲ請求スヘキ者ト心得可然哉

第二項 客年十月十四日付本縣伺外國人取扱方第二項御指令ニ依レハ内地旅行

中ノ外國人教會場等ニ於テ臨時宣教ヲ爲スハ不問ニ措クヘシト有之又第四項

御指令ニ依レハ内地旅行ヲ爲シ得ル期限ヲ記載スルノミニシテ各地方滯留日

數ノ制限ナキヲ以テ免許期限内ハ退去セシムルニ及ハスト有之彼是對照スル

キハ内地旅行ノ免狀ヲ有スル數多ノ外國人六ヶ月間某内地ニ止宿シテ時々宣

教ヲ爲シ滿期後更ニ同旅券ヲ得テ同所爲ヲ行フキハ居留地外自ラ居留地ノ形

狀アルカ如ク相見ヘ候ヘトモ其之ニ對シテ毫モ制裁無之候哉

第三條 官私雇外國人ノ往復旅行免狀ハ其表面記載ノ場合ニノミ適用スヘキ者

ニ付休暇日等ノ節臨時遊歩セント欲スルキハ明治十二年一月七日付御達ニ據

リ一日ニ往返スヘキ場所ニ候ハ、縣ノ内外ヲ問ハス日ノ多少ヲ論セス(病氣事

故若クハ休暇日累加等)有効ノ者ト被存候處右免狀ハ其志願ニ依リ豫メ之ヲ下

付スルモ差支無之哉又ハ其都度下付スヘキ筈ニ候哉

右相伺候條至急何分ノ御指揮有之度候也



○外務省指令 明治二十一年一月二十七日

伺之趣左ノ通り心得ヘシ

但伺之事項ハ當省主管ノ件ニ付本大臣限リニテ指令ス

第一項 外國人健康保養若クハ學術研究ノ爲メ免狀ヲ得テ内地旅行中日本人ト諸般ノ約定ヲ爲スハ右旅行免狀裏書第七項ヲ以テ制禁シタル義ニ有之候ニ付若シ右ノ外國人日本人ニ雇ハレント欲スレハ必ス一旦現住ノ居留地ニ立戻リ旅行免狀ヲ當省へ返納シタル上傭雇ノ契約ヲ爲シ雇主日本人ヨリハ同人ノ爲

●居留地外住居免許ト往復旅行免狀下付トヲ請求シ右免狀ヲ得タル上始メテ被雇外國人ハ被雇地方へ向發程シ得ル筈ニ有之候隨テ伺ノ如ク日本人ニ雇ハレタル後尙曩ニ付與セラレタル通常内地旅行免狀ヲ所持スル場合ハ無之筈ニ候處自然是迄其縣取扱中誤テ旅行中契約ヲ爲シタルモノヲ其儘認可シ居留地外住居及ヒ往復旅行免狀下付取計ヒタルコト有之候ハ、無論其際最初付與シタル通常内地旅行免狀ハ無効ト相成タルモノニ付此際其公使ヲ經テ當省へ返納セシム可シ而シテ其後右外國人所用アリテ最寄開港場へ赴カントスル節ノ取扱方ハ伺ノ通り

第二項 内地旅行免狀ハ病氣保養若クハ學術研究ヲ目的トスル場合ニ限リ付與スルモノニ有之右免狀ヲ所持スル外國人ニシテ永ク一ノ地方ニ住居スル義ハ無之筈ニ候處宣教ノ爲メ旅行免狀ヲ其目的外ニ使用シテ一地方ニ常住スルモノ有之候ハ、一件毎ニ付事情ヲ斟酌シテ相當ノ處分ニ可及候間其國籍姓名及平素之舉動等詳細具申スヘシ

第三項 伺之文意稍ヤ不分明ニ候處前畧右免狀ハ其志願ニ依リ豫メ之ヲ下附スルモ差支無之哉云々ノ右免狀トハ明治十二年一月七日付寺島外務大臣ノ通達ニ係ル被雇外國人一日限歩行免狀ヲ指シタルモノニ有之候ハ、遊歩ノ度毎ニ下附スルノ手數ヲ爲スニ及ハス候條豫メ之ヲ下附シ置キ解雇ノ節返納セシムヘシ尤モ該免狀ヲ以テ遊歩ヲ爲シ得ル區域ハ縣ノ内外ヲ問ハスト雖モ其効ハ一日間ノ歩行ヲ許スニ過キササルモノナレハ心ス當日中ニ僑寓ニ歸着スヘキ筈ニ有之隨テ急病等眞ニ已ムヲ得スト認ムル場合ノ外ハ何等ノ事故申立候トモ遊歩先ニ於テ宿泊ヲ許スヘカラサル義ト心得ヘシ

○外務省内訓 明治廿二年六月廿二日

外國人遊歩規程外通行ノ節心得方ノ義ニ付テハ曾テ相達置候儀モ有之候所近來



鐵道線路日ヲ追テ諸道連絡ノ勢ニ付自然外國人ノ内不案内ヨリ無免狀ニテ乘車遊歩規定外ノ地へ相越候哉モ難計ニ付外國人ニシテ鉄道停車場ニ臨ミ乘車セントスル者アルキハ臨場ノ警察官ニ於テ免狀所持ノ有無并ニ旅行先等ヲ承糺シ無免狀ノ者ハ勿論假令免狀所持ノ者ト雖モ其免許地外ニ達セントスルモノハ當省ノ許可ヲ要スル旨ヲ一應説諭ノ上乘車切符ノ賣渡ヲナサ、ル等豫シメ其取締方夫々へ達シ置カレ度候此段爲念及内訓候也

○外務省内訓 明治二十四年九月二十九日

從來本邦人雇入レノ外國人ヲ其業務ノ都合ニ由リ居留地外へ僑居セシムルハ條約以外ノ特例ニシテ特別ノ場合ヲ除クノ外ハ學術工藝傳習ノ爲、雇入ル、場合ニ限リ明治十年太政官布告第廿七號ニ據リ雇主ヨリ願出ノ上本大臣ニ於テ特ニ許可ヲ與フルモノニ有之決シテ演戲興行及其他ノ目的ヲ以テ雇入ル、外國人ニ許可スヘキモノニ無之候就テハ向後其縣人民ヨリ私雇外國人内地僑居ノ義願出候節ハ右ノ趣旨ニ準シ御處分有之度此段及内訓候也

(參照)

○新潟縣問合 明治十七年五月十六日

兼テ許可ヲ得テ居留地外へ僑寓ノ私雇外國人ニシテ期限ヲ定メ近傍某郡遊歩ノ義願出候節ハ既ニ居留地外僑寓許可ノ者ニ付縣限リ開置候テ不差支筋ニ候哉爲心得此段及御問合候也

○外務省回答 明治十七年五月二十日

私備外國人近傍遊歩ノ儀ニ付本月十六日付ヲ以テ御問合ノ趣了承右ハ管内管外ヲ不問一日間ニ往復シ得ヘキ場所ニ限リ差許候例規ニ有之候間別紙表裏面ノ通記載ノ免狀御調製ノ上御附與有之度尤モ遊歩里程隣縣へ推及スヘキ義ニ候得ハ本文ノ趣其縣ヨリ隣縣へ御照會相成度此段回答旁申進候也

本縣雇外國人遊歩免狀表 (内ハ朱書)  
(何 處)  
(何 誰 雇)  
(何 國 人)  
(何 氏)

右(何)氏(學術研究ノ病氣養生)ノ爲雇職休暇ノ節一日間ニ往返シ得ヘキ場所歩行候義外務省ノ許可ヲ得聞届候事  
明治(何)年(何)月(何)日

縣 名 (印)  
外國人遊歩心得(裏)  
一此免狀ヲ受ケテ本縣管下及管外へ遊歩スル外國人ハ總テ各地方ノ規則ニ遵依スヘシ  
一此免狀ハ表面記載ノ者所持スルヲ許シ事故ヲツテ來ル他ノ外國人ヲ同行シ又ハ貸與スルヲ許サス  
一此免狀ヲ受ケタル外國人遊歩ノ途次日本人民ト賣買取引及諸約定ヲナスヲ許サ



ス若シ其所業又ハ類似ノ所業アリト認定スルハ其品物金額トモ一旦引上クヘシ  
 一遊藝免許鑑札ヲ所持スル外國人ト雖モ内地ニ入りテハ發砲遊藝スルヲ許サス  
 一此心得條款ヲ犯シタルハ直ニ遊歩ヲ差止ムヘシ

計五款

一此免狀ハ雇ヲ解キ縣地ヲ退去ノ節必ス返納スヘシ若シ解雇後此免狀ヲ所持スル  
 其効力ナキモノトス

○秋田縣請訓 明治十八年六月三日

外國人宣教師等妻子ヲ携帶シ管内各所ヲ旅行シ或ハ數十日或ハ數月間滯留致候者  
 モ有之明治十二年第三十八號公達及明治八年御省丙第四十四號御達ニ準據難致  
 モ有之取扱上差支候ニ付ノ左條々相伺候條至急御明示相成度候  
 一旅行免狀無之者ハ勿論免狀所持スト雖モ日限已ニ經過シテ無効ニ屬シタル者ハ  
 差押置其旨相伺候上進退可爲致哉又ハ直ニ寄留地ヘ可歸行旨諭示致シ可然哉  
 一布教等ノ爲メ長々滯在シ免狀日限切迫シ猶滯留セント欲スル者ハ本人共ヨリ該  
 國公使ヲ經テ外務省ヘ日繼願可差出旨諭示シ日限經過スルモ其儘差置不苦候哉  
 一滯在中夫妻子女ノ内病死致候者有之節ハ彼等ノ意向ニ任セ明村共同ノ葬場又ハ  
 火葬ヲ爲致不苦候哉  
 右請訓條也

○内務省訓示 明治十八年九月二日

第一項 後段申出之通  
 第二項 事實ヲ具シ伺出ヘシ  
 第三項 滯在中病死シタル外國人ヲ其土地ヘ埋葬或ハ火葬致度旨申出候節ハ其都  
 但旅行免狀ノ義ハ病氣療養又ハ學術研究ヲ除ク外ハ總テ付與セサルモノトス

○長崎縣伺 明治二十一年十月

度事實ヲ具シ外務省ヘ伺出同省ノ指令ヲ待テ處分スヘシ  
 長崎港内外國人居留地ノ義ハ内國人ノ雜居ヲ禁止シ既ニ縣定違警罪ヲ以テ狃リニ  
 雜居スル者ニ對シ制裁ヲ加ヘ來リ候處往々外國人ヨリ地所并ニ家屋ヲ借受ケ居任  
 シ又ハ外國人ニ於テ自己ノ雇人同居人杯ト稱シ内國人ヲ居留地内ニ居任セシメ其  
 實住宅等賃貸致候モノ有之時々退去ヲ命シ候得共何時トナク又入來リ底止スル處  
 無之然ルニ一般警察上其他身分上ノ取締方等居留地外ト同一ナラサル難モ有之候  
 處今後ハ内國人ニシテ外國人ト協議居任セントスル者ハ其時々出願セシメ所屬領  
 事ニ協議シ特許ヲ與ヘ身分上ニ關シテハ長崎區長ニ之ガ管理ヲ爲サシメ營業上其  
 他地方稅區町村費ハ一切稅則ニ照シ賦課徵收シ警察取締上ニ於テハ居留地外ニ任  
 居スルモノト同様取扱致度尤モ御指令濟ノ上ハ各國領事ヘ通牒ノ上夫々執行可致  
 候條此段相伺候也

○外務内務大藏三省指令 明治二十一年十二月

伺之通

○長崎縣伺 明治廿二年二月二日

當長崎外國人居留地大浦町住米國人エ、エフ、ジョンナル者從來馬匹數頭ヲ飼  
 養シ重モニ外國軍艦水兵等ニ賃貸借馬營業致居候處尚又同居留地松枝町旅店營業  
 英國人エ、エ、ツ國ウエナル者ハ人力車數輛ヲ備ヘ置キ輓子(内國人)ヲ雇ヒ入レ自家旅  
 店ノ乘用ニ供シ度旨令般當廳ヘ直チニ顯出候ニ付領事ヲ經由シテ可申出旨申聞ケ  
 書面ハ一先ツ却下致置候處右等ハ純然タル一個ノ營業ニシテ其往返スル處ハ獨リ  
 居留地内ニ止マラス就テハ彼我條約以外ノモノタルハ勿論自用ノモノトモ難認且  
 右等營業ヲ默許致置候時ハ漸次各種ノ營業ヲナシ其停止スル所ナキ而巳ナラス内



國人ノ營業上ニ影響ヲ及ホシ候ニ付右等ノ營業ハ勿論其他彼我條約以外ノ者即チ貿易ノ範圍外ニ係ルモノハ警察取締上ニ付テハ可成縣定營業取締規則ヲ遵守セシメ又借馬營業ノ如キ未タ該規則ナキモノト雖モ內國人ト同様取締法ニ服從セシメ且縣定相當課稅ノ許可候トモ不都合有之聞敷若シ前段ノ通り違奉セサルニ於テハ斷然其所爲ヲ差止メ候様取計致度此段相伺候也

○外務内務大藏三省指令

伺ノ趣左ノ通心得ヘシ  
外國人ト雖モ內國人ト同一ノ取締法ニ服從シ其縣定相當ノ課稅ヲ支辨スルニ於テハ許可シ不苦若シ違背スルトキハ其營業ヲ差止ムヘシ

○滋賀縣伺ニ對シ

○外務内務兩省指令 明治二十二年八月

本年七月九日付秘第二二五號伺外國人取扱ノ件左ノ通心得ヘシ  
一條約未濟國ノ人民瀟車ニ乗シ切符示定外ノ地ニ到リ不足ノ貨錢ヲ支辨スル能ハサルトキハ外國人同様取扱フヘシ  
二條約國ノ人民內地旅行免狀ヲ携帶セス瀟車ニ乗シ內地ヲ旅行スル者アルトキハ其切符示定外ノ地ニ到リ不足貨錢ヲ支辨スル能ハサルト否トニ拘ハラズ本人ヲ發程地ニ立戻ラシメ無免狀遊歩規定外ニ到リタル所爲ニ對シ最寄所轄領事ニ求刑ノ手續ヲ爲スヘシ其不足貨錢ノ如キハ其縣ヨリ代償スヘキ限ニアラス  
三內地旅行免狀ヲ携帶スル條約國ノ人民旅行免狀區域內ニ在リテ乘車切符示定外ノ地ニ至リタル時モ前項ノ通り不足貨錢ハ其縣ヨリ代償スヘキ限ニアラス

○警保局長通牒

別紙參考ノ爲メ及回送候也  
(別紙)

○滋賀縣伺 明治二十二年一月十二日

第一條 (第三十五章犯人護送部ニ掲ク)  
第二條 前條輕罪以上ノ罪ヲ犯サスト雖モ旅行免狀ヲ携帶セス內地ヲ旅行スルヲ瞳見シ其發程地ニ立戻ラシムルニ當リ所持金ナキヲ以テ瀟車賃又ハ食料等支辨スル能ハサルモノハ其費用ハ前條同様何レヨリ支出取計可然哉

○内務外務兩省指令 明治二十三年一月十日

第二條 警察費ヲ以テ一時操替支辨ノ上開港場縣知事ニ依頼シ本人ヨリ償却方所轄領事ヘ照會スヘシ

○太政官達第六十號 明治十八年十一月二日

官省院廳府縣

外國船ヲ雇入レ開港場及不開港場ヘ回船ノ儀ニ付明治七年九月十五號ヲ以テ相達候處自今不開港場ヘ回船ノ節ニ限リ其雇入レタル官廳ヨリ稅關ヘ通知スルト同時其管廳ヘモ通知スヘシ此旨相達候事

○内務省訓令第二七三號 明治廿一年五月七日

外國船ヲ雇入レ開港場及不開港場ヘ回船ノ義ニ付明治十八年十一月太政官第六十號ヲ以テ自今不開港場ヘ回船ノ節ニ限リ其雇入タル官廳ヨリ稅關ヘ通知スルト同時ニ其管轄廳ヘモ通知スヘキ旨達相成候處該雇入レタル官廳ヨリ往々雇入



船舶ノ出發地ヘハ通知漏有之越右ハ固ヨリ取締上ニ關係スヘキ義ニ付自今外國  
船雇入回船ノ節ハ稅關ヘ通知スルト同時ニ着船地管轄廳ハ勿論出發地管轄廳ヘ  
通知セラルヘシ  
右訓令ス

○內務省訓令訓第一四〇號 明治廿年二月二十一日

外國軍艦ニシテ不開港場ヘ入進シ及乗組員上陸之儀外務省ニ於テ特ニ免狀ヲ附  
與シタルトキハ自今該免狀寫ヲ添ヘ其都度直ニ書記官ヲシテ通知セシムヘキニ  
付右軍艦ニシテ隨時入進及乗組員上陸ノ際ハ不都合無之様取計且應分ノ請求等  
有之キハ相當ノ補助ヲ與ヘラルヘシ

但目下免狀交附中ノモノ別紙寫ノ通(別紙略ス)  
右訓令ス

○內務省令第三號 明治二十七年二月二十八日

各開港場ヲ發シ海外ヘ航行スル内外國船舶ノ請求ニ依リ健康證書ヲ下付スルト  
キハ該船長ヨリ手數料トシテ金貳圓ヲ徵收ス但各國條約ニ於テ手數料ヲ定メタ  
ルトキハ其額ニ據ル

(參照)

○內務省伺 明治九年十二月十九日

東京府下第一大區十小區築地二丁目二十番地住平野富二儀今般海軍省ヨリ石川島  
修船場ヲ借受近々開業致候ニ付今後橫濱碇泊ノ外國船修置ノ義依頼ヲ受候節ハ橫  
濱稅關ノ免許ヲ得橫須賀造船場ヘ修置ノ爲回船候手續ト同様ノ振合ヲ以テ石川島  
ヘモ相回シ候義出來候様致シ度旨本人出願ノ趣ヲ以テ東京府ヨリ別紙ノ通伺出候  
ニ付審案候處同府申候ノ通開市場規則ニ於テハ外國船碇泊ノ義ハ難相成筋ニ有之  
候得共全修復ノ爲メ回船致シ候義ハ別格ノ次第ニモ有之且人民ニ於テ右等ノ起業  
ニ着手候義ハ實以美事ニシテ且其營業者ノ便利ヲ起シ候義ニ相違モ無之候間御詮  
議ノ上御許可相成候様致シ度尤御許可ノ上取締向ノ儀ハ厚ク注意可致旨東京府ヘ  
可及指令ト存候間至急御裁可有之度別紙相添此段相伺候

○太政官指令

伺之趣修置ヲ要スル外國船主ヨリ橫濱稅關ヘ願出サセ同關之免許ヲ受ル上ハ回船  
修置不苦儀ト相心得其旨可及指令事

(別紙)大藏省ヘ達 明治十年一月廿九日

別紙內務省伺石川島修船場ヘ外國船修置之爲メ回船之義朱書之通及指令候條橫濱  
稅關ヘ達方可取計此旨相達候事

關稅局長ヨリ橫濱稅關ヘ達 明治十年二月六日

東京府下石川島修船場ヘ外國船修復ノ爲メ回船ノ義ニ付別紙ノ通太政官ヨリ御達



有之候條得其意從來其港ヨリ横須賀造船所へ爲修復回漕之外國船同様相心得監吏  
上船爲致密商等ノ懸念無之様注意可被致此旨相達候事(別紙ハ前掲一)  
主税官長ヨリ横濱税關へ達 明治十八年三月三日  
自今外國船修復ノ爲メ其港ヨリ東京府下石川島修船場へ廻船之義差許候節ハ其旨  
警視廳東京府及神奈川縣へ通知スヘシ此旨相達候事

○内務省總務局長ヨリ沿海府縣へ通牒 明治廿年六月八日

外國軍艦不開港場へ不時寄港ノ節心得方別紙ノ通沖繩縣知事ヨリ伺出ニ對シ指令  
相成候條此段及御通知候也

(沖繩縣伺) 明治二十年一月廿九日

外國軍艦等不時寄港ノ節心得方伺  
本縣ハ開港場ニ無之故外國軍艦等寄港スヘキ理由無之候得共左ノ

- 一 難船修繕ノタメ
  - 一 暴風雨ヲ避クル爲メ
  - 一 薪水石炭食料等欠乏ノ爲メ
- 場合ニ於テハ或ハ寄港スルモ難計候ニ付此等ノ場合ニ於テ應對上ノ心得方豫テ伺  
定置度即チ其事項ヲ左ニ
- 第一 不時ニ寄港スル外國軍艦之レアル時ハ所役人ヲシテ其寄港シタル理由ヲ訊  
問シ一時難船又ハ暴風雨ヲ避クル爲メニ來リタル趣申立ル時ハ其儘看過シ可然哉
  - 第二 難船ノ爲メ難船破損所出來修繕ヲ加へ度旨申出ル時ハ之ヲ差許シ右ニ要ス  
ル材料人夫等請求次第差遣可然哉
  - 第三 前條ノ場合ニ於テ停泊中士官以上ノ者上陸ヲ請フトキハ差許可然哉果シ然  
ルトキハ旅宿等モ貸與可然哉
  - 第四 上陸中市街等ヲ散步セントスルトキハ隊メ那覇市街ニ限ルヘキ旨ヲ約シ之

- 第五 其市街地ニ限ル可キ約ニ背キ區域外ヲ散歩セントスル時ハ平檢寬和ニ之ヲ  
論スルハ勿論ナリト雖モ彼レ是ヲ開入レ暴ニ徘徊スルハ巡查ヲ以テ平檢ニ  
之ヲ制止シ置キ其趣艦長ニ通報シ可然哉
- 第六 巡查ノ制止ヲ開入レ腕力ヲ振ヒ候時ハ之ヲ取押へ艦長ニ引渡可然哉
- 第七 右等ノ場合ニ至リ水兵沸騰シテ銃器ヲ携へ上陸セントスルハ最早容易ナ  
ラサル勢ニ差迫リ候場合ナレモ地方官ハ飽迄平穩ヲ旨トシ之ニ應對スル際益々  
以テ亂暴ヲ仕掛ケ制止スル道無之時ハ本縣分遣隊へ通報シ之ヲ防禦セシメ可然  
哉
- 第八 兵卒ノ者上陸ヲ乞フトキハ銃器ヲ携へ隊伍ヲ組ミ候事ハ不相成旨ヲ約シ士官  
ノ者之ニ附添候時ハ差許可然哉
- 第九 損所修繕ノ上謝意ヲ表スル爲メ彼ヨリ訪問スルハ實際上ノ表儀式ニ非ス  
友誼上ノ交際ニ付キ之ヲ受ケ此方ヨリモ亦訪問可然哉
- 第十 第二第三第七ノ場合ニ於テ支那軍艦ナリセハ重大ノ關係ヲ起シ縣務上言フ  
可カラサル障害ヲ生スル形跡有之ト雖モ各國同様ノ取扱ニ出テサルヲ得サル義  
ニ候哉
- 第十一 右停泊中死亡者有之陸地埋葬ヲ請スルハ相當ノ地所ヲ與ヘ可然哉
- 第十二 右地所ハ坪數ニ制限ナク彼レノ請求ニ應可然哉
- 第十三 右地所ハ代價ヲ請求セス彼レニ貸渡ノ條理ニテ可然哉
- 第十四 右葬埋ノ節軍人ノ式ヲ以テ兵卒共銃器ヲ携帶シ葬儀ヲ爲ス事ハ許サ、ル  
事ト心得可然哉
- 第十五 停泊中陸地運動操練等致度旨請求スルトキハ許サ、ル事ト心得可然哉
- 第十六 艦隊運動若クハ巡邏等ノ爲メ寄港スル外國軍艦ニシテ上陸セントコトヲ請  
フトキハ數名ノ士官ニ限リ適宜上陸ヲ差許可然哉



第十七 右ノ場合ニ於テ牛豚鷄卵等ノ如キ食用品買入ノ事ヲ申出ツルハ相當代價ヲ以テ賣渡方取計可然哉

第十八 港ノ内外ニ於テ艦隊操練ヲ爲サンコトヲ申出ツルト雖モ右ハ示威ノ舉動ト認メ斷然差止メ候儀ト心得可然哉

第十九 同盟國外ノ軍艦ト雖モ前數條ニ依リテ取計可然哉

右仰御指揮候也

○外務、内務、陸軍、海軍、四省指令 明治二十年五月二十日

伺ノ趣外國軍艦等帝國不開港場ハ勿論各港ヘ入進ノ儀ハ清國ヲ除クノ外各國政府トノ條約ニハ曾テ其明文ヲ掲ケス然レモ軍艦ナルモノハ一方ニ於テハ其掲ケル所ノ旗章ノ國ヲ代表スルヲ以テ修好國軍艦ハ假令難船修繕若クハ風雨ヲ避クル等危急ヲ避クル爲ニ非ス全ク巡洋ノ際不時ニ寄港スルモ一涯ニ其寄港ヲ拒絶スヘキニアラス而テ軍艦ナルモノハ更ニ他ノ一方ヨリ之ヲ論スルトキハ所謂鐵器ヲ携帶スルモノナルニ依リ若シ外國軍艦ニシテ帝國諸港ヘ進入シ我地方官ニ對シ公然相當ノ敬意ヲ維持スルニ非サレハ自然彼我兩國間ニ葛藤ヲ生スヘキノ恐レアルヘシ故ニ若シ地方官ニ於テ其寄港滯泊ハ治安平和ニ害アリト認ムルトキハ何時ニテモ之ヲ拒絶スルコトヲ得ヘシ作去修好國ノ軍艦ニシテ若シ能ク敬意ヲ表シ穩便ニ寄港ヲ欲スルトキハ我ニ於テモ相當ノ待遇ヲ爲スヘキハ互相交誼上包意ノ許諾(Simplified license)アル所ナリ尤モ帝國政府ト各國トノ間ニ締結セル條約ニテハ單ニ若干ノ場所ヲ限リ開港シタル事ナレバ若シ外國軍艦ニシテ臨時帝國不開港場ニ寄港セントスルトキハ豫テ在帝國本國公使ヲ經由シ入港認可ノ義帝國政府ヘ申出ツヘキハ當然ノ手續ナリ然レモ外國軍艦ニシテ其手續ヲ爲サス寄港スルモノ一涯ニ之ヲ拒絶スルハ相當ノ義ニアラス清國軍艦ノ義ハ修好條規第十四條ニ依リ兩國ノ兵艦ハ風雨ノ難ヲ避クルノ外不開港場及ヒ内地ノ河湖支港ヘ入進スルコトヲ得サルノ取極メ

アルヲ以テ同國軍艦不時寄港ノ節ハ所役人ヲシテ其寄港ノ旨ヲ諮問シ海上避難等急場ノ外ハ一切其入港ヲ謝絶シ然ルヘシ又軍艦寄港スルトキハ該艦長ハ速ニ地方官ヲ訪問スヘキ答ナリ地方官此訪問ヲ受ケタルトキハ更ニ同軍艦ニ至リ之カ答辭ヲ爲シ相互敬意ヲ厚フスヘシ且不開港場取締心得方ノ義ニ就テハ明治三年ノ布告アルヲ以テ右ヲ參酌スヘキ答ニ付疑問ノ廉々ハ前勅ノ主意ニ遵ヒ左ノ通心得ヘシ第一、第四、第五、第六、第九、第十、第十五及ヒ第十七ノ八項ハ伺ノ通

第二ハ其官ニ於テ相當ト認ムル限リ補助ヲ與フヘシ但材料人夫等ノ代價貨錢ハ勿論請求スヘシ

第三 前段ハ伺ノ通末段旅宿ノ義ハ急場ノ外謝絶スヘシ

第七 明治十九年勅令第五十四號地方官官制第八條ヲ見ルヘシ

第八 銃器ヲ携ヘ隊伍ヲ組ミ上陸スル義ハ一切拒絶スヘシト雖モ銃器ヲ携帶セス隊伍ヲ組マサル場合ニ於テハ第十六項ノ指令ニ同シ

第十一 ハ假埋葬ヲ許可シ其旨速ニ主務者ヘ届出ツヘシ但シ中央政府ノ命アルニ依リテハ或ハ其埋葬場ヲ改易スルコトアル旨豫テ艦長ヘ申通スルコトヲ要ス

第十二 ハ相當ト認ムル限リ其請求ニ應スヘシ

第十三 ハ貨渡料トシテ普通賣買ノ地價ヨリ低落セサル代料ヲ請求スヘシ

第十四 ハ銃器携帶ハ軍人葬儀ノ通例ニ付平時治安ニ妨害ナシト認ムルトキハ之ヲ許可スルモ妨ナシ

第十六 ハ兵卒ト雖モ艦長ニ於テ相當ノ取締ヲ付添フ旨申出テタルトキハ其上陸ヲ許可スルモ妨ナシ

第十八 港内ハ勿論港外ト雖モ陸地ヲ距ル三海里以内ニ於テハ發火操練ヲ爲スヲ許スヘカラス但發火セサル操練ハ此限ニアラス

第十九 ハ條約國外ノ軍艦ト雖モ疑ハシキ廉無之トキハ同盟國同様ノ取扱ヲ爲ス



妨ナシ但此場合ニ於テハ速ニ詳細届出ヲ爲スヲ要ス  
右及指令候也

○東京府伺 明治二十一年五月十日

當府所轄小笠原島へ薪水食料等補欠ノ爲入港ノ外國船艀ニ對スル港則ノ儀ハ明治十七年五月中々止相成候迄抑モ同島ノ儀ハ從來ノ習慣等有之カ爲メ内地ト同一ノ取扱モ難相成場合ヨリシテ入港船艀ヨリ生スル事故ノ處分方ニ對シ島廳ニ於テ支ノ儀モ不尠候ニ付其要件ノ取扱方ヲ豫テ伺定候上島司へ指示シ置度即チ左ニ

第一 薪水食料ノ外本船ノ運轉上等ニ關シ必需ト見認ル物品ハ購求差許シ可然哉

第二 乗組員中疾病患者アリテ醫員へ治療ヲ乞フルハ相當ノ藥價ヲ徴收シ之ヲ治療セシメ可然哉

第三

乗組員中重病者アリテ本島ヲ立去リ難キ場合ヨリ滞留治療ヲ受ケ全快ノ上便船ヲ以テ在横濱其國領事へ送致方ヲ請求スルルハ島民中ニ其引受人ヲ立シメ而シテ本人死亡スルルハ引受人ニ於テ埋火葬ノ手續ヲ委任シタル旨ノ書面ヲ船長ヨリ差出サシメ且該費用ヲ豫納スルニ於テハ其請求ニ應シ可然哉

第四

乗組員中島内於テ死亡シ埋火葬ヲ請求スルルハ之ヲ差許シ可然哉但本島ノ埋葬地ハ官有地ヲ無代價ニテ島民へ貸與スルモノニ付外國人へモ相當ノ坪數ヲ限リ無代價ヲ以テ貸與スルモ其地勢ノ變更等ニ據リ其埋葬場ヲ改易スル丁アルヘキ旨ヲ豫テ約シ置方可然哉

第五

船内ニ虎列刺病者アルルハ其乗組員ノ上陸ヲ拒絕スヘキハ勿論其他ノ傳染病者アリテ同様拒絕スル方可然哉或ハ虎列刺病外ノ傳染病者ニシテ十分ニ豫防法ヲ施スニ於テハ其乗組員ノ上陸ヲ可差許哉

第六

乗組員中島内ニ潜匿シタル者アリテ取押方ノ依頼アルルハ速ニ其手配ヲナシ取押ノ上船長へ引渡シ若シ停泊中搜索シ得サルルハ其失踪人ノ所在發見ノ上便船次第在横濱其國領事へ送致方ノ請求書及該費用ヲ船長ヨリ豫納セシメタル上其手續ヲナシ可然哉

第七

右失踪人山林等ニテ病死或ハ變死シタルルハ本船解纜以前ニ於テハ船長ト立會檢視ノ上埋葬ノ手續ヲナシ若シ本船解纜以後ニ於テハ島廳於テ埋葬方ヲ取計タル上其實況ヲ島司ヨリ當廳へ具狀セシメ而シテ其旨ヲ當廳ヨリ其國領事へ通報ノ手續ヲナシ可然哉

第八

乗組員中疾病死亡若クハ逃亡ノ爲メ本船ノ運轉等ニ差支ヲ生スル場合ニ於テ島民雇入方ヲ請求スルルハ近海漁獵或ハ本邦内ニシテ被雇人ノ指定シタル場所へ送リ届クヘキ約束アル者ニ限リ之ヲ差許シ可然哉

第九

外國軍艦入港スルルハ來意尋問ノ爲メ島司自ら該艦へ出張スル方可然哉但尋問ノ事項ハ左ノ通り

國名	艦名	艦長氏名
入港ノ趣旨	傳染病者ノ有無	解纜地名
寄港地名	停泊日數	



第十  
外國軍艦停泊中ニ對スル取扱方ハ明治二十年六月八日秘乙第五四號附ヲ以テ内務省總務局長ヨリ通報アリタル沖繩縣知事ヘノ御指令書ヲ參酌スヘキハ勿論ナレモ右御指令書ニ明文ナキ事項ニシテ前記ノ條件ニ關スルモノハ其條件ニ基キ取扱可然哉

○内務外務兩省指令

伺之趣左ノ通心得ヘシ  
第四第五第八ヲ除クノ外總テ伺之通リ  
第四假埋葬ヲ許可シ其旨速ニ主務省ヘ届出ツヘシ尤貸地料トシテ普通賣買ノ地價ヨリ低落セサル代料ヲ請求スヘシ  
其他伺之通  
第五伺之趣ハ傳染病豫防及檢疫ニ關スル一般ノ法律ニ依リ尚實際斟酌ノ上取扱フヘシ  
第八伺之通但シ眞ニ已ムヲ得スト認ムル場合ノ外ハ可成拒絕スヘシ

○外務省内訓

明治廿一年十一月十二日

凡ソ本邦ニ於ケル外國人ニシテ居留地外ニ於テ營業ヲナス義ハ商店ヲ開キテ賣買ヲ事トスルト行商ヲナストヲ問ハス又其名義ノ何タルヲ論セス都テ條約ノ許サハル所ニ有之候處外國人中右様ノ所業致シ候モノ有之殊ニ清國人ハ居留地外ニ於テ書畫揮毫ヲ營業トシテ潤筆料ヲ收メ或ハ多少ノ商品ヲ携帶シテ旅人宿又

ハ私人ノ家ニ至リ之ヲ賣リ或ハ飲食物等ノ行商ヲナシ又或ハ甚タシキニ至リテハ制禁ノ富興行ヲナスモノ往々ニシテ有之哉ニ相聞候右ハ條約違犯者ニ有之候ニ付其縣下ニ於テ右取締方ニ一層ノ注意ヲ加ヘ若シ右様ノモノ有之候節ハ巡行警察官見當リ次第早追其營業ヲ差止メ其縣ヨリ本人ヲ最寄開港場ニ於ケル其國領事館ニ引渡シ求刑ノ手續ニ可被及候此旨及内訓候也

○外務省内訓

明治廿一年十二月一日

本年十一月十二日附送第三號内訓中稍不明ノ廉有之候ニ付更ニ左ノ通及追調候一送第三號内訓ノ趣意ハ主トシテ内地ノ事ヲ指シタルモノニ有之開港開市場區域内ニ於テハ賣買取引等(行商モ姑ク本文ニ準ス)従前ノ慣行ニ從ヒ差許スヘシ但シ右區域内タリトモ居留地以外ニ於テ店舗ヲ設ケ營業スル義ハ假令一時間限リ本邦人ノ店舗等ヲ借受クルモノト雖モ禁止スヘシ

(參照)

○富山縣伺

明治二十二年一月十二日

總テ外國人タルモノハ假令宗教上ノ事タリト雖モ居留地外ニ於テ公衆ヲ集メ演舌ヲ爲スカ如キハ相成ラサル義ト存候特共本邦人ニシテ宗教擴張ノ爲メ公衆ヲ集メ法話講談等ヲ爲ス場合ニ際シ一時外國人ヲ招待シ一場ノ講談法話等ヲ爲サシムルカ如キモ亦相成ラサル義ト相心得可然哉此段相伺候也



○外務内務兩省指令 明治二十二年一月十八日

本年一月十二日秘保第二號何外國人演說ノ件宗教上ニ關シ臨時一場ノ講談ヲナスハ差許置苦シカラス

○群馬縣伺 明治二十二年一月十八日

從來管内人民ニ於テ外國人宣教師ヲ聘シ又ハ普通外國人旅行ノ途次公衆ヲ集メ演說ヲ爲サシメタルモ本縣ニ於テハ之ヲ看過シ不問ニ置キ來候處客年十二月九日發兌公論新聞雜報欄内ニ新潟縣長岡警察署外國人ノ演說ヲ禁スト題シテ米國人某カ爲セシ耶蘇教演說ヲ禁セシ懸登載シ有之右處分果シテ事實ナリトセハ外國人取締ノ義ニ就テハ豫テ御内訓ノ次第モ有之ニ付御指揮ヲ受ケテノ處分ナラント思料被致候本縣ニ於テモ左ノ場合ハ爾來外國人ノ演說宿泊等ハ惣テ之ヲ禁止スル様執行可然哉

第一項 耶蘇信徒ニ於テ外國宣教師ヲ聘シ耶蘇會堂若クハ民屋ニ於テ演說セシム

ルトキハ會堂ノ内外ヲ問ハス惣テ之ヲ禁スヘキ歟

第二項 外國人ニシテ各温泉場等ニ於テ本邦人ト共ニ學術演說ヲ爲ストキハ之ヲ禁スヘキ歟

第三項 外國人ニシテ日光其他ヘ到ルノ途次耶蘇信徒若クハ懸意ナル者方ヘ宿泊

シタルトキ信徒ヲ集メ耶蘇教講義等ヲ爲ス場合ニ於テモ之ヲ禁スヘキ歟

第四項 旅人宿營業者ニアラスシテ懸意ナル者ヲ以テ外國人ヲ宿泊ナサシムルハ

届出ノ有無ニ拘ハララス惣テ之ヲ禁スヘキ歟

右ハ差掛リタル義モ有之候條至急何分ノ御指揮ヲ仰キ候也

○外務内務兩省指令 明治廿二年三月四日

本年一月十八日警秘第六號何外國人取締ノ件左ノ通心得ヘシ

第一項 第三項外 人ノ招待ニ應シ一時宗教上ノ講談ヲ爲スハ耶蘇教會堂内ニ於テ  
スルト普通家屋内ニ於テスルトチ間ハス差許置苦カラス尤モ旅行中ノ外國人ニ  
シテ旅行免狀ヲ所持セサルモノハ此限ニアラス其他ノ場合ハ伺ノ通第二項外國  
人ニシテ學術演說ヲナス者モ前項ニ準スヘシ  
第四項 宿屋營業者ニアラスト雖モ已ムヲ得サル場合ニ於テ一時外國人ヲ宿泊セシ  
ムルハ苦シカラス尤モ同時ニ其筋ヘ届出テシムヘシ

○太政官達 明治十三年十二月九日

府 縣

職務上ノ儀ニ付各國在留公使領事ヘ是迄直ニ通進致シ候向モ之有候處自今公務  
ニ屬スル分ハ總テ外務省ヲ經テ通進可致尤格外ノ事故アリ直ニ往復セサルヲ得  
サルモノハ豫シメ同省ニ打合置クヘシ此旨相達候事  
但シ外務省ヲ經サル通信ハ私用ニ屬スル儀ト公使領事ニ於テ看做候條此旨ヲ  
モ相心得ヘシ

○大政官達五十三號 明治十四年六月十六日

省院使廳府縣

各廳ヨリ我國在留各國公使ニ對スル公務ノ照會ハ外務卿ヘ通牒シ外務卿ヨリ各  
公使ヘ照會候儀ト可相心得此旨相達候事

第二章中廿  
五年五月閣  
令第四號參  
照



○太政官達第五號 明治十四年十二月十五日

官省院使廳

外國人ノ遵奉スヘキ行政規則設立候節ハ自今外務省ト協議ノ上施行可致此旨相達候事

(參照)

○外務省通知 明治十一年四月十九日

各港在留各國領事官ノ内其本國政府ヨリ除任有之候節ハ其時々其赴任之場へ及通知來候處其港在留各國領事ノ内若シ其本官歸國又ハ他へ轉任又ハ一時不在ノ節其事務ヲ某氏ニ委託候旨其本官ノ者又ハ委託ヲ受ケシ者ヨリ吹聴有之候トモ右之趣其國公使又ハ總領事ヨリ當省へ申立本省ニ於テ承認ノ上其縣へ通知候迄ハ公務上其官職ヲ認ムルニ及ハス候此段豫テ心得ノ爲申入置候也

○内務省達乙第三十號 明治十四年六月廿二日

府 縣

御國人民不慮ノ困難ニ遭ヒ外國人ノ救助ヲ受候節謝儀等ノ儀各國公使或ハ其本國政府ヲ經由シ兩國公際ノ要務ニ關スル事柄ハ外務省ニ於テ取扱又官民雇或ハ居留地ノ外國人ヨリ自己ノ恩惠ヲ與へ候節謝儀褒賞ノ儀ハ當省ニ於テ取扱候條右區別ニ依リ其都度事由ヲ具シ主管ノ省へ可申出此旨相達候事

○福岡縣伺 明治二十七年九月二十五日

外國人取扱及費用ノ件稟議

一 條約締盟國人民無免狀ニテ居留地ナキ土地ニ上陸シ無資財ノ故ヲ以テ保護願出テクルトキハ國籍ヲ證明スルモノヲ所持スルト否トヲ問ハス其國領事所在本地へ護送スヘキ哉將々國籍ヲ證明シ能ハサル者ハ保護ヲ與フルヲ要セサルヤ  
一 前項前段ノ通護送スヘキモノトスルトキハ國籍ヲ證明スヘキモノナキカ爲メ領事ノ力引受ケテ肯諾セサルニ於テハ護送途中ノ費用(本人無資財ナルカ爲メ宿料モ立替タル)警察費ノ支出(到底本人ヨリ辨償)ニ歸スヘキモノナルヤ

○内務省指令 明治二十七年十月十五日

外國人取扱及費用ノ件左ノ通心得ヘシ

- 一 國籍ヲ證明スヘキモノヲ所持スルトキハ引取方ヲ領事ニ照會シ而テ其間ニ於テ保護ノ爲メ費用ヲ要シタルトキハ一時警察費ヨリ支辨シ置キ退テ之カ辨償ヲ領事ニ請求スヘシ
- 二 國籍ヲ證明スヘキモノヲ所持セサルトキハ其國ノ人民ナルヤ否ヤヲ領事ニ確カメタル後前項ノ手續ヲ爲スヘシ
- 三 國籍ヲ證明スヘキモノナキカ爲メ領事ノ力引取ヲ肯セス又ハ何國ノ人民ナルヤ判然セサルトキハ無籍外國人ノ例ニ依リ處分スヘシ

○鹿兒島縣伺 明治二十七年一月廿五日

外國軍艦入港ノ節乘込士官ヲ酒樓ニ招待シ市民ヨリ響應スルモ差支ナキヤ折返シ返事請フ

○警保局長回電 明治二十七年一月二十七日



市ノ費用ヲ用ヒス有志者職金シテ招待スルハ差支ナシ

○外務省訓示第二號 明治廿一年二月九日

客年九月中本邦駐在米國公使ノ紹介ニ依リ健康保養ノ爲メ内地旅行免狀ヲ下付シタル米人ホレーヌ、ウエブスター及ジョン、スウヰニールナル者兩名過般來關西各府縣ニ於テ本邦人ト合併角力興行ノ趣相聞候處右等外國人内地旅行中日本人ト何等ノ種類ヲ問ハス賣買取引及諸約定ヲ爲スヲ得サルハ旅行免狀裏書ニ明示スル處ニシテ前文角力興行ノ如キハ無論裏書ノ旨趣ニ違背シタルモノニ有之候條旅行免狀所持ノ外國人ト雖モ其廳府縣ニ於テ右類似ノ所行ハ勿論總テ日本人ニ雇ハル、等ノ契約ヲ結フモノ有之候ハ、早速之ヲ差止其旅行免狀ヲ取揚ケ最寄開港場若クハ開市場ニ引致シ其國領事ニ引渡シ相當ノ處分ヲ請求スルノ手續ヲ了シ且其次第ハ逐一當省へ具狀可有之此段爲心得及訓示候也

○熊本縣伺 明治廿八年十一月三十日

内國人興行主トナリ英國人ヲ雇ヒ手品ヲ興行セントスルモノアリ右ハ二十一年二月第二號訓示ニ依リ取締ヲ致シ可然哉電報御指揮ヲ乞フ

○外務省指令 明治廿八年十二月二日

外國人ヲ雇ヒ手品興行ノ件ハ外國人遊歩規程外ハ勿論同區域内ト雖モ居留地ヨリ

通勤シ得ル場所ノ外一切許可セサルモノニ付二十一年二月第二號訓示ニ依リ取扱フ可シ

第五十章 清國、布哇、墨西哥、葡萄牙國人取扱方

○勅令第三百三十七號 明治二十七年八月五日

第一條 清國臣民ハ本令ノ規定スル所ニ從ヒ帝國內從來居住ヲ許サレタル場所ニ於テ身体財産ノ保護ヲ受ケ向後モ引續キ居住且其ノ地ニ於テ平和適法ノ職業ニ従事スルコトヲ得但帝國裁判所ノ管轄ニ服従スヘシ  
第二條 前條ニ依リ帝國內ニ居住スル所ノ清國臣民ハ本令發布ノ日ヨリ二十日以内ニ其ノ居住地ノ府縣知事ニ申出テ住所職業氏名ノ登録ヲ請フヘシ  
第三條 府縣知事ハ第二條ノ登録ヲ受ケタル清國臣民ニ對シ登録證書ヲ交付スヘシ

第四條 第二條登録済ノ清國臣民ハ其ノ居住地ヲ移轉スルコトヲ得但此ノ場合ニ於テハ先ツ其ノ登録證書ニ原居住地府縣知事ノ裏書ヲ受ケ新居住地へ到着後三日間ニ其ノ地府縣知事ニ申出テ更ニ第二條ノ登録ヲ受クヘシ



第五條 府縣知事ハ本令規定ノ登録ヲ請ハサル清國臣民ヲ帝國版圖外ニ退去セシムルコトヲ得

第六條 清國臣民ニシテ帝國ノ利益ヲ害スル所爲アル者、犯罪ノ所爲アル者、秩序ヲ紊亂スル者又ハ以上ノ嫌疑アル者ハ各法令ニ依テ處分スルノ外府縣知事ハ仍之ヲ帝國版圖外ニ退去セシムルコトヲ得

第七條 本令ハ帝國官廳並ニ臣民ニ雇用セラレ、清國人ニモ適用ス

第八條 本令ハ交戦上ノ目的ノ爲ニ帝國軍衛ヨリ在留清國臣民ニ對シ發スル命令處分ニ關係スルコトナシ

第九條 本令發布ノ後ニ於テ清國臣民ノ帝國版圖内ニ入ルコトヲ許スハ府縣知事ヲ經テ内務大臣ノ特許ヲ得タル者ニ限ル

第十條 本令ハ發布ノ日ヨリ施行ス

○警保局長通牒 明治三十年二月二十二日

本邦在留清國臣民ニ對シ警察ニ關スル法令通用ノ義ニ付神奈川縣知事請訓ニ對シ別紙ノ通指令相成候ニ付依命此段及通牒候也

○神奈川縣請訓 明治二十九年十二月廿八日

當縣ニ居留スル清國人ノ内從來古物商質屋浴湯宿屋料理屋飲食店ノ營業ヲ爲ス者有之候處曩キニ清國トノ通商航海條約御締結發布相成候上ハ右營業人ニハ明治廿八年法律第十三號古物商取締法同年法律第十四號質屋取締法其他本縣ニ於テ制定ノ浴湯營業規則宿屋取締規則待合茶屋料理屋飲食店取締規則ヲ適用シ營業ノ免許ヲ得セシメ且規定ノ條項總テ遵守爲致可然哉至急何分ノ御指揮相成度此段及請訓候也

○内務省指令 明治三十年二月二十日

二十九年十二月二十八日付發第一七三九號請訓警察ニ關スル法令清國人ニ適用ノ件ハ請訓ノ通

○勅令第四十一號 明治廿七年四月十一日

明治四年七月四日布哇政府ト締結シタル條約中領事裁判權ニ關スル規程ハ自今無効ニ歸シタルモノトス因テ自今布哇國民ハ現在施行シ及將來施行スル法律命令ノ範圍内ニ於テ帝國內何地ニモ往來居住シ其ノ居住地ニ於テ家屋倉庫ヲ借受ケ又ハ總テ適法ノ業務ヲ營ムコトヲ得



○外務省令第五號 明治二十七年四月十三日  
明治二十七年勅令第四十一號ニ基キ布哇國民ノ國籍ヲ證明スル爲メ明治二十二年外務省令第三號ヲ以テ定メタル國籍證明書規則ヲ適用ス

○外務省告示第一號 明治二十七年四月十三日  
明治二十七年外務省令第五號ニ依リ布哇國民ニ交付スヘキ國籍證明書ハ明治二十二年外務省告示第一號ノ雛形ニ依ル

○外務省令第三號 明治二十二年七月二十九日

明治二十一年十一月三十日帝國ト墨西哥合衆國トノ間ニ締結シタル修好通商條約ニ依リ墨西哥合衆國人民カ帝國内ニ於テ享有スヘキ權利ヲ實行スルニ際シ其國籍ヲ證明スルニ便ナランカ爲メ茲ニ國籍證明書規則ヲ定ムルコト左ノ如シ

國籍證明書規則

第一條 墨西哥合衆國人民ハ本規則ノ手續ニ依リ地方廳ヲ經テ國籍證明書ノ交付ヲ外務省ニ出願スルコトヲ得

第二條 國籍證明書ヲ得ンコトヲ欲スル者ハ自ラ地方廳ニ出頭シ其國籍ノ證據トナルヘキ書類ヲ添ヘ國籍氏名年齢ヲ記シタル願書ヲ地方廳長官ニ差出スヘ

シ但シ本國領事ノ駐在スル地ニ在リテハ其願書ニ領事ノ裏書アルヲ要ス

第三條 出願人若シ國籍ノ證據トナルヘキ書類ヲ所持セサル時ハ其願書ニ記載シタル國籍ニ屬スルコトヲ書面ヲ以テ確言スヘシ

第四條 地方長官國籍證明書交付ノ願書ヲ受領シタル時ハ願書記載ノ事實ニ就キ取調ヲ遂ケ意見ヲ具シテ其願書ヲ外務省ニ送致スヘシ

第五條 國籍證明書ハ外務省ヨリ地方廳ヲ經テ出願人ニ交付ス但シ之ニ對シ手數料ヲ要セス

○外務省告示第一號 明治廿二年七月二十九日

明治二十二年七月外務省令第三號ニ依リ墨西哥合衆國人民ニ交付スヘキ國籍證明書ノ雛形左ノ如シ

「」内ハ朱書

國籍證明書

一氏名
一國籍
一年齡
右「何之誰」墨西哥合衆國人ニ相違ナキコトヲ證明ス
明治年月日
外務省
印

注意

明治二十一年十一月三十日帝國ト墨西哥合衆國トノ間ニ締結シタル修好通商條約ニ依リ墨西哥合衆國人民ハ帝國内ニ於テ帝國臣民同様帝國ノ法律規則ヲ遵奉シテ自由ニ旅行シ各地ニ滞在住居シ正當ノ營業ニ従事シ家屋倉庫ヲ借受クルコトヲ得ルモノナリ

表 面

裏 面



○勅令第六十四號 明治二十五年七月十四日  
萬延元年六月十七日葡萄牙政府ト締結シタル條約中領事裁判權ニ關スル條款ハ  
自今無効ニ歸シタルモノトス

第五十一章 通商條約

朝鮮國修好條規

明治九年二月廿六日調印  
同年三月廿二日批准

大日本國

大朝鮮國ト素ヨリ友誼ニ敦ク年所ヲ歷有セリ今兩國ノ情意未タ洽ネカラサル  
ヲ視ルニ因テ重テ舊好ヲ修メ親睦ヲ固フセント欲ス是ヲ以日本國政府ハ特命  
全權辦理大臣陸軍中將兼參議開拓長官黒田清隆特命副全權辦理大臣井上馨ヲ  
簡ミ朝鮮國江華府ニ詣リ朝鮮國政府ハ判中樞府事申憲都都府副總管尹滋承ヲ  
簡ミ各奉スル所ノ

諭旨ニ遵ヒ議立セル條款ヲ左ニ開列ス

第一款 朝鮮國ハ自主ノ邦ニシテ日本國ト平等ノ權ヲ保有セリ嗣後兩國和親ノ  
實ヲ表セント欲スルニハ彼此互ニ同等ノ禮義ヲ以テ相接待シ毫モ侵越猜嫌ス  
ル事アルヘカラス先ツ從前交情阻塞ノ患ヲ爲セシ諸例規ヲ悉ク革除シ務メテ  
寬裕弘通法ヲ開擴シ以テ雙方トモ安寧ヲ永遠ニ期スヘシ

第二款 日本國政府ハ今ヨリ十五個月ノ後時ニ隨ヒ使臣ヲ派出シ朝鮮國京城ニ  
到リ禮曹判書ニ親接シ交際ノ事務ヲ商議スルヲ得ヘシ該使臣或ハ留滯シ或ハ

直ニ歸國スルモ共ニ其時宜ニ任スヘシ朝鮮國政府ハ何時ニテモ使臣ヲ派出シ  
日本國東京ニ至リ外務卿ニ親接シ交際事務ヲ商議スルヲ得ヘシ該使臣或ハ留  
滯シ或ハ直ニ歸國スルモ亦其時宜ニ任スヘシ

第三款 嗣後兩國相往復スル公用文ハ日本ハ其國文ヲ用ヒ今ヨリ十年間ハ添フ  
ルニ譯漢文ヲ以テシ朝鮮ハ眞文ヲ用フヘシ

第四款 朝鮮國釜山ノ草梁項ニハ日本公館アリテ年來兩國人民通商ノ地タリ今  
ヨリ從前ノ慣例及歲遣船等ノ事ヲ改革シ今般新立セル條款ヲ憑準トナシ貿易  
事務ヲ措辦スヘシ且又朝鮮國政府ハ第五款ニ載スル所ノ二口ヲ開キ日本人民  
ノ往來通商スルヲ准聽スヘシ右ノ場所ニ就キ地面ヲ賃借シ家屋ヲ造營シ又ハ  
所在朝鮮人民ノ屋宅ヲ賃借スルモ各其隨意ニ任スヘシ

第五款 京拆忠清全羅慶尙咸鏡五道ノ沿海ニテ通商ニ便利ナル港口二個所ヲ見  
立タル後地名ヲ指定スヘシ開港ノ期ハ日本曆明治九年二月ヨリ朝鮮曆丙子年  
正月ヨリ共ニ數ヘテ二十個月ニ當ルヲ期トスヘシ



第六款 嗣後日本國船隻朝鮮國沿海ニアリテ或ハ大風ニ遭ヒ又ハ薪糧ニ窮竭シ指定シタル港口ニ達スル能ハサル時ハ何レノ港灣ニテモ船隻ヲ寄泊シ風波ノ險ヲ避ケ要用品ヲ買入レ船具ヲ修繕シ柴炭類ヲ買求ムルヲ得ヘシ勿論其供給費用ハ總テ船主ヨリ賠償スヘシト雖モ是等ノ事ニ就テハ地方人民トモニ其困難ヲ體察シ眞實ニ憐恤ヲ加ヘ救援至ラサルナク補給敢吝スル無ルヘシ倘又兩國ノ船隻大洋中ニテ破壞シ乗組人員何レノ地方ニテモ漂着スル時ハ其地ノ人民ヨリ即刻救助ノ手續ヲ施シ各人ノ性命ヲ保全セシメ地方官ニ届出該官ヨリ各本國へ護送スルカ又ハ其近傍ニ在留セル本國ノ官員へ引渡スヘシ

第七款 朝鮮國ノ沿海島嶼岩礁從前審檢ヲ經サレハ極メテ危險トナスニ因リ日本國ノ航海者自由ニ海岸ヲ測量スルヲ准シ其位置淺深ヲ審ニシテ圖誌ヲ編製シ兩國船客ヲシテ危險ヲ避ケ安穩ニ航通スルヲ得セシムヘシ

第八款 嗣後日本國政府ヨリ朝鮮國指定各口へ時宜ニ隨ヒ日本商民ヲ管理スルノ官ヲ設ケ置ヘシ若シ兩國ニ交渉スル事件アル時ハ該官ヨリ其所ノ地方長官ニ會商シテ辦理セン

第九款 兩國既ニ通好ヲ經タリ彼是ノ人民各自己ノ意見ニ任セ貿易セシムヘシ

兩國官吏毫モ之レニ關係スルコナシ又貿易ノ限制ヲ立テ或ハ禁沮スルヲ得ス倘シ兩國ノ商民欺罔街賣又ハ貸借償ハサルコアル時ハ兩國ノ官吏嚴重ニ該逋商民ヲ取糾シ債欠ヲ追辨セシムヘシ但シ兩國ノ政府ハ之ヲ代償スルノ理ナシ

第十款 日本國人民朝鮮國指定ノ各口ニ在留中若シ罪科ヲ犯シ朝鮮國人民ニ交涉スル事件ハ總テ日本國官員ノ審斷ニ歸スヘシ若シ朝鮮國人民罪科ヲ犯シ日本國人民ニ交渉スル事件ハ均シク朝鮮國官員ノ查辨ニ歸スヘシ尤雙方トモ各其國律ニ據リ裁判シ毫モ回護祖庇スルコナク務メテ公平允當ノ裁判ヲ示スヘシ

第十一款 兩國既ニ通好ヲ經タレハ別ニ通商章程ヲ設立シ兩國商民ノ便利ヲ與フヘシ且現今議立セル各款中更ニ細目ヲ補添シテ以テ遵照ニ便ニスヘキ條件共自今六個月ヲ過スシテ兩國別ニ委員ヲ命シ朝鮮國京城又ハ江華府ニ會シテ商議定立セン

第十二款 右議定セル十一款ノ條約此日ヨリ兩國信守遵行ノ始トス兩國政府復之レヲ變革スルヲ得ス以テ永遠ニ及ホシ兩國ノ和親ヲ固フスヘシ之レカ爲ニ此約書二本ヲ作り兩國委任ノ大臣各鈐印シ相互ニ交付シ以テ憑信ヲ昭ニスル



モノナリ

大日本國紀元二千五百三十六年

明治九年二月二十六日

大日本國特命全權辦理大臣陸軍中將兼參議開拓長官 黒田清隆 印

大日本國特命副全權辦理大臣議官 井上馨 印

大朝鮮國開國四百八十五年丙子二月初二日

大朝鮮國大官判中樞府事 申 徳 印

大朝鮮國副官都總府副總管 尹 滋 承 印

朝鮮國修好條規附錄明治九年八月廿四日於漢城調印

日本國政府曩ニ特命全權辦理大臣陸軍中將兼參議開拓長官黒田清隆特命副全權辦理大臣議官井上馨ヲシテ朝鮮國江華府ニ詣ラシメ同國政府ハ大官判中樞府事申徳副官都總府總管尹滋承ニ委任シ日本曆明治九年二月二十六日朝鮮國丙子年二月初二日雙方互ニ調印シタル修好條規第十一款ノ旨趣ニ從ヒ日本政府ハ理事官外務大丞宮本小一ニ委任シ朝鮮國京城ニ詣リ朝鮮國政府ハ講修官議政府堂上趙寅熙ニ委任シ相會同シテ議立スル條款左ニ開列ス

第一款 嗣後各港口駐留日本國人民管理官朝鮮國沿海地方ニ於テ日本國ノ諸船困難ニ遭ヒ緊急ナリト聞クトキハ地方官ニ告ケ該地ニ到ル道路ヲ經過スルヲ得ヘシ

第二款 嗣後使臣及管理官ヨリ各所へ通スル送文ハ自費ヲ以テ郵送スルモ或ハ該國人民ヲ雇ヒ專差スルモ各其便ニ從フヘシ

第三款 議定シタル朝鮮國通商各港ニ在リテ日本國人民地基ヲ租賃シ住居スルハ各其地主ト相議シテ價ヲ定ムヘシ朝鮮國政府ニ屬スル地ハ朝鮮國人民ヨリ官ニ納ルト同一ノ租額ヲ出シテ住居スヘシ釜山草梁項日本公使館ニハ從前同國政府ヨリ守門設門ヲ設ケシカ今後之ヲ廢撤シ一ニ新定ノ程限ニ依リ標ヲ界上ニ立ツヘシ他ノ二港モ亦此例ヲ照ス

第四款 嗣後釜山港ニ於テ日本國人民行歩ヲ得ヘキ道路ノ里程ハ波止場ヨリ起算シテ東西南北各直徑十里朝鮮里法ト定ム東萊府中ニ至テハ里程外ニ在リト雖モ特ニ往來ヲ爲ス此里程内ニ於テ日本國人民隨意歩行シ其地ノ物産及ヒ日本國物産ヲ賣買スルヲ得ヘシ

第五款 議定シタル朝鮮國各港ニ於テ日本國人民ハ朝鮮國人民ヲ賃雇スルヲ得



ヘシ朝鮮國人民其政府ノ許可ヲ得ハ日本國ニ來ルモ妨無シ

第六款 議定シタル朝鮮國各港ニ於テ日本國人民若シ死去シタル時ハ適宜ノ地處ヲ撰ミ埋葬スルヲ得ヘシ但他ノ二港ノ埋葬地ハ釜山埋葬地ノ遠近ノ例ニ依ル

第七款 日本國人民日本國ノ諸貨幣ヲ以テ朝鮮國人民ノ所有物ト交換シ得ヘシ又朝鮮國人民ハ交換シ買得タル日本國ノ諸貨幣ヲ以テ日本國ノ諸貨物ヲ買入ル、爲メ朝鮮國指定ノ諸港ニテハ人民相互ニ通用スルヲ得ヘシ

日本國人民ハ朝鮮國銅貨幣ヲ使用運輸スルヲ得ヘシ兩國人民私ニ錢貨ヲ鑄造スル者アレハ各其國ノ法律ニ照シテ處斷スヘシ

第八款 朝鮮國人民日本國人民ヨリ買得タル貨物或ハ贈與ヲ受タル諸物品ハ隨意使用シテ妨無シ

第九款 修好條規第七款ニ載スル旨趣ニ從ヒ日本國測量船小船ヲ放チ朝鮮國沿海ヲ測量スル時或ハ風雨ニ逢ヒ或ハ干潮ノ爲メ本船ニ歸ル能ハサル時ハ該處里正ヨリ其近傍ノ人家ニ安着セシムヘシ若シ需用ノ物品アラハ官ヨリ辨給シ後日其入費ヲ完清スヘシ

第十款 朝鮮國ハ未タ海外諸國ト通信セス日本國ハ年來諸國ト締盟友誼アルノ故ヲ以テ今後朝鮮國ノ沿海ヘ諸國ノ船舶風波ノ爲メ困難シ漂着スルアラハ朝鮮國人民理ニ於テ之ヲ愛恤セサル無シ該漂民本國ニ送還セラレンヲ望マハ朝鮮國政府ヨリ各港口駐留ノ日本國管理官ニ遞付シ本國ニ送還セシム該官員之ヲ領諾セサル無シ

第十一款 右十款ノ章程及之ニ添ヘタル通商規則共修好條規ト同一ノ權ヲ有ス兩國政府遵行シテ違フ莫ル可シ然レトモ此各款中若シ兩國人民交際貿易上實地ノ障礙ヲ生シ改革セサル可カラサル事柄ヲ認ムル時ハ兩國政府其議案ヲ作リ一箇年前報知シテ協議決定スヘシ

大日本國紀元二千五百三十六年明治九年八月二十四日

理事官外務大丞 宮 本 小 一 印

大朝鮮國開國四百八十五年丙子七月初六日

講修官議政府堂上 趙 寅 熙 印

朝鮮國通商章程

朝鮮國議定諸港ニ於テ日本國人民貿易規則



第一則 日本國商船日本國政府所管ノ軍艦及專朝鮮國ニテ許可セシ諸港ニ入津ノ時船主或ハ船長日本國人民管理官ヨリ渡シタル證書ヲ三日ノ内ニ朝鮮國官廳ヘ差出スヘシ

所謂證書ナル者ハ船主所持ノ日本國船籍航海公證ノ類ヲ入港ノ日ヨリ出港ノ日マテ管理官ニ差出シ置キ管理官ヨリ此證書類ヲ預リタル證票ヲ與フ是日本國現時施行ノ商船成規ト爲ス船主本港碇泊此證票ヲ朝鮮國官廳ヘ差出シ日本國ノ商船タルコトヲ驗明ス

此時船主又其記錄簿ヲ差出スヘシ

所謂記錄ナル者ハ船名並ニ本船ヲ發スルノ地名積荷ノ噸數石數共ニ船船ノ容積ヲ算定スル船長ノ姓名乗組水夫ノ人員船客ノ姓名ヲ詳記シテ船主調印シタル者ナリ

此時船主又本船積荷ノ報單並船内所用雜物ノ簿記ヲ差出スヘシ

所謂報單ナル者ハ荷物ノ名或ハ其物質ノ實名並荷主ノ姓名記號番號ヲ詳記シテ記號番號ナキ荷物ハ此例ニアラス報知スルナリ此報單及其他書類共何レモ日本國文ヲ用ヒテ漢譯文ヲ副ルコト無シ

第二則 日本國商船進港ノ積荷ヲ陸揚セント欲スル時ハ船主或ハ荷主ヨリ更ニ

積荷ノ物名並元價斤量個數ヲ書記シ朝鮮國官廳ヘ届出ヘシ官廳届書ヲ得ハ速ニ荷卸シ免狀ヲ渡スヘシ

第三則 船主或ハ荷主第二則ノ免狀ヲ得タルノ後其荷物ヲ陸揚ケスヘシ朝鮮國官吏若シ之ヲ検査セント要スレハ荷主敢テ之ヲ拒ムコト無シ官吏亦注意検査シテ之カ爲ノ毀損ヲ致スコト無カレ

第四則 出港セントスル荷物ハ荷主第二則入港積荷届書ノ式ニ照シ船名並荷物ノ品書個數ヲ書記シ朝鮮國官廳ニ届出ヘシ官廳ハ速ニ之ヲ許可シ出港荷物免狀ヲ渡スヘシ荷主敢テ之ヲ拒ムコト無シ

第五則 日本國商船出港ヲ要スル時ハ前日正午前ニ朝鮮國官廳ヘ報知スヘシ官廳報ヲ得ハ嘗テ預リ置キタル證書ヲ還附シ出港免狀ヲ渡スヘシ

日本國郵便船ハ成規ノ時限ニ拘ハラシテ出港スルトモ必ス官廳ニ報知スヘシ

第六則 嗣後朝鮮國諸港口ニ於テ糧米及雜穀トモ輸出入スルコトヲ得ヘシ



第七則 港稅

連桅檣ノ商船及蒸氣商船稅金五圓

單桅檣ノ商船稅金貳圓石以上積

單桅檣ノ商船稅金壹圓五拾錢石以下積

二附屬脚艇ヲ除ク

日本國政府ニ屬スル諸船舶ハ港稅ヲ納レズ

第八則 朝鮮國政府或ハ人民諸物品ヲ不開港場ノ口岸ニ運輸セント欲スル時ハ

日本國商船ヲ雇入ル、コヲ得ヘシ雇主若シ人民ナレハ朝鮮國政府ノ免狀ニ照シテ雇役スヘシ

第九則 日本國船隻若シ通商ヲ許サ、ル朝鮮國ノ港口ニ到リ私ニ賣買ヲ爲スヲ

該地方官見届タル時ハ最寄管理官ニ引渡スヘシ管理官ハ其所得ノ錢物一切ヲ取上ケテ朝鮮國官廳ニ交付スヘシ

第十則 鴉片煙販賣ヲ嚴禁ス

第十一則 兩國現ニ定ムル規則ハ今後兩國商民貿易形況ニ依リ各委員時ニ隨テ事情ヲ酌量シ商議改正スルヲ得ヘシ此カ爲メ兩國委員各調印シ即日ヨリ遵行

セシム

大日本國紀元二千五百三十六年明治九年八月二十四日

理事官外務大丞 宮本 小一 印

大朝鮮國開國四百八十五年丙子七月初六日

講修官議政府堂上 趙 寅 熙 印

○通商ノ弊ヲ除キ及漂民經費償還ノ爲メ別錄往復書翰

以書簡致啓上候陳者貴國ノ我邦ト交ヲ通スル以來其貿易ヲ爲ス宗氏ト貴政府之ヲ爲シ人民各自ノ通商ヲ准サス之ニ加フルニ貴政府中年以降各色物品ノ貿易ヲ以テ例ノ官吏ノ自營ヲ准聽セシヨリ慣習一命令アル如ク弊端漸ク滋シ今般協立スル所ノ修好條規第九款ニ基キ兩國人民ノ貿易ハ寬裕弘通ヲ主旨トスル勿論ナレハ右等弊實宜ク速ニ革除セサルヘカラス蓋シ我人民ノ貴國ニ輸送スル各物件ハ我海關ニ於テ輸出稅ヲ課セス貴國ヨリ我内地へ輸入スル物産モ數年間我海關ニ於テ輸出稅ヲ課セサルコトニ我政府ノ内議決定セリ寬裕ノ議此ニ及フモノ他ナシ兩國人民ヲシテ有無相通シ長短相補ヒ以テ用ヲ利シ生ヲ厚フセシムルニ在ルナリ然ルニ貴國現今ノ情形ヲ察スルニ鎖閉總ニ解ケ禁網始テ開ク料ルニ人民ノ



交通未タ俄ニ親密ニ至ルヘカラス貿易互市急ニ繁盛ヲ期シ難シ時ヲ察シ宜ヲ酌  
ミ兩國政府ノ最當サニ注意保護スヘキ要件ハ務メテ協議シテ之ヲ創立シ通商ノ  
妨害障碍トナルヘキ事項ハ速ニ刈除セサルヘカラス萬一相胥テ貌視シ互ニ苟合  
ヲ爲サハ通交ノ名有テ其實無シ故ニ今條件ヲ左ニ掲ケテ後來ノ證ト爲ス

一 従前貴國ニ於テ通商ヲ准行スル者ヲ限テ數名ト爲シ商譯都中及許可ヲ得  
タル人民ノ外ハ他ノ人々通商スルヲ得ヌ嗣後宜ク寛裕ニシ人々ヲシテ廣ク  
互市ヲ行フヲ得セシム可シ且或ハ貿易ノ數量ヲ限制シ或ハ甲ハ止タ某貨ヲ  
販キ乙ハ其物ヲ買フヲ得サル等權酷ニ均シキ束縛法ハ阻絶シテ復行フアル  
莫シ

一 朝鮮人民日本人民ト貨物ヲ賣買シタル後其都度朝鮮官府ニ稟報スルヲ要  
セス貴政府其出入物貨ノ多少ヲ知ラント欲セハ海關出入ノ報單ヲ一覽シテ  
徴スルニ足ル更ニ人民ヲ煩スヘカラス

一 兩國人民ノ貿易スル之ヲ保護シ之ヲ催進スル爲メ官吏ヲ派セサル可カラ  
ス其派員ハ政府ヨリ俸給アリ法度アリ以テ廉ヲ養ヒ行ヲ飭フニ足ル別ニ人  
民ニ向テ毫モ求索スルノ理ナシ若シ派員貪心厭ク無ク陰誘需索或ハ窘迫セ

シムル時ハ貿易ノ路ヲ妨害スル測ル可カラヌ故ニ政府ハ須ク戒飭シテ其弊  
端ヲ未發ニ禦クヘシ若シ奸狀敗露證據分明ナル者ハ政府其責ニ任シテ之カ  
處分ヲ爲スヘシ

一 海關ヲ設ケ稅額ヲ定メ兩國人民ニ約束シテ徴收スル是ヲ公稅ト爲ス今特  
リ進口船公稅ノ一則ヨリ此外若シ進口貨物内地ニ入ルノ時出口貨物内地ヲ  
出ルノ時其要港ニ取締所等ヲ設立シ以テ諸種ノ稅餉ヲ徴シ或ハ其貨物點檢  
ノ勞ニ托シ賄ヲ納ル等皆是貿易ヲ公許スト雖モ其實ハ貿易ヲ沮抑スルナリ  
自今斷然是等ノ事ヲ廢シ再ヒ弊竇ヲ開ク可カラス

右數款ハ條約附録中掲載スヘキ緊要ノ條款ナリ然レトモ人民ニ公布シテ不可ナ  
ル者アレハ刪去シテ別録シ互ニ交付シテ相約束セリ其權利ハ附録ニ異ナルナシ  
此カ爲メ嵩砌シ併テ時社ヲ祈ル敬具

明治廿九年八月廿四日

日本國理事官外務大丞 宮 本 小 一 印

朝鮮國講修官議政府堂上趙寅熙閣下

以書翰致啓上候陳者兩國人民不幸ニシテ客土ヘ漂着ノ節ハ其地方官民ヨリ即時



憐恤救援ヲ加ヘ衣服飲食及相當ノ諸品ヲ與ヘ閉籠幽囚ノ如キ處分ヲ施サス其生命權利ヲ全フシテ本國ニ護還スヘキコトハ修好條規第六款ニ在リ就テハ從前兩國漂民ノ爲メ地方ニテ費ル所ノ經費ハ悉ク隣國交際ノ義務ト爲シ其本國政府ヲシテ之ヲ辨セシメサル慣例ナリト雖トモ締約以來兩國人民往來月ニ加ハリ歲ニ増ストキハ漂民救助ノ經費ハ雙方互ニ之ヲ約シ寒暑ニ適スル時衣一領ノ外一日食料日本ニテハ金拾錢朝鮮ニテハ錢五十文ト定メ漂民引渡ノ時錢數何程ト會計シ其本國政府之ヲ完清スヘシ既ニ此完清アレハ其陀ノ手數ハ各其漂着シタル國ノ義務ナレハ相互ニ謝禮ヲ爲スニ及ハス

一漂民ノ爲メ特ニ船隻ヲ差シ出シテハ鄭重ニ過ルノミナラス船費モ少ナカラサレハ便船ヲ待テ之ヲ護還スヘシ故ニ其滯留時間自ラ長短アリ其間身體適度ノ勞ヲ爲シ養生ヲ爲サシメ亦其人ヲシテ徒然坐食セシメサル爲メ之ヲシテ採薪索繩等ノ如キ應身ノ力役ニ就カシメ相當ノ賃錢ヲ給シ而テ其所獲ノ錢物ヲ以テ滯留經費幾分ヲ償却セシムヘシ然ルトキハ本國政府ニテ辨スヘキ數ハ僅ニ其不足ヲ補フノミ一漂民歸國ノ日若シ齋シ歸ル所ノ錢物アレハ固ヨリ本人勞役シテ得ル者ニ付官之ヲ沒スルノ理ナシ宜ク安堵本業ニ復セシムヘシ

右兩國政府ニ於テ遵行違フ莫ルヘシ此カ爲メ致契約候敬具

明治九年八月廿四日

日本理事官外務大丞 宮 本 小 一

朝鮮國講修官議政府堂上趙寅淵閣下

朝鮮漂流船取扱約定

日本國ニ漂到シタル朝鮮國人所駕ノ船桴破損スル者從前日本國政府總テ之カ爲ニ修繕シ所在日本船舶ヲシテ牽テ送り還ラシム其破損尤モ甚シキ者ハ則沽却シテ價ヲ付スルヲ例トナセリ雖然日本國理事官宮本小一曩ニ既ニ朝鮮國講修官趙寅熙ト兩國漂民經費ヲ議定シタレハ則該修繕之事モ亦其約無カルヘカラス於是駐釜山港日本國管理官近藤真鋤朝鮮國東萊府伯洪裕昌ト會同協議シ更ニ約ヲ立ル左ノ如シ

第一條

一嗣後朝鮮國民日本ニ漂到スルアリ其船桴修繕センコトヲ要スル者ハ則隨處日本國地方官其求ヲ聽スト雖是カ爲ニ費ス所一切金額須ラク漂民經費之外タルヘシ故ニ駐釜山日本國管理官ヨリ之ヲ朝鮮國東萊府ニ報告スレハ該府速ニ別



ニ之ヲ完清ス他港ニ在モ亦此例ニ照スヘシ

第二條

一若其船桴破損已ニ甚シク繕修スヘカラサル者ハ隨處日本國地方官船主ヲシテ之ヲ沽却セシメ其價錢ヲ給付ス

第三條

一若其船主之ヲ沽却セント欲シテ其船材唯價值無ノミナラス人之ヲ買フヲ欲セサレハ則隨處日本國地方官船主ヲシテ眼前焚燬シテ餘念ナカラシム

第四條

一若朝鮮國民日本海孤島ニ漂到シ其船桴ヲ修繕センコトヲ要シテ工材ヲ得ス之ヲ他處ニ轉移セント欲スルモ風濤ノ爲ニ妨礙セラルレハ則隨處日本國地方官船主ニ諭シ之ヲ沽却シ之ヲ拋棄セシムル等皆時宜ニ從フ

右約ヲ立テ互ニ相鈐印シ以テ憑信ヲ昭カニス

日本曆明治十年七月三日

管理官 近藤真鋤 印

朝鮮曆丁丑五月二十三日

東萊府 伯洪祐昌 印

朝鮮國漂民費用償還ノ補約往復書翰

往翰

逕啓スル者日本曆明治十年七月三日朝鮮曆丁丑五月廿三日駐釜山港日本國管理官近藤真鋤ト朝鮮國東萊府伯洪祐昌ト會同議立スル所ノ漂流民送還ノ約未タ悉サ、ル所有リ實況碍リ無キヲ免レス因テ下條ヲ加ヘ以テ其缺ヲ補ヒ申可ク候

凡ソ朝鮮國人日本國ニ漂到シ其船桴破傷シテ修葺シ難キ者ハ斷シテ斥賣或ハ燒燼ニ付シ送還ヲ煩ハサス但略修補ヲ加ヘ以テ駕回ス可キ者ハ該漂民ヲシテ口牒内ニ於テ修補ニ費ス所ノハ歸國ノ後東萊府ニ辨納シ以テ日本官廳ニ報償スルノ意ヲ登記セシメ若シ漂民字ヲ知ラサルトキハ代テ和然後修補シテ以テ給ス且ツ完船ト五島平戸壹岐對馬ノ外遠路地方ハ則亦大口内牒ニ於テ運送ニ費ス所ノ歸國ノ後東萊府ニ辨納シ以テ日本官廳ニ報償スルノ意ヲ登記セシメ然後送運ヲ聽ス該漂民送還ノ時日本地方官合サニ漂民口牒ヲ取テ直ニ在朝鮮國日本管理官ニ寄贈シ管理官該口牒ヲ證トシ修補送還ノ費ヲ完請スルコトヲ求



ムルトキハ東萊府其口牒ニ據ツテ隨時當ニ計償ヲ爲スヘシ  
該ノ條款想ニ 貴下モ亦タ當ニ異議無之儀ト存候敬具  
明治十一年五月十四日

署管理官 副 田 節

東萊府伯伊致和貴下

復翰

照會者凡係漂民送還之約已有纖悉然船隻修補送運之節亦不無立議補缺矣凡朝鮮  
國人漂到日本國其船桴破傷難以修桴者斷付斥賣或燒燼不煩送還但略加修補可以  
駕回者令該漂民於口牒內登記修補所費歸國後辨納萊府以爲報償於日本官廳之意  
若漂民不知字則代書和文口牒令其辨印然後修補以給且雖完船五島平戶壹岐對馬之外遠路地方則亦  
於口牒內登記送運所費歸國後辨納萊府以爲報償於日本官廳之意然後送運之漂民  
送還之時日本國地方官合取口牒直寄贈在朝鮮國日本管理官管理官證該口牒求完  
諸修補送運之費則東萊府據其口牒隨時當爲計償該條款實合事宜豈容他議諒會焉  
敬具

戊寅四月十九日

東萊府 伯伊致和 印

署管理官副田節貴下

朝鮮國修好條規續約

明治十五年八月三十日朝鮮開國四百九十一年七月十七日仁川於テ開印  
同年十月三十一日於東京本書交換

日本國ト朝鮮國ト嗣後益々親好ヲ表シ貿易ヲ便ニスル爲メ茲ニ續約ニ款ヲ訂定  
スルコト左ノ如シ

第一 元山釜山仁川各港ノ間行里程今後擴メテ四方各五十里ト爲シ朝鮮法二年ノ

後ヲ期シ條約批准ノ日ヨリ周歲 更ニ各百里ト爲ス事今ヨリ一年ノ後ヲ期シ楊

花鎮ヲ以テ開市場ト爲ス事

第二 日本國公使領事及ヒ其隨員眷從ノ朝鮮內地各處ニ遊歷スルヲ任聽スル事

遊歷地方ヲ指定シ禮曹ヨリ證書ヲ給シ地方官證書ヲ驗メ護送ス

右兩國全權大臣各々諭旨ニ據リ約ヲ立テ印ヲ蓋シ更ニ批准ヲ請ヒ二ヶ月ノ内日本

明治十五年 月 朝鮮開國  
四百九十一年 月 日本東京ニ於テ交換スヘシ

大日本明治十五年八月三十日

大朝鮮國開國四百九十一年七月十七日

日本國辦理公使 花房義質 印

朝鮮國全權大臣 李裕元 印



朝鮮國全權副官 金 宏 集 印

朝鮮海岸ニ於テ犯罪ノ日本漁民取扱條規

明治十六年七月廿五日朝鮮國開國四百九十二年六月廿二日調印

第一條 朝鮮國ノ約定海岸ニ於テ日本國人朝鮮國ノ法禁ヲ犯シタルトキハ水陸共左ノ箇條ニ照シ取扱フヘシ

第二條 朝鮮國官吏ハ法禁ヲ犯セル日本人ヲ取押ヘタルトキハ其罪證ヲ具録シ之ヲ添テ其日本人ヲ最寄開港場ノ日本領事官ヘ引渡シ相當ノ處分ヲ要求スヘシ日本領事官ハ速カニ其要求ニ應シ之ヲ審査シ照律處斷スヘシ但朝鮮國官吏取押ヘ又ハ護送ノ際苛虐ノ取扱ヲ爲スコト無ルヘシ

第三條 犯罪ト認ムヘキ日本人ヲ海陸孰レヨリ護送スルモ朝鮮官吏ノ勝手タルヘシ但シ成丈速カニ護送シ事故ナクシテ徒ニ犯罪ヲ其地ニ掩留スヘカラス

第四條 朝鮮國ノ約定海岸ニ於テ罪ヲ犯セシト認ムル日本人ヲ海路ヨリ護送スルトキハ朝鮮官吏日本人ノ船舶ニ乗込或ハ別船ニ在テ之ヲ引來ル俱ニ其便宜ニ任ス如シ陸路ヨリ護送スルトキハ其日本船ハ逐テ引渡ス迄ノ間ハ地方官ニテ之ヲ監守シ毀失セシムルコト無ルヘシ且其船具漁具其外運搬シ難キ物品ハ

目錄ニ作り罪犯ニ添テ之ヲ送附スヘシ

第五條 如シ薪水食糧ヲ得ルカ爲メ又ハ獲タル所ノ魚類ヲ賣買スル爲メ上陸シ陸上ニ於テ其犯罪同行中若干名ノミニ係ルルハ其若干名ノミヲ此手續ニ依テ護送シ其他ハ之ヲ拘引スルコト無ルヘシ又海上ナレハ其罪犯ヲ除クノ外殘員猶航海ニ堪ユルルハ朝鮮官吏ハ其罪犯ノミヲ護送シ其他ハ之ヲ放還スヘシ

第六條 此規則ハ實行ノ上更ニ増損スヘキモノ有レハ雙方協議改正スルヲ得ヘシ

右確實ナルヲ證シ兩國ノ各委員大臣茲ニ記名調印スルモノ也

大日本國明治十六年七月二十五日

全權大臣 辨理公使 竹添進一郎 印

大朝鮮國開國四百九十二年六月二十二日

全權大臣 督辦交涉通商事務 閔 泳 穆

墨西哥合衆國修好通商條約

○勅令 明治二十二年七月十七日

日本皇帝陛下及墨西哥合衆國大統領ハ兩國間並ニ其臣民及人民間ノ修好通商ニ



關シ永久堅固ノ基礎ヲ定メシコトヲ欲シ修好通商條約ヲ締結スルコトニ決シ日本皇帝陛下ハ亞米利加合衆國華盛頓府ニ駐劄スル日本皇帝陛下ノ特命全權公使從四位勳三等陸奥宗光ヲ其全權委員ニ命シ墨西哥合衆國大統領ハ亞米利加合衆國華盛頓府ニ駐劄スル墨西哥合衆國ノ特命全權公使マチアス、ロメロ、ヲ其全權委員ニ命シタリ因テ雙方ノ全權委員ハ互ニ其委任狀ヲ示シ其正實適當ナルヲ確認シ左ノ條々ヲ合議決定セリ

第一條 日本帝國ト墨西哥合衆國トノ間竝ニ兩國臣民及ヒ人民ノ間ニ永遠無窮ノ平和親睦アルヘシ

第二條 日本皇帝陛下ハ其便宜ニ從ヒ其外交官ヲ墨西哥合衆國ニ駐劄セシムルコトヲ得墨西哥合衆國政府モ亦其便宜ニ從ヒ其外交官ヲ日本國ニ駐劄セシムルコトヲ得又兩締約國ハ各々通商上便宜ノ爲メ他ノ一方ノ領地ニ於テ最惠國領事官ノ駐劄シ得ヘキ各港各所ニ總領事、領事、副領事及ヒ領事代理ヲ駐在セシムルノ權ヲ有スヘシ然レトモ右總領事、領事、副領事及ヒ領事代理ハ其職務ヲ行フニ先チ定式ニ從ヒ其赴任國政府ノ認可ヲ經ヘキモノトス而シテ兩締約國ノ一方ノ外交官及ヒ領事官ハ本條約ノ各條款ニ牴觸セサル外他ノ一方ノ領地内

ニ於テ最惠國ノ同格ノ外交官及領事官ニ現ニ許與シ若クハ將來許與スヘキ一切ノ權利特權及ヒ免除ヲ享有スヘシ

第三條 兩締約國ノ領地及ヒ其所屬地ノ間ニハ相互ニ通商及ヒ航海ノ自由アルヘシ兩締約國ノ一方ノ臣民若クハ人民ハ他ノ一方ノ領地及ヒ其所屬地ニシテ最惠國ノ臣民若クハ人民ノ到リ得ヘキ各所各港ヘハ其船舶貨物ヲ以テ自由安全ニ到ルコトヲ得且ツ最惠國ノ臣民若クハ人民ノ滞在住居シ得ヘキ各所各港ニ滞在住居スルコトヲ得又右臣民若クハ人民ハ其住居地ニ在テ家屋倉庫ヲ借受ケ總テ正業ニ屬スル天產物、製造品及ヒ其他商品ノ卸賣若クハ小賣營業ニ從事スルコトヲ得

第四條 日本皇帝陛下ハ本條約前條ニ依リ日本國ニ渡來スル墨西哥國人民ニ附與シタル特權ノ外茲ニ此條約ニ記載セル數箇ノ條款ニ對シ別ニ同國人民ニ許與スルニ皇帝陛下ノ領地内及ヒ其所屬各所ニ入來シ又ハ滞在住居シ同所ニ於テ家屋倉庫ヲ借受ケ又ハ總テ正業ニ屬スル天產物、製造品及ヒ各種商品ノ卸賣若クハ小賣營業及ヒ其他一切合法ノ職業ニ從事スルノ特權ヲ以テス

第五條 兩締約國ハ其一方ノ領地ニ於テ通商航海旅行及ヒ住居ノ事ニ關シ他ノ



外國ノ臣民若クハ人民ニ現ニ許與シ若クハ將來許與スヘキ一切ノ殊遇特權及ヒ免除ハ他ノ一方ノ臣民若クハ人民ニモ之ヲ許與シ而シテ右殊遇特權及ヒ免除ハ報酬ヲ要セスシテ他ノ外國ノ臣民若クハ人民ニ許與シタルモノニ係レハ又均シク報酬ヲ要セスシテ之ヲ許與シ若シ別段ノ約束ニ依テ許與シタル者ニ係レハ則チ同一ノ約束又ハ之ト同一ノ價值ヲ有スル報酬ニ對シテ之ヲ許與スヘキコトヲ約ス

第六條 噸稅、燈稅、港稅水先案内費、難破救助費及ヒ其他ノ諸稅ニ就キテハ日本各港ニ於ケル墨西哥合衆國ノ船舶又墨西哥合衆國各港ニ於ケル日本國ノ船舶ニ對シ最惠國ノ船舶ニ現ニ賦課シ又ハ將來賦課スヘキ諸稅ニ異ナルカ又ハ之ヨリ多額ノ稅金ヲ賦課スルコトナカルヘシ

第七條 墨西哥合衆國ノ天產物及ヒ製造品ヲ日本國ニ輸入シ又ハ日本國ノ天產物及ヒ製造品ヲ墨西哥合衆國ニ輸入スルトキハ他ノ外國ノ產出若クハ製造ニ係ル同種類ノ物品ニ對シ現ニ賦課シ若クハ將來賦課スヘキ輸入稅ニ異ナルカ又ハ之ヨリ多額ノ稅ヲ賦課スルコトナカルヘシ又兩締約國ノ一方ノ領地若クハ所屬地ヨリ他ノ一方ノ領地若クハ所屬地ヘ向ケ輸出スル物品ニ就テハ他ノ

外國ヘ向ケ輸出スル同種類ノ物品ニ對シ現ニ賦課シ若クハ將來賦課スヘキ諸稅金ニ異ナルカ又ハ之ヨリ多額ノ稅ヲ賦課スルコトナカルヘシ又兩締約國ノ一方ノ領地ノ天產物若クハ製造品ヲ他ノ一方ノ領地若クハ所屬地ニ輸入スルヲ禁スルハ他ノ外國ノ產出若クハ製造ニ係ル同種類ノ物品ノ輸入ヲ禁スル場合ニ限ルヘシ又兩締約國ノ一方ノ領地ヨリ他ノ一方ノ領地若クハ所屬地ヘ向ケ物品ヲ輸出スルヲ禁スルハ他ノ外國ノ領地ヘ向ケ同種類ノ物品ノ輸出ヲ禁スル場合ニ限ルヘシ

第八條 日本國又ハ其領海ニ來ル墨西哥合衆國ノ人民及ヒ船舶ハ日本國又ハ其領海ニ在ル間ハ墨西哥合衆國及ヒ其領海ニ到ル日本皇帝陛下ノ臣民及ヒ船舶カ墨西哥國ノ法律及ヒ其裁判管轄ニ服従スルト同様日本國ノ法律ヲ遵奉シ且ツ其裁判管轄ニ服従スヘキモノトス

第九條 本條約ハ其批准書交換後直ニ實行スヘシ而シテ兩締約國ノ一方ヨリ本條約ヲ廢棄スルノ意ヲ他ノ一方ヘ通知シタル日ヨリ六個月間其効力ヲ有シ此期限ヲ經過シタル上ハ直ニ其効力ヲ失フヘシ



第十條 本條約ハ日本文西班牙文及ヒ英文ノ三國文ニ記スヘシ若シ日本文ト西班牙文トノ間ニ文意相異ナルトキハ英文ニ從リ之ヲ斷定スヘキコトヲ雙方政府約束ス

第十一條 本條約ハ可成丈ケ早キ時期ニ兩締約國ニ於テ互ニ批准シ亞米利加合衆國華盛頓府ニ於テ其批准書ヲ交換スヘシ

右證據トシテ雙方ノ全權委員本條約六通ニ記名調印スルモノ也

日本明治二十一年十一月三十日

西曆千八百八十八年十一月三十日

華盛頓府ニ於テ

陸 奥 宗 光 印

エ、ム、ロ、メ、ロ 印

天祐ヲ保有シ萬世一系ノ帝位ヲ踐ミタル日本國皇帝此書ヲ見ル有衆ニ宣示ス帝國ト墨西哥合衆國トノ交際ヲ永久親睦ナラシメンコトヲ欲シ明治二十一年十一月三十日北米合衆國華盛頓府ニ於テ兩國全權委員ノ記名調印シタル修好通商

廿七年勅令  
第四十一號  
參照

條約文ノ各條目ヲ朕親シク閱覽點檢シタルニ善ク朕カ意ニ適シ間然スル所ナキヲ以テ右條約ヲ嘉納批准ス

神武天皇即位紀元二千五百四十九年明治二十二年一月二十九日東京宮城ニ於テ親ヲ名ヲ署シ璽ヲ鈐セシム

御 名 御 璽

外務大臣 伯爵大 隈 重 信 印

布哇國修好通商條約

明治四年辛未七月四日(西曆千八百七十一年第八月十八日)

大日本國 天皇陛下ト布哇諸島 皇帝陛下兩國の間に親睦の交際を起さん事を欲し兩國利益の爲め條約を結はん事を決定し大日本國 天皇陛下は大臣從三位守外務卿清原朝臣宣嘉大臣從四位守外務大輔藤原朝臣宗則を其全權に任し布哇諸島の 皇帝陛下は大臣チャルレス、イ、デロングを大日本國 天皇陛下政府の下に在る特派全權公使に任し雙方互に其委任狀を示し其情實順正適當たるを察し以て左の條々を同意決定せり

第一條 大日本國 天皇陛下ト布哇諸島 皇帝陛下各其後嗣並兩國人民の間に



永久の平和無窮の親睦あるへし

第二條 爰に條約を結へる兩國の臣民は他國の臣民と交易するを許せる總ての場所諸港及び河々に其船舶及び荷物をも以て自由安全に來り得へし故に兩國の臣民右諸港諸地に止り且住居を占め家屋土藏を借用し又之を領する事妨げなく諸種の產物製造物商買の法令に違背せざる商物を貿易し他國の臣民に已に許せし或は此後許さんとする別段の免許は何れの廉にても他國へ一般に許容する者は兩國の臣民にも同様推及すへし尤爰に條約を結へる兩國領内にて事業を營み或は居留する他國の臣民より取立へき租税は常に拂ふへし

第三條 爰に條約を結へる兩國若し然るへきと思ハレデプロマチック、エゼントを命し兩國政府の首府に在留せしむへし又コンシユル或はコンシユラルエゼントを命し國中にて他國臣民と貿易する事を許せる諸港或は諸場所に居留せしむへし右兩國のコンシユル或はコンシユラル、エゼントは他の最も懇親なる國の同位階を有せるエゼントの今現に得たる公理別段の免許免除自由の殊典を得へし或は此後得へき者も亦然りとす

第四條 大日本國 天皇陛下より他國或は臣民に免許し或は向後免許すへき諸

事は布哇政府及び其臣民にも同様に之を推及すへき事を茲に約せり

第五條 布哇人は日本人を雇ひ是を法度に於て禁せざる諸用に給する事日本政府に於て之を妨さるへし

第六條 外國人雇置く日本人開港場知事に願出れば海外行の印章を得へし

第七條 爰に條約を結へる兩國此條約の趣を實地經驗の上何れの方にてても不都合の廉あるを知らば六箇月前に報知し雙方協議の上改定すへし

第八條 此條約ハ大日本國 天皇陛下と布哇諸島の 皇帝陛下互に確證し本書は東京に於て此條約と同日に取替せり又此條約の趣は右本書取替せの日より直に施行すへし

右證據として大日本明治四年辛未七月四日西曆千八百七十一年第八月十八日東京に於て雙方の全權此條約に名を記し印を調する者也

從三位守外務卿清原朝臣宣嘉 印

從四位守外務大輔藤原朝臣宗則 印



### 大不列顛國通商航海條約

○勅令 明治二十七年八月二十七日

#### 通商航海條約

日本國皇帝陛下及大不列顛愛蘭聯合王國兼印度國皇帝陛下ハ兩國臣民ノ交際ヲ皇張増進シ以テ幸ニ兩國間ニ存在スル所ノ厚誼ヲ維持セムコトヲ欲シ而シテ此ノ目的ヲ達セムニハ從來兩國間ニ存在スル所ノ條約ヲ改正スルニ如カサルヲ確信シ公正ノ主義ト相互ノ利益ヲ基礎トシ其ノ改正ヲ完了スルコトニ決定シ之カ爲メニ日本國皇帝陛下ハ英國駐劄帝國特命全權公使從二位勳一等子爵青木周藏ヲ、大不列顛愛蘭聯合王國兼印度國皇帝陛下ハ其ノ外務大臣ガーター勳章ノ「ナイト」セー、ライト、オノレールブル、ジョン、キム、パーレー伯爵ヲ各其ノ全權委員ニ任命セリ因テ各全權委員ハ互ニ其ノ委任狀ヲ示シ其ノ良好妥當ナルヲ認メ以テ左ノ諸條ヲ協議決定セリ

第一條 兩締盟國ノ一方ノ臣民ハ他ノ一方ノ版圖内何レノ所ニ到リ、旅行シ或ハ

住居スルモ全ク隨意タルヘク而シテ其ノ身體及財産ニ對シテハ完全ナル保護ヲ享受スヘシ

該臣民ハ其ノ權利ヲ伸張シ及防護セムカ爲メ自由ニ且容易ニ裁判所ニ訴出ルコトヲ得ヘク又該裁判所ニ於テ其ノ權利ヲ伸張シ及防護スルニ付内國臣民ト同様ニ代言人辯護人及代人ヲ撰擇シ且使用スルコトヲ得ヘク而シテ右ノ外司法取扱ニ關スル各般ノ事項ニ關シテ内國臣民ノ享有スル總テノ權利及特典ヲ享有スヘシ

住居權、旅行權及各種動産ノ所有、遺囑又ハ其ノ他ノ方法ニ因ル所ノ動産ノ相續、並ニ合法ニ得ル所ノ各種財産ヲ如何ニ處分スルコトニ關シ兩締盟國ノ一方ノ臣民ハ他ノ一方ノ版圖内ニ在リテ内國若ハ最惠國ノ臣民或ハ人民ト同様ノ特典、自由及權利ヲ享有シ且此等ノ事項ニ關シテハ内國若ハ最惠國ノ人民ニ比シテ多額ノ税金若ハ賦課金ノ徵收セラル、コトナカルヘシ

兩締盟國ノ一方ノ臣民ハ他ノ一方ノ版圖内ニ於テ良心ニ關シ完全ナル自由、及法律、勅令及規則ニ從テ公私ノ禮拜ヲ行フノ權利、並ニ其ノ宗教上ノ慣習ニ從ヒ埋葬ノ爲メ設置保存セラル、所ノ適當便宜ノ地ニ自國人ヲ埋葬スルノ權利ヲ



享有スヘシ  
何等ノ名義ヲ以テスルモ該臣民ヲシテ内國若ハ最惠國ノ臣民或ハ人民ノ納ムル所若ハ納ムヘキ所ニ異ナルカ又ハ之ヨリ多額ノ取立金若ハ租稅ヲ納メシムルヲ得ス

第二條 兩締盟國ノ一方ノ臣民ニシテ他ノ一方ノ版圖内ニ住居スル者ハ陸軍、海軍、護國軍、民兵等ニ論ナク總テ強迫兵役ヲ免カレ且其ノ服役ノ代リトシテ取立ル所ノ一切ノ納金ヲ免カレ又一切ノ強募公債及ヒ軍事上ノ賦斂、或ハ捐資ヲ免カルヘシ

第三條 兩締盟國ノ間ニハ相互ノ通商及航海ノ自由アルヘシ  
兩締盟國ノ一方ノ臣民ハ他ノ一方ノ版圖内何レノ所ニ於テモ總テ正業ニ屬スル各種ノ生産物、製造品及貨物ノ卸賣若ハ小賣營業ニ從事スルヲ得ヘシ右營業ニ從事スルニ於テ自身ニ之ヲ爲シ、或ハ代理人ヲ以テシ、又ハ一人ニテ之ヲ爲シ或ハ外國人若ハ内國臣民ト組合ヲ結ヒテ之ヲ爲スモ隨意タルヘク又必要ナル家屋、製造所、倉庫、店舖及附屬構造物ヲ所有シ或ハ之ヲ借受ケ又ハ使用シ、且住居及商業ノ爲メニ土地ヲ借受クルコトヲ得但シ内國臣民ト同様其ノ國ノ法律、警

察規則及稅關規則ヲ遵守スルヲ要ス

該臣民ハ他ノ一方ノ版圖内ノ各地諸港及諸河ニシテ外國通商ノ爲メ開カレ又ハ開カルヘキ場所ヘ船舶及貨物ヲ以テ自由ニ到ルヲ得且通商及航海ニ關シテハ政府、官吏、公吏、一私人或ハ會社若ハ何等施設ノ名義ヲ以テスルカ又ハ其ノ利益ノ爲メニ課セラル、所ノ稅金或ハ取立金ハ其ノ性質若ハ名稱ノ如何ヲ論セス内國臣民若ハ最惠國臣民或ハ人民ノ拂フ所ニ異ナルカ或ハ之ヨリ多額ノモノヲ拂フコトナク内國臣民若ハ最惠國臣民或ハ人民ト同一ノ取扱ヲ受クヘシ但シ常ニ各其ノ國ノ法律勅令及規則ニ從フヘキモノトス

第四條 兩締盟國ノ一方ノ臣民カ他ノ一方ノ版圖内ニ於テ住居若ハ商業ノ爲メニ供スル家宅、製造所、倉庫、店舖及之ニ屬スル總テノ附屬構造物ハ侵スヘカラス、右家宅等ヘハ猥ニ侵入搜索スヘカラス又帳簿、書類或ハ簿記帳ヲ検査點閱スヘカラス但シ内國臣民ニ對シ法律、勅令及規則ヲ以テ制定セル條件及定式ニ據ルトキハ此ノ限ニ在ラス

第五條 大不列顛國皇帝陛下ノ版圖内ノ生産或ハ製造ニ係ル物品ハ何レノ地ヨリ日本國皇帝陛下ノ版圖内ニ輸入シ又日本國皇帝陛下ノ版圖内ノ生産或ハ製



造ニ係ル物品ヲ何レノ地ヨリ大不列顛國皇帝陛下ノ版圖内ニ輸入スルニモ總  
テ別國ノ生産或ハ製造ニ係ル同種ノ物品ニ課スル所ノ税ニ異ナルカ或ハ之ヨ  
リ多額ノ税ヲ課セラル、コトナカルヘシ又締盟國ノ一方ノ版圖内ヘ別國ノ生  
産或ハ製造ニ係ル物品ノ輸入ヲ禁止スルニ非サレハ他ノ一方ノ版圖内ノ生産  
或ハ製造ニ係ル同種ノ物品ヲ何レノ地ヨリ輸入スルコトモ禁止スルコトナカ  
ルヘシ但シ此ノ末段ノ取極ハ人畜或ハ農業ニ有用ナル植物ノ安全ヲ保護スル  
ニ必要ナル衛生上及其ノ他ノ禁止ニハ適用スヘカラサルモノトス

第六條 兩締盟國ノ一方ノ版圖内ヨリ他ノ一方ノ版圖内ヘ輸出スル一切ノ物品  
ヘハ他ノ各外國ヘ輸出スル同種物品ニ對シテ賦課スルコトナカルヘシ又兩締盟國ノ  
一方ノ版圖内ニ於テ他ノ各外國ニ向ヒ物品ノ輸出ヲ禁止スルニ非サレハ他ノ  
一方ノ版圖内ヘ同種ノ物品ヲ輸出スルコトヲモ禁止セサルヘシ  
第七條 兩締盟國ノ一方ノ臣民ハ他ノ一方ノ版圖内ニ在リテ總テノ内地通過税  
ハ免除セラルヘク又倉入獎勵金、便益及税金拂戻等ノ事項ニ就テハ全ク内國臣  
民ト均等ノ取扱ヲ享クヘシ

第八條 日本國皇帝陛下ノ版圖内ノ諸港ヘ日本國ノ船舶ヲ以テ適法ニ輸入シ若  
ハ輸入セラルヘキ總テノ物品ハ亦大不列顛國ノ船舶ヲ以テ同様ニ之ヲ右諸港  
ニ輸入スルコトヲ得此ノ場合ニ於テハ日本國船舶カ右様ノ物品ヲ輸入スルト  
キ課スヘキ税金或ハ雜費ノ外何等ノ名義ヲ以テスルモ更ニ別種或ハ多額ノ税  
金雜費等ヲ課セサルヘシ又大不列顛國皇帝陛下ノ版圖内ノ諸港ヘ大不列顛國  
ノ船舶ヲ以テ適法ニ輸入シ若ハ輸入セラルヘキ總テノ物品ハ亦日本國ノ船舶  
ヲ以テ同様ニ之ヲ右諸港ヘ輸入スルコトヲ得此ノ場合ニ於テハ大不列顛國船  
舶カ右様ノ物品ヲ輸入スルトキ課スヘキ税金或ハ雜費ノ外何等ノ名義ヲ以テ  
スルモ更ニ別種或ハ多額ノ税金雜費等ヲ課セサルヘシ右相互對等ノ取扱ハ右  
物品ノ直ニ原產地ヨリ到ルト其ノ他ノ場所ヨリ到ルトヲ問ハス必ス之ヲ施ス  
モノトス  
輸出ニ關シテモ前項ノ場合ト同様全ク均等ノ取扱ヲ施スヘシ故ニ締盟國ノ一  
方ヨリ適法ニ輸出シ若ハ輸出セラルヘキ物品ハ其ノ輸出ノ日本國船舶ニ依ル  
ト大不列顛國船舶ニ依ルトニ拘ハラヌ又其ノ仕向先ノ締盟國ノ一港タルト第  
三國ノ一港タルトヲ問ハス締盟國ノ版圖内ニ於テハ之ニ課スルニ同一ノ輸出



第九條 政府官吏、公吏、一人、會社若ハ何等施設ノ名義ヲ以テスルカ又ハ其ノ利益ノ爲メニ課セラル、所ノ噸稅、港稅、水先案内料、燈臺稅、檢疫費其ノ他之ト同種ノ税金ハ其ノ性質並ニ名義ノ如何ニ拘ハラス同一ノ條件ヲ以テ同様ノ場合ニ於テ内國船舶一般若ハ最惠國船ニ課スルモノニ非サレハ兩締盟國ノ一方ハ其ノ版圖内ノ港ニ於テ之ヲ他ノ一方ノ船舶ニ課セサルヘシ此ノ如キ均等ノ取扱ハ兩國ノ船舶カ何レノ地或ハ港ヨリ來リ又何レノ所ニ往クモノタリトモ相互同一タルヘキモノトス

第十條 兩締盟國ノ一方ノ版圖内ノ海港、海灣、船渠、川河或ハ其ノ他ノ碇泊所ニ於テ船舶ノ繫留又ハ貨物ノ船積、船卸ニ關スル一切ノ事項ニ就テハ内國船舶ニ許與セサル特典ハ均シク他ノ一方ノ締盟國ノ船舶ニモ許與セサルヘシ但シ本件ニ關シテモ亦兩締盟國ノ目的ハ兩國ノ船舶ニ對シ互ニ全ク均等ノ取扱ヲ施スニ在ルモノトス

第十一條 兩締盟國ノ沿海貿易ハ本條約ニ於テ規定スルノ限ニ在ラス各其ノ法律、勅令及規則ニ從ヒ之ヲ規定スヘキモノトス然レトモ日本國皇帝陛下ノ版圖

内ニ於ケル大不列顛國臣民又ハ大不列顛國皇帝陛下ノ版圖内ニ於ケル日本國臣民ハ此ノ事項ニ關シテハ各右法律勅令及規則ヲ以テ他ノ外國臣民或ハ人民ニ許與シ若ハ許與セラルヘキ諸權利ヲ享有スヘキモノトス  
大不列顛國皇帝陛下ノ版圖内ノ二箇以上ノ港ヘ仕向ケタル荷物ヲ外國ニ於テ積載シタル日本國船舶及日本國皇帝陛下ノ版圖内ノ二箇以上ノ港ヘ仕向ケタル荷物ヲ外國ニ於テ積載シタル大不列顛國船舶ハ外國貿易ヲ許サレタル仕向港ノ一ニ於テ其ノ積荷ノ一部ヲ陸揚シ而シテ其ノ最初ニ積載シタル荷物ノ剩餘ヲ陸揚スル爲メ他ノ一港若ハ數港ヘ進航スルコトヲ得ヘシ但シ常ニ兩國ノ法律及稅關規則ニ從フヘキモノトス  
但シ日本國政府ハ本條約ノ期限間是迄ノ通り大不列顛國船舶カ帝國ノ現開港場間ニ積荷ヲ運搬スルコトヲ許スコトヲ承諾ス尤大阪新潟及ヒ夷港ハ此ノ限ニ在ラス

第十二條 兩締同盟國ノ一方ノ軍艦或ハ商船ニシテ暴風又ハ其ノ他ノ危難ニ遭遇シ避難ノ爲メ已ムヲ得ス他ノ一方ノ海港ニ進入スルモノハ内國船舶ノ拂フヘキ税金ノ外何等ノ税金ヲ拂フコトナク其ノ港ニ於テ更ニ艤裝ヲ爲シ一切ノ



需用品ヲ求メ再ヒ航行スルヲ得ヘシ但シ商船ノ船長ニシテ其ノ費用ヲ支辨スル爲メ其ノ積荷ノ一部ヲ賣却スルヲ要スル場合ニハ該船長ハ其ノ寄港地ノ規則及税目ヲ遵守スヘキモノトス

兩締盟國ノ一方ノ軍艦或ハ商船ニシテ他ノ一方ノ沿岸ニ於テ淺瀬ニ乗上ケ或ハ難破シタルトキハ地方官ヨリ其ノ事件ノ生シタル地方ニ在ル所ノ總領事、領事、副領事又ハ代辨領事ヘ其ノ旨ヲ通知スヘシ但シ若其ノ地方ニ領事官ノ駐在セサルトキハ最近地方ノ總領事、領事、副領事又ハ代辨領事ヘ通知スヘシ

日本國皇帝陛下ノ領海ニテ難破シ若ハ海岸ニ乗上ケタル大不列顛國船舶ノ救助ニ關スル一切ノ手續ハ日本國法律、勅令及規則ニ從テ之ヲ爲スヘク又相互ノ主義ニ基キ大不列顛國皇帝陛下ノ領海ニテ難破シ若ハ海岸ニ乗上ケタル日本船舶ニ關スル一切ノ救助ノ處分ハ大不列顛國法律、勅令及規則ニ從テ之ヲ爲スヘシ

右難破若ハ乗上ケタル船舶竝ニ其ノ器具及其ノ他一切ノ附屬品及該船舶ヨリ救上ケタル貨物竝ニ商品及右等ノ諸物件ニシテ海中ニ投棄セラレタルモノ又ハ之ヲ賣却シタルトキハ其ノ收得金竝ニ該遭難船内ニ發見セラレタル一切ノ

書類ハ右船舶ノ持主或ハ代理人ヨリ要求スルトキハ之ニ引渡スヘシ右持主或ハ代理人ノ現場ニ在ラサルトキハ內國法律ニ定メタル期限内ニ當該總領事、領事、副領事或ハ代辨領事ヨリ請求アレハ之ヲ引渡スヘシ而シテ右領事官、持主或ハ代理人ハ內國船舶難破ノ場合ニ於テ拂フヘキ所ノ物品保存費竝ニ難破救助費及其ノ他ノ費用ノミヲ拂フヘキモノトス

難破船ヨリ救上ケタル貨物及商品ハ消費ノ爲メニ通關手續ヲ爲スモノニ非サレハ一切ノ關稅ヲ免除スヘシ但シ消費ノ爲メニ賣捌ク場合ニハ普通ノ關稅ヲ納ムレヲ要スルモノトス

兩締盟國ノ一方ノ臣民ニ屬スル船舶ニシテ他ノ一方ノ版圖内ニ於テ淺瀬ニ乗上ケ或ハ難破シタルトキ其ノ持主船長若ハ他ノ持主代理人不在ノ場合ニハ當該總領事、領事、副領事若ハ代辨領事ハ其ノ自國臣民ニ必要ノ補助ヲ與フル爲メ職權上ノ助力ヲ爲スヲ許サルヘキモノトス此ノ規定ハ持主、船長若ハ他ノ代理人現ニ其ノ場ニ在ルトキト雖モ右様ノ補助ヲ與フルヲ請求スル場合ニハ亦適用スヘキモノトス

第十三條 本條約ニ於テハ日本國ノ國法ニ從ヒ日本國船舶ト見做サルヘキ一切



ノ船舶ハ之ヲ日本國船舶ト見認メ又大不列顛國ノ國法ニ從ヒ大不列顛國船舶ト見做サルヘキ一切ノ船舶ハ之ヲ大不列顛國船舶ト見認ムヘシ

第十四條 兩締盟國ノ一方ノ版圖内ニ駐在スル他ノ一方ノ總領事、領事、副領事及代辨領事ハ自國ノ脱船人ヲ取戻ス爲メ法律ノ許ス所ノ補助ハ之ヲ地方官ヨリ受クヘキモノトス

但シ海員カ其ノ各自ノ所屬國ニ於テ脱船シタルトキハ此ノ規定ヲ適用セサルモノト知ルヘシ

第十五條 兩締盟國ハ其ノ一方ノ通商及航海ヲ他ノ一方ニ於テ總テ最惠國ノ基礎ニ置ク主意ヲ有スルニ因リ通商及航海ニ關スル一切ノ事項ニ關シ其ノ一方ヨリ別國ノ政府、船舶、臣民或ハ人民ニ現ニ許與シ或ハ將來許與スヘキ一切ノ特典殊遇若ハ免除ハ他ノ一方ノ政府、船舶、臣民或ハ人民ニモ即時ニ且條件ヲ附セシテ之ヲ許與スヘキコトヲ兩締盟國ニ於テ約定ス

第十六條 兩締盟國ノ一方ハ他ノ一方ノ海港、都府及其ノ他ノ場所ニ總領事、領事、副領事、領事代及代辨領事ヲ置クコトヲ得ヘシ但シ領事官ノ駐在ヲ認許スルニ便宜ナラサル場所ハ此ノ限ニ在ラス

然レモ右ノ制限ハ他ノ諸外國ニ對シ之ヲ適用スルニ非サレハ一方ノ締盟國ニ對シテ之ヲ適用スルヲ得サルモノトス

總領事、領事、副領事、領事代及代辨領事ハ一切ノ職務ヲ執行スルコトヲ得且其在留國ニ於テ最惠國ノ領事官ニ現ニ許與シ或ハ將來許與セラルヘキ一切ノ特典特權及免除ハ總テ之ヲ享有スヘキモノトス

第十七條 兩締盟國ノ一方ノ臣民ハ他ノ一方ノ版圖内ニ於テ法律ニ定ムル所ノ手續ヲ履行スルトキハ專賣特許、商標及意匠ニ關シ内國臣民ト同一ノ保護ヲ受クヘシ

第十八條 大不列顛國政府ハ同政府ニ關スル限ハ左ノ取極ニ同意スヘシ  
日本國ニ在ル各外國人居留地ハ全ク其ノ所在ノ日本國市區ニ編入シ爾後日本國地方組織ノ一部トナルヘシ

然ル上ハ日本國當該官吏ハ之ニ關シテ其ノ地方施政上ノ責任義務ヲ悉皆負擔スヘシ又之ト同時ニ右外國人居留地ニ屬スル共有資金若ハ財產アルトキハ之ヲ右日本國官吏ヘ引渡スヘキモノトス  
尤前記外國人居留地ヲ日本國市區ニ編入ノ場合ニハ該居留地内ニテ現ニ因テ



以テ財産ヲ所持スル所ノ現在永代借地券ハ有效ノモノト確認セラルヘシ而シテ右財産ニ對シテハ右借地券ニ載セタル條件ノ外ハ別ニ何等ノ條件ヲモ附セサルヘシ但シ借地券中ニ領事官トアルハ總テ日本國當該官吏ヲ以テ之ニ代ユヘキコト、知ルヘシ

外國人居留地公共ノ目的ノ爲メニ無借料ニテ既ニ貸與シタル各地所ハ永代ニ保存セラルヘシ且該地所ニシテ最初貸與シタルトキノ目的ニ使用セラル、限ハ總テノ租稅及徵收金ヲ免スヘシ但シ土地收用權ニハ從フヘキモノトス

第十九條 本條約ノ規定ハ法律ノ許ス限ハ大不列顛國皇帝陛下ノ殖民地並ニ其ノ海外領地ニ適用スヘシ但シ左ニ列記スル所ハ此ノ限ニ在ラス

印度

加奈太領地

ニュー、フワウンドランド

喜望峯殖民地

ナタル

ニュー、サウス、ウエールス

ヅ井クトリヤ

ク井ンスランド

タスマニヤ

南濠太利

西濠太利

ニュー、ジーランド

然レトモ東京駐劄大不列顛國皇帝陛下ノ代表者ヨリ本條約批准交換ノ日ヨリ二箇年内ニ本條約ノ規定ヲ前記ノ殖民地若クハ領地ノ孰レナリトモ適用スヘキ旨ヲ通知シタルトキハ之ヲ適用スヘキモノトス

第二十條 本條約ハ其ノ實施ノ日ヨリ兩締盟國間ニ現存スル嘉永七年八月二十三日即千八百五十四年十月十四日締結ノ約定慶應二年五月十三日即千八百六十六年六月二十五日締結ノ改稅約定安政五年七月十八日即千八百五十八年八月二十六日締結ノ修好通商條約及之ニ附屬スル一切ノ諸約定ニ代ハルヘキモノトス而シテ該條約及諸約定ハ右期日ヨリ總テ無効ニ歸シ隨テ大不列顛國カ日本帝國ニ於テ執行シタル裁判權及該權ニ屬シ又ハ其ノ一部トシテ大不列顛



國臣民カ享有セシ所ノ特典、特權及免除ハ本條約實施ノ日ヨリ別ニ通知ヲナサ  
ス全然消滅ニ歸シタルモノトス而シテ此等ノ裁判管轄權ハ本條約實施後ニ於  
テハ日本帝國裁判所ニ於テ之ヲ執行スヘシ

第二十一條 本條約ハ調印ノ日ヨリ少クモ五箇年ノ後迄ハ實施セラレサルモノ  
トス而シテ日本帝國政府ニ於テ本條約ヲ實施セント欲スル旨ヲ大不列顛國政  
府ニ通知シタル後一箇年ヲ經ルニ非サレハ實施セラレサルモノトス尤此ノ通  
知ハ調印ノ日ヨリ四箇年ヲ經タル後何時ニテモ爲スコトヲ得ヘシ又本條約ハ  
其ノ實施ノ日ヨリ十二箇年間效力ヲ有スルモノトス

兩締盟國ノ一方ハ本條約實施ノ日ヨリ十一箇年ヲ經過シタル後ハ何時タリト  
モ本條約ヲ終了セント欲スル旨ヲ他ノ一方ヘ通知スルノ權利ヲ有スヘシ而シ  
テ此ノ通知ヲ爲シタル後十二箇月ヲ經過シタルトキハ本條約ハ消滅ニ歸スヘ  
キモノトス

第二十二條 本條約ハ兩締盟國ニ於テ之ヲ批准シ其ノ批准ハ本日ヨリ六箇月以  
内ニ可成速ニ東京ニ於テ交換スヘシ  
右證據トシテ各全權委員ハ之ニ記名調印スルモノナリ

明治二十七年七月十六日倫敦ニ於テ本書二通ヲ作ル

青木周藏印  
キムパーレー印

天佑ヲ保有シ萬世一系ノ帝祚ヲ踐ミタル日本國皇帝(御名)此書ヲ見ル有衆ニ宣示ス  
朕帝國ト大不列顛國トノ交際ヲ永久親睦ナラシメンコトヲ欲シ明治二十七年七  
月十六日倫敦ニ於テ兩國全權委員ノ記名調印シタル通商航海條約ノ各條目ヲ親  
シク閱覽點檢シタルニ善ク朕カ意ニ適シ間然スル所ナキヲ以テ右條約ヲ嘉納批  
准ス

神武天皇紀元二千五百五十四年明治二十七年八月二十四日東京宮城ニ於テ親カ  
ラ名ヲ署シ璽ヲ鈐セシム

御名 璽

外務大臣 陸奥宗光 印

亞米利加合衆國通商航海條約

○勅令 明治二十八年三月二十四日

通商航海條約



日本國皇帝陛下及亞米利加合衆國大統領ハ兩國國民ノ交際ヲ皇張増進シ以テ幸ニ兩國間ニ存在スル所ノ厚誼ヲ維持セムコトヲ欲シ而シテ此ノ目的ヲ達セムニハ從來兩國間ニ存在スル所ノ條約ヲ改正スルニ如カサルヲ確信シ公正ノ主義ト相互ノ利益ヲ基礎トシ其ノ改正ヲ完了スルコトニ決定シ之カ爲メニ日本國皇帝陛下ハ米國駐劄帝國特命全權公使從四位勳四等栗野慎一郎ヲ亞米利加合衆國大統領ハ合衆國國務大臣「ウォルター・キュー、グレンシャム」ヲ各其ノ全權委員ニ任命セリ因テ各全權委員ハ互ニ其ノ委任狀ヲ示シ其ノ良好妥當ナルヲ認メ以テ左ノ諸條ヲ協議決定セリ

第一條 兩締盟國ノ一方ノ臣民或ハ人民ハ他ノ一方ノ領土内何レノ所ニ到リ旅行シ或ハ居住スルモ全ク隨意タルヘク而シテ其ノ身體及財産ニ對シテハ完全ナル保護ヲ享受スヘシ

該臣民或ハ人民ハ其ノ權利ヲ伸張シ及防護セムカ爲メ自由ニ裁判所ニ訴出ルコトヲ得ヘク又該裁判所ニ於テ其ノ權利ヲ伸張シ及防護スルニ付内國臣民或ハ人民ト同様ニ代言入辯護人及代人ヲ撰擇シ且使用スルコトヲ得ヘク而シテ右ノ外司法取扱ニ關スル各般ノ事項ニ關シテ内國臣民或ハ人民ノ享有スル總

テノ權利及特典ヲ享有スヘシ

住居權、旅行權及各種動産ノ所有、遺囑又ハ其ノ他ノ方法ニ因ル所ノ動産ノ相續並ニ合法ニ得ル所ノ各種財産ヲ如何ニ處分スルコトニ關シ兩締盟國ノ一方ノ臣民或ハ人民ハ他ノ一方ノ領土内ニ在リテ内國若ハ最惠國ノ臣民或ハ人民ト同様ノ特典、自由及權利ヲ享有シ且此等ノ事項ニ關シテハ内國若ハ最惠國ノ臣民或ハ人民ニ比シテ多額ノ税金若ハ賦課金ヲ徵收セラル、コトナカルヘシ

兩締盟國ノ一方ノ臣民或ハ人民ハ他ノ一方ノ領土内ニ於テ良心ニ關シ完全ナル自由、及法律、勅令及規則ニ從テ公私ノ禮拜ヲ行フノ權利、並ニ其ノ宗教上ノ慣習ニ從ヒ埋葬ノ爲メ設置保存セラル、所ノ適當便宜ノ地ニ自國人ヲ埋葬スルノ權利ヲ享有スヘシ

何等ノ名義ヲ以テスルモ該臣民或ハ人民ヲシテ内國若ハ最惠國ノ臣民或ハ人民ノ納ムル所若ハ將來納ムヘキ所ニ異ナルカ又ハ之ヨリ多額ノ取立金若ハ租稅ヲ納メシムルヲ得ス

兩締盟國ノ一方ノ臣民或ハ人民ニシテ他ノ一方ノ領土内ニ住居スル者ハ陸軍海軍護國軍、民兵等ニ論ナク總テ強迫兵役ヲ免カレ且其ノ服役ノ代リトシテ取



立ル所ノ一切ノ納金ヲ免カレ又一切ノ強募公債及軍事上ノ賦歛或ハ捐資ヲ免  
カルヘシ

第二條 兩締盟國ノ間ニハ相互ニ通商及航海ノ自由アルヘシ

兩締盟國ノ一方ノ臣民或ハ人民ハ他ノ一方ノ領土内何レノ所ニ於テモ總テ正  
業ニ屬スル各種ノ生産物、製造品及貨物ノ卸賣若ハ小賣營業ニ從事スルヲ得ヘ  
シ右營業ニ從事スルニ於テ自身ニ之ヲ爲シ、或ハ代理人ヲ以テシ、又ハ一人ニテ  
之ヲ爲シ、或ハ外國人若ハ内國臣民或ハ人民ト組合ヲ結ビテ之ヲ爲スモ隨意タ  
ルヘク又必要ナル家屋、製造所、倉庫、店舗及附屬構造物ヲ所有シ或ハ之ヲ借受ケ  
又ハ使用シ且住居及商業ノ爲メニ土地ヲ借受クルコトヲ得、但シ内國臣民或ハ  
人民ト同様其ノ國ノ法律、警察規則及稅關規則ヲ遵守スルヲ要ス  
該臣民或ハ人民ハ他ノ一方ノ領土内ノ各地、諸港及諸河ニシテ外國通商ノ爲メ  
開カレ又ハ開カルヘキ場所ヘ船舶及貨物ヲ以テ自由ニ到ルヲ得且通商及航海  
ニ關シテハ政府、官吏、公吏、一私人或ハ會社若ハ何等施設ノ名義ヲ以テスルカ又  
ハ其ノ利益ノ爲メニ課セラル、所ノ稅金或ハ取立金ハ其ノ性質若ハ名稱ノ如  
何ヲ論セス内國臣民或ハ人民若ハ最惠國臣民或ハ人民ノ拂フ所ニ異ナルカ或

ハ之ヨリ多額ノモノヲ拂フコトナク内國臣民或ハ人民若ハ最惠國臣民或ハ人  
民ト同一ノ取扱ヲ受クヘキモノトス

但シ本條及前條ノ規定ハ兩締盟國ノ各方ニ於テ商業労働者ノ移住、警察及公安  
ニ關シ現ニ行ハレ又ハ將來制定セラルヘキ法律、勅令及規則ニハ何等ノ影響ヲ  
及ホスコトナシ

第三條 兩締盟國ノ一方ノ臣民或ハ人民カ他ノ一方ノ領土内ニ於テ住居若ハ商  
業ノ爲メニ供スル家宅、製造所、倉庫、店舗及之ニ屬スル總テノ附屬構造物ハ侵ス  
ヘカラス

右家宅等ヘハ猥ニ侵入搜索スヘカラス又帳簿、書類或ハ簿記帳ヲ検査點閱スヘ  
カラス但シ内國臣民或ハ人民ニ對シ法律、勅令及規則ヲ以テ制定セル條件及定  
式ニ據ルトキハ此ノ限ニ在ラス

第四條 合衆國領土内ノ生産或ハ製造ニ係ル物品ハ何レノ地ヨリ日本國皇帝陛  
下ノ領土内ニ輸入シ又日本國皇帝陛下ノ領土内ノ生産或ハ造製ニ係ル物品ヲ  
何レノ地ヨリ合衆國ノ領土内ニ輸入スルニモ總テ別國ノ生産或ハ製造ニ係ル  
同種ノ課スル所ノ稅ニ異ナルカ或ハ之ヨリ多額ノ稅ヲ課セラル、コトナカル



ヘシ又締盟國ノ一方ノ領土内へ別國ノ生産或ハ製造ニ係ル物品ノ輸入ヲ禁止スルニ非サレハ他ノ一方ノ領土内ノ生産或ハ製造ニ係ル同種ノ物品ヲ何レノ地ヨリ輸入スルコトヲモ禁止スルコトナカルヘシ但シ此ノ末段ノ取扱ハ人畜或ハ農業ニ有用ナル植物ノ安全ヲ保護スルニ必要ナル衛生上及其ノ他ノ禁止ニハ適用スヘカラサルモノトス

第五條 兩締盟國ノ一方ノ領土内ヨリ他ノ一方ノ領土内へ輸出スル一切ノ物品ヘハ他ノ各外國へ輸出スル同種物品ニ對シ賦課シ若ハ賦課スヘキ所ニ異ナルカ或ハ之ヨリ多額ノ税金又ハ雜費ヲ賦課スルコトナカルヘシ又兩締盟國ノ一方ノ領土内ニ於テ他ノ各外國ニ向ヒ物品ノ輸出ヲ禁止スルニ非サレハ他ノ一方ノ領土内へ同種ノ物品ヲ輸出スルコトヲモ禁止セサルヘシ

第六條 兩締盟國ノ一方ノ臣民或ハ人民ハ他ノ一方ノ領土内ニ在リテ總テノ内地通關稅ハ免除セラルヘク又倉入、獎勵金、便益及税金拂戻等ノ事項ニ就テハ全ク内國臣民或ハ人民ト均等ノ取扱ヲ享クヘシ

第七條 日本國皇帝陛下ノ領土内ノ諸港へ日本國ノ船舶ヲ以テ適法ニ輸入シ若ハ輸入セラルヘキ物品ハ亦合衆國ノ船舶ヲ以テ同様ニ之ヲ右諸港ニ輸入スル

コトヲ得此ノ場合ニ於テハ日本國船舶カ右様ノ物品ヲ輸入スルトキ課スヘキ税金或ハ雜費ノ外何等ノ名義ヲ以テスルモ更ニ別種或ハ多額ノ税金雜費等ヲ課セサルヘシ又合衆國ノ領土内ノ諸港へ合衆國ノ船舶ヲ以テ適法ニ輸入シ若ハ輸入セラルヘキ物品ハ亦日本國ノ船舶ヲ以テ同様ニ之ヲ右諸港へ輸入スルコトヲ得此ノ場合ニ於テハ合衆國船舶カ右様ノ物品ヲ輸入スルトキ課スヘキ税金或ハ雜費ノ外何等ノ名義ヲ以テスルモ更ニ別種或ハ多額ノ税金雜費等ヲ課セサルヘシ右相互對等ノ取扱ハ右物品ノ直ニ原產地ヨリ到ルト其ノ他ノ場所ヨリ到ルトヲ問ハス必ス之ヲ施スモノトス

輸出ニ關シテ前項ノ場合ト同様全ク均等ノ取扱ヲ施スヘシ故ニ締盟國ノ一方ヨリ適法ニ輸出シ若ハ輸出セラルヘキ物品ハ其輸出ノ日本國船舶ニ依ルト合衆國船舶ニ依ルトニ拘ハラヌ又其ノ仕向先ノ締盟國ノ一港タルト第三國ノ一港タルトヲ問ハス締盟國ノ領土内ニ於テハ之ニ課スルニ同一ノ輸出稅ヲ以テシ又之ニ許スニ同一ノ獎勵金並ニ税金拂戻ノコトヲ以テスヘシ

第八條 政府、官吏、公吏、一私人、會社若ハ何等施設ノ名義ヲ以テスルカ又ハ其ノ利益ノ爲メニ課セラル、所ノ噸稅、港稅、水先案内料、燈臺稅、檢疫費其ノ他之ト同種



ノ税金ハ其ノ性質並ニ名義ノ如何ニ拘ハラズ同一ノ條件ヲ以テ同様ノ場合ニ於テ内國船舶一般若ハ最惠國船舶ニ課スルモノニ非サレハ兩締盟國ノ一方ハ其ノ領土内ノ港ニ於テ之ヲ他ノ一方ノ船舶ニ課セサルヘシ此ノ如キ均等ノ取扱ハ兩國ノ船舶カ何レノ地或ハ港ヨリ來リ又何レノ所ニ往クモノタリトモ相互同一タルヘキモノトス

第九條 兩締盟國ノ一方ノ領土内ノ海港、海灣、船渠、川河或ハ其ノ他ノ碇泊所ニ於テ船舶ノ繫留又貨物ノ船積、船卸ニ關スル一切ノ事項ニ就テハ内國船舶ニ許與セサル特典ハ均シク他ノ一方ノ締盟國ノ船舶ニモ許與セサルヘシ但シ本件ニ關シテモ亦兩締盟國ノ目的ハ兩國ノ船舶ニ對シ互ニ全ク均等ノ取扱ヲ施スニ在ルモノトス

第十條 兩締盟國ノ沿海貿易ハ本條約ニ於テ規定スルノ限ニ在ラス各其ノ法律勅令及規則ニ從ヒ之ヲ規定スヘキモノトス然レトモ日本國皇帝陛下ノ領土内ニ於ケル合衆國人民又ハ合衆國ノ領土内ニ於ケル日本國臣民ニ此ノ事項ニ關シテハ各右法律、勅令及規則ヲ以テ他ノ外國臣民或ハ人民ニ許與シ若ハ許與セラルヘキ諸權利ヲ享有スルモノトス合衆國ノ領土内ノ二個以上ノ港ヘ仕向ケ

タル荷物ヲ外國ニ於テ積載シタル日本國船舶及日本國皇帝陛下ノ領土内ノ二箇以上ノ港ヘ仕向ケタル荷物ヲ外國ニ於テ積載シタル合衆國船舶ハ外國貿易ヲ許サレタル仕向港ノ一ニ於テ其ノ積荷ノ一部ヲ陸揚シ而シテ其ノ最初ニ積載シタル荷物ノ剩餘ヲ陸揚スル爲メ他ノ一港若ハ數港ヘ進航スルコトヲ得ヘシ但シ常ニ兩國ノ法律及稅關規則ニ從フヘキモノトス

但シ日本國政府ハ本條約ノ期限間是迄ノ通り合衆國船舶カ帝國ノ現開港場間ニ積荷ヲ運搬スルコトヲ許スコトヲ承諾ス尤大阪、新潟及夷港ハ此限ニ在ラス

第十一條 兩締盟國ノ一方ノ軍艦或ハ商舟ニシテ暴風又ハ其他ノ危難ニ遭遇シ避難ノ爲ニ已ムヲ得ス他ノ一方ノ海港ニ進入スルモノハ内國船舶ノ拂フヘキ税金ノ外何等ノ税金ヲ拂フコトナク其ノ港ニ於テ更ニ艤裝ヲ爲シ一切ノ需用品ヲ求メ再ヒ航行スルヲ得ヘシ但シ商船ノ船長ニシテ其ノ費用ヲ支辨スル爲メ其ノ積荷ノ一部ヲ賣卸スルヲ要スル場合ニハ該船長ハ其寄港地ノ規則及稅目ヲ遵守スヘキモノトス

兩締盟國ノ一方ノ軍艦或ハ商船ニシテ他ノ一方ノ沿岸ニ於テ淺瀬ニ乗上ケ或ハ難破シタルトキハ地方官ヨリ其ノ事件ノ生シタル地方ニ在ル所ノ總領事、領



事、副領事又ハ代辨領事ヘ其ノ旨ヲ通知スヘシ但シ若其ノ地方ニ領事官ノ駐在セサルトキハ最近地方ノ總領事、領事、副領事又ハ代辨領事ヘ通知スヘシ

日本國皇帝陛下ノ領海ニテ難破シ若ハ海岸ニ乗上ケタル合衆國船舶ノ救助ニ關スル一切ノ手續ハ日本國法律、勅令及規則ニ從テ之ヲ爲スヘク又相互ノ主義ニ基キ合衆國ノ領海ニテ難破シ若ハ海岸ニ乗上タル日本船舶ニ關スル一切ノ救助ノ處分ハ合衆國法律ニ從テ之ヲ爲スヘシ

右難破若ハ乗上ケタル船舶竝ニ其ノ器具及其他一切ノ附屬品及該船舶ヨリ救上ケタル貨物竝ニ商品及右等ノ諸物件ニシテ海中ニ投棄セラレタルモノ又ハ之ヲ賣却シタルトキハ其ノ收得金、竝ニ該遭難船内ニ發見セラレタル一切ノ書類ハ右船舶ノ持主或ハ代理人ヨリ要求スルトキハ之ニ引渡スヘシ右持主或ハ代理人ノ現場ニ在ラサルトキハ內國法律ニ定メタル期限内ニ當該總領事、領事、副領事或ハ代辨領事ヨリ請求アレハ之ヲ引渡スヘシ而シテ右領事官、持主或ハ代理人ハ內國船舶難破ノ場合ニ於テ拂フヘキ所ノ物品保存費竝ニ難破救助費及其ノ他ノ費用ノミヲ拂フヘキモノトス

難破船ヨリ救上ケタル貨物及商品ハ消費ノ爲メニ通關手續ヲ爲スモノニ非ラ

サレハ一切ノ關稅ヲ免除スヘシ但シ消費ノ爲メニ賣捌ク場合ニハ普通ノ關稅ヲ納ムルヲ要スルモノトス

兩締盟國ノ一方ノ臣民或ハ人民ニ屬スル船舶ニシテ一方ノ領土内ニ於テ淺瀬ニ乗上ケ或ハ難破シタルトキ其ノ持主、船長若ハ持主代理人不在ノ場合ニハ當該總領事、領事、副領事若ハ代辨領事ハ其ノ自國臣民或ハ人民ニ必要ノ補助ヲ與フル爲メ職權上ノ助力ヲ爲スヲ許サルヘキモノトス此ノ規定ハ持主、船長若ハ他ノ代理人現ニ其ノ場ニ在ルトキト雖モ右様ノ補助ヲ與フルヲ請求スル場合ニハ亦適用スヘキモノトス

第十二條 本條約ニ於テハ日本國ノ國法ニ從ヒ日本國船舶ト見做サルヘキ一切ノ船舶ハ之ヲ日本國船舶ト見認メ又合衆國ノ國法ニ從ヒ合衆國船舶ト見做サルヘキ一切ノ船舶ハ之ヲ合衆國船舶ト見認ムヘシ

第十三條 兩締盟國ノ一方ノ領土内ニ駐在スル他ノ一方ノ總領事、領事、副領事及代辨領事ハ自國ノ脫船人ヲ取戻ス爲メ法律ノ許ス所ノ補助ハ之ヲ地方官ヨリ受クヘキモノトス

但シ海員カ其ノ各自ノ所屬國ニ於テ脫船シタルトキハ此ノ規定ヲ適用セサル



モノト知ルヘシ

第十四條 兩締盟國ハ其ノ一方ノ通商及航海ヲ他ノ一方ニ於テ總テ最惠國ノ基礎ニ置ク主意ヲ有スルニ因リ通商及航海ニ關スル一切ノ事項ニ關シ其ノ一方ヨリ別國ノ政府、船舶、臣民或ハ人民ニハ現ニ許與シ或ハ將來許與スヘキ一切ノ特典、殊遇若ハ免除ハ他ノ一方ノ政府、船舶、臣民或ハ人民ニモ若シ別國ヘ無報酬ニ許與シタルトキハ無報酬ニテ又若シ條件ヲ附シテ許與シタルトキハ其レト均一ノ條件ヲ附シテ之ヲ許與スヘキコトヲ兩締盟國ニ於テ約定ス

第十五條 兩締盟國ノ一方ハ他ノ一方ノ海港、都府及其ノ他ノ場所ニ總領事、領事、副領事、領事代及代辨領事ヲ置クコトヲ得ヘシ但シ領事官ノ駐在ヲ認許スルニ便宜ナラサル場所ハ此ノ限ニ在ラス

然レトモ右ノ制限ハ他ノ諸外國ニ對シ之ヲ適用スルニ非サレハ一方ノ締盟國ニ對シテ之ヲ適用スルヲ得サルモノトス  
總領事、領事、副領事、領事代及代辨領事ハ一切ノ職務ヲ執行スルコトヲ得且其ノ在留國ニ於テ最惠國ノ領事官ニ現ニ許與シ或ハ將來許與セラルヘキ一切ノ特典、特權及免除ハ總テ之ヲ享有スヘキモノトス

第十六條 兩締盟國ノ一方ノ臣民或ハ人民ハ他ノ一方ノ領土内ニ於テ法律ニ定ムル所ノ手續ヲ履行スルトキハ專賣特許、商標及意匠ニ關シ内國臣民或ハ人民ト同一ノ保護ヲ受クヘシ

第十七條 兩締盟國ハ左ノ取極ニ同意ス

日本國ニ在ル各外國人居留地ハ全ク其ノ所在ノ日本國市區ニ編入シ爾後日本國地方組織ノ一部トナルヘシ  
然ル上ハ日本國當該官吏ハ之ニ關シテ其ノ地方施政上ノ責任義務ヲ悉皆負擔スヘシ又之ト同時ニ右外國人居留地ニ屬スル共有資金若ハ財產アルトキハ之ヲ右日本國官吏ヘ引渡スヘキモノトス  
尤前記外國人居留地ヲ日本國市區ニ編入ノ場合ニハ該居留地内ニテ現ニ因テ以テ財產ヲ所持スル所ノ現在永代借地券ハ有效ノモノト確認セラルヘシ而シテ右財產ニ對シテハ右借地券ニ載セタル條件ノ外ハ別ニ何等ノ條件ヲモ附セサルヘシ但シ借地券中ニ領事官トアルハ總テ日本國當該官吏ヲ以テ之ニ代ユヘキコト、知ルヘシ

外國人居留地公共ノ目的ノ爲メニ無借料ニテ既ニ貸與シタル各地所ハ永代ニ



保存セラルヘシ且該地所ニシテ最初貸與シタルトキノ目的ニ使用セラル、限  
ハ總テノ租税及徴收金ヲ免スヘシ但シ土地收用權ニハ從フヘキモノトス

第十八條 本條約ハ其ノ實施ノ日ヨリ兩締盟國間ニ現存スル嘉永七年三月三日  
即千八百五十四年三月三十一日締結ノ和親條約安政五年六月十九日即千八百  
五十八年七月二十九日締結ノ修好通商條約慶應二年五月十三日即千八百六十  
六年六月二十五日締結ノ改稅約書明治十一年七月二十五日即千八百七十八年  
七月二十五日締結ノ約書及之ニ附屬スル一切ノ諸約定ニ代ハルヘキモノトス  
而シテ該條約及諸約定ハ右期日ヨリ總テ無効ニ歸シ隨テ合衆國カ日本帝國ニ  
於テ執行シタル裁判權及該權ニ屬シ又ハ其ノ一部トシテ合衆國人民カ享有セ  
シ所ノ特典特權及免除ハ本條約實施ノ日ヨリ別ニ通知ヲナス全然消滅ニ歸  
シタルモノトス而シテ此等ノ裁判管轄權ハ本條約實施後ニ於テハ日本帝國裁  
判所ニ於テ之ヲ執行スヘシ

第十九條 本條約ハ明治三十二年七月十七日ヨリ實施セラルヘキモノトス而シ  
テ其ノ日ヨリ十二箇年間効力ヲ有スルモノトス  
兩締盟國ノ一方ハ本條約實施ノ日ヨリ十一箇年ヲ經過シタル後ハ何時タリト

モ本條約ヲ終了セムト欲スル旨ヲ他ノ一方ヘ通知スルノ權利ヲ有スヘシ而シ  
テ此ノ通知ヲ爲シタル後十二箇月ヲ經過シタルトキハ本條約ハ消滅ニ歸スヘ  
キモノトス

第二十條 本條約ハ兩締盟國ニ於テ之ヲ批准シ其ノ批准ハ本條約調印後六箇月  
以內ニ可成速ニ東京又ハ華盛頓ニ於テ交換スヘシ  
右證據トシテ各全權委員ハ之ニ記名調印スルモノナリ  
明治二十七年十一月二十二日華盛頓ニ於テ本書二通ヲ作ル

栗野慎一郎 印

ウオレター、キユー、グレシヤム 印

亞米利加合衆國政府ノ提議ニ係ル右條約ニ對スル修正

第十九條第二項中兩締盟國ノ一方ハ下本條約實施ノ日ヨリ十一箇年ヲ經過シ  
タル後ハノ文字ヲ削リ其ノ後ノ文字ヲ挿入ス該項ハ左ノ如クナルヘシ  
兩締盟國ノ一方ハ其ノ後何時タリトモ本條約ヲ終了セムト欲スル旨ヲ他ノ一  
國ヘ通知スルノ權利ヲ有スヘシ而シテ此ノ通知ヲ爲シタル後十二箇月ヲ經過  
シタルトキハ本條約ハ消滅ニ歸スヘキモノトス



天祐ヲ保有シ萬世一系ノ帝祚ヲ踐ミタル日本國皇帝(御名此書ヲ見ル有衆ニ宣示ス朕帝國ト亞米利加合衆國トノ交際ヲ永久親睦ナラシメムコトヲ欲シ明治二十七年十一月二十二日華盛頓ニ於テ兩國全權委員ノ記名調印シタル通商航海條約及亞米利加合衆國政府ノ提議ニ係ル該條約ニ對スル修正ヲ親ク閱覽點檢シタルニ善ク朕カ意ニ適シ間然スル所ナキヲ以テ修正ヲ加ヘタル條約ヲ嘉納批准ス神武天皇即位紀元二千五百五十五年明治二十八年二月二十七日廣島行在所ニ於テ親カラ名ヲ署シ璽ヲ鈐セシム

御名 御璽

外務大臣 子爵陸奥宗光 印

### 清國通商航海條約

○勅令 明治二十九年十月二十八日

#### 通商航海條約

大日本國皇帝陛下及大清國皇帝陛下ハ明治二十八年四月十七日即光緒二十一年三月二十三日下ノ關ニ於テ調印セラレタル條約第六條ノ規定ニ依リ通商航海條約ヲ締結スルコトニ決セリ因テ大日本皇帝陛下ハ北京駐劄特命全權公使正四位

勳一等男爵林董ヲ大清國皇帝陛下ハ欽差全權大臣總理各國事務大臣尙書銜戶部左侍郎張蔭桓ヲ各其ノ全權大臣ニ任命シタルヲ以テ兩國ノ全權大臣ハ互ニ其ノ委任狀ヲ示シ其ノ良好妥當ナルヲ認メ左ノ諸條ヲ協議決定セリ  
第一條 大日本國皇帝陛下ト大清國皇帝陛下トノ間並ニ兩國臣民ノ間ニ永遠無窮ノ平和及親睦アルヘシ而シテ兩國臣民ハ各々兩締盟國ノ一方ニ於テ其ノ身體及財產ニ對シ等シク完全ナル保護ヲ享有スヘシ  
第二條 大日本國皇帝陛下ハ便宜ニ從ヒ其ノ外交官ヲ清國北京ニ駐劄セシムルコトヲ得大清國皇帝陛下モ亦便宜ニ從ヒ其ノ外交官ヲ日本國東京ニ駐劄セシムルコトヲ得  
右駐劄外交官ハ各々國際公法ニ因リ之ニ附與スル一切ノ權利特權及免除ヲ享有シ且總テ最惠國同様ノ外交官ニ附與スル所ノ待遇ヲ受ルコトヲ得其ノ身體家族隨員衛署居館及往復書信ハ犯スヘカラサルモノトス  
右外交官ハ毫モ障礙セラル、コトナク其ノ役員使丁通譯人僕婢及從者ヲ隨意ニ選用スヘシ  
第三條 大日本國皇帝陛下ハ外國通商ノ爲メニ現ニ開カレ若ハ將來開カルヘキ



清國ノ港市ノ内日本帝國ノ利害ニ必要ナリト認ムル場所ニ總領事、領事、副領事及代辦領事ヲ駐在セシムルコトヲ得

右領事官ハ清國官吏ヨリ相當ノ禮遇ヲ受ケ且最惠國ノ領事官ニ現ニ附與シ若ハ將來附與スヘキ總テノ資格、職權、裁判管轄權、特權及免除ヲ享有スヘキモノトス

大清國皇帝陛下モ亦同シク日本國內ニ於テ他國ノ領事官カ現ニ駐在シ若ハ將來駐在スヘキ場所ニ總領事、領事、副領事及代辦領事ヲ駐在セシムルコトヲ得而シテ右領事官ハ日本國ニ在ル清國臣民及財產ニ對スル日本帝國裁判所ノ裁判管轄權ニ屬スル事項ヲ除クノ外通常領事官ニ附與スル權利及特典ヲ享有スヘシ

第四條 日本國臣民ハ其ノ家族、雇員及僕婢ト共ニ現ニ外國人ノ居住貿易ノ爲メ開キ又ハ將來開クヘキ所ノ清國ノ諸港諸市ニ往來シ、住居シ、商工業製造業ヲ營ミ又ハ其ノ他一切合法ノ職業ニ從事シ且其ノ商品及携帶品ヲ搭載シ前記諸開港地ノ間ヲ隨意ニ往來スヘク又其ノ地ニ於テ外國人ノ使用及占有ノ爲メ既ニ選定シ若ハ將來選定セラルヘキ地區内ニ於テ家屋ヲ賃借賣買シ地所ヲ賃借シ

寺院、墓所、病院ヲ建設スルコトヲ得但シ此等一切ノ事項ニ付最惠國ノ臣民或ハ人民ニ現ニ附與シ若ハ將來附與スヘキモノト同一ノ特權及免除ヲ享有スヘキモノトス

第五條 日本國船舶ハ現ニ立寄港ナル安慶、大通、湖口、武穴、陸溪口及吳淞併ニ將來立寄港トセラルヘキ總テノ場所ニ於テ外國貿易ニ關スル現行章程ニ從ヒ旅客商品ヲ積卸セシムル爲メ之ニ寄港スルコトヲ得

清國ノ諸開港及諸立寄港外ノ港ニ不法ニ進入シ若ハ沿海及河筋ニ於テ密商ニ從事スル船舶ハ其ノ積荷ト共ニ清國政府ニ於テ之ヲ沒收スヘキモノトス

第六條 日本國臣民ハ自國領事ヨリ下附シ地方官ノ副署シタル旅券ヲ携帶スルトキハ游歴又ハ商用ノ爲メ清國內地ノ各部ニ旅行スルコトヲ得而シテ該旅券ハ旅行地方ニ於テ檢査ヲ求メラレタルトキハ之ヲ示スヘキモノトス該旅券ニ不正ノ點ナキニ於テハ携帶者ハ進行ヲ許可セラレ且其ノ旅行用ノ爲メ又ハ携帶品商品運搬ノ爲メ人夫、畜類、車輛、船隻ヲ雇入ル、ニ故障アルヘカラス若シ旅行者ニシテ旅券ヲ携帶セス又ハ法律ヲ犯ストキハ之ヲ處分スル爲メ最寄ノ領事官ニ引渡スヘシ但シ其ノ際唯必要ノ拘束ヲ加フルノミニシテ決シテ之ヲ虐



待スヘカラス旅券ハ之ヲ發シタル日ヨリ清曆十三箇月間效力ヲ有スヘシ日本國臣民旅券ヲ携帯セスシテ内地ニ旅行シタルトキハ三百兩ヲ超過セサル罰金ニ處スヘシ尤モ日本國臣民ハ各開港地ヨリ一百清里以内ニハ五日間ヲ限トシ旅券ヲ携帯セスシテ游歴スルコトヲ得但シ本條ノ規定ハ之ヲ船舶乗組ノ水夫ニ適用スルコトヲ得ス

第七條 清國ノ開港地ニ住居スル日本國臣民ハ清國臣民ヲ雇入レ總テ正當ノ業務ニ之ヲ使用スルコトヲ得

但シ清國政府又ハ官吏ニ於テ之ヲ制限シ或ハ妨碍スルコトヲ得ス

第八條 日本國臣民ハ荷物又ハ旅客運搬ノ爲メ一切ノ艇隻ヲ賃借スルコトヲ得而シテ之カ爲メ拂フヘキ金額ハ貸借人相互ノ間ニ於テ之ヲ定メ清國政府又ハ官吏之ニ干涉スルコトヲ得ス艇數ニ對シ制限ヲ置クヘカラス又ハ右艇隻ニ關シ若ハ貨物運搬ニ從事スル人夫ニ關シ何人ニモ專業免許ヲ附與スルコトヲ得ス而シテ右艇隻ヲ以テ密商ニ從事スルモノハ法ニ照シ之ヲ處罰スヘシ

第九條 清國ト泰西諸國トノ間ニ實施スル税目及税則ハ日本國臣民カ清國ヘ輸入シ若ハ日本國ヨリ清國ヘ輸入シ又ハ日本國臣民カ清國ヨリ輸出シ若ハ清國

ヨリ日本國ヘ輸出スル際一切ノ物品ニ適用スヘシ清國ト泰西諸國トノ間ニ存在スル税目及税則ニ於テ特ニ輸入若ハ輸出ヲ制限シ若ハ禁止セサル物品ハ規定ノ輸入税若ハ輸出税ヲ拂フノミニテ自由ニ清國ヘ輸入シ若ハ清國ヨリ輸出スルコトヲ得ヘシ但シ日本國臣民ハ何等ノ場合ニ於テモ最惠國臣民若ハ人民ガ清國ニ於テ現ニ納メ若ハ將來納ムヘキ輸出入税ニ異ナルカ或ハ之ヨリ多額ノ納税ヲ要セラル、コトナカルヘシ又日本國ヨリ清國ヘ輸入シ或ハ清國ヨリ日本國ヘ輸出スル一切ノ物品ハ其輸出入ニ際シ最惠國ヨリ輸入シ或ハ之ヘ輸出スル同様ノ物品ニ對シ清國ニ於テ現ニ課セラレ若ハ將來課セラルヘキモノト異ナルカ或ハ之ヨリ多額ノ税ヲ課セラル、コトナカルヘシ

第十條 日本國臣民カ清國ヘ輸入シ或ハ日本國ヨリ清國ヘ輸入シタル一切ノ物品ハ現行章程ニ從ヒ開港場ト開港場ノ間ヲ運搬中其ノ所有者ノ國籍或ハ之ヲ運搬スル運具船舶ノ國籍如何ニ拘ハラス之ニ對シ全ク各種ノ税金、賦課金、手数料、釐金等ヲ取立ツヘカラス

第十一條 日本國臣民ニシテ輸入物品ヲ清國內地ノ市場ニ運搬セムト欲スルモノハ其ノ物品ノ有税品ナルトキハ輸入税ノ二分ノ一、無税品ナルトキハ從價二



分半ニ當ル抵代税ヲ拂ヒ以テ其物品ニ對スル一切ノ通過税ノ免除ヲ受ルコト  
其ノ勝手タルヘシ而シテ右抵代税ヲ拂ヒタルトキハ該物品ニ對シ一切ノ内地  
税ヲ免除スル爲メ證書ヲ發附スヘキモノトス  
但シ本條ハ輸入阿片ニハ適用セサルコトト知ルヘシ

第十二條 清國ニ在ル日本國臣民カ清國開港場外ノ地ニ於テ買入レタル一切ノ  
清國生産物及物品ニシテ輸出セラレムトスルモノハ前條ニ記載シタル税率ニ  
依リ輸入税ノ代リニ輸出税ヲ基礎トシテ算出シタル抵代税ヲ拂ヒタル上其ノ  
輸出ニ際シ單ニ輸出税ヲ拂フ外ハ清國各地ニ於テ各種ノ税金、賦課金、手数料、釐  
金等ヲ免セララルヘシ但シ右ハ前記ノ生産物及物品ニシテ通過税仕拂ノ日ヨリ  
十二箇月ノ期限内ニ現ニ外國ニ輸出セラレタル場合ニ限ル

日本國臣民カ清國ノ開港地ニ於テ買入レタル一切ノ清國生産物及物品ニシテ  
海外輸出ヲ禁セラレサルモノハ輸出ノ際單ニ輸出税ヲ納ムル外ハ一切ノ内地  
税、賦課金、手数料、釐金等ヲ免除セラルヘシ且日本國臣民カ清國各地ニ於テ輸出  
ノ爲メ買入レタル一切ノ物品モ亦現行章程ニ從ヒ各開港場間ニ運搬スルヲ得  
ルモノトス

第十三條 商品ニシテ其ノ出所外國ニ屬スルコト僞ナク且之ニ對シ已ニ輸入税  
ヲ完納シタルトキハ其ノ輸入ノ日ヨリ三箇年内何時モ日本國臣民ニ於テ何等  
ノ輸出税ヲ納ムルコトナクシテ之ヲ清國ヨリ何レノ外國ヘモ輸出スルヲ得又  
該再輸出者ハ已ニ右商品ニ對シテ納メラレタル輸入税額ニ向テ清國税關ヨリ  
税金拂戻證書ヲ受クヘシ但シ該商品ハ原荷作ノ儘完全ニ保存セラレ異動ナキ  
ヲ要ス右拂戻證書ハ其ノ所有者ノ望ニ因リ清國税關官吏ニ於テ現金ヲ以テ之  
ヲ償辨スルヲ得ヘキモノトス

第十四條 清國政府ハ其ノ諸開港地ニ於テ官設倉庫ヲ設クルコトニ同意ス本件  
ニ關スル規則ハ追テ之ヲ設クヘシ

第十五條 日本國ノ商船ニシテ噸數百五十噸以上ノモノハ清國ノ開港ニ入航ス  
ルニ當リ其ノ登記噸數壹噸ニ付清銀四錢ノ割ヲ以テ噸税ヲ課セラルヘシ噸數  
百五十噸及其ノ以下ノモノハ登記噸數一噸ニ付一錢ノ割トス然レトモ右船舶  
ニシテ其ノ積荷ニ異動ナク入港後四十八時間以内ニ出港スルモノハ噸税ヲ免  
除セラルヘシ

日本國ノ船舶前記ノ噸税ヲ納メタル上ハ該税ヲ納メタル港口出發ノ日ヨリ向



フ四箇月間ハ清國ノ何レノ開港或ハ立寄港ニ於テモ噸稅ヲ免除セラルヘシ但シ日本國ノ船舶ハ清國ニ於テ現ニ修繕ヲ加ヘ居ル間ハ噸稅ヲ納ムルヲ要セス清國ノ何レノ開港間ニ於テ旅客手荷物書東無稅品運搬ノ爲メ日本國臣民ノ使用スル小船及艇隻ハ噸稅ヲ納ムルコトナカルヘシ尤モ其ノ運搬ノ時ニ當リ税金ヲ課セラレヘキ商品ヲ運搬スル所ノ小船及荷舟ハ總テ一噸ニ付壹錢ノ割ヲ以テ四箇月毎ニ一回噸稅ヲ納ムヘシ

日本國ノ船舶及艇隻ニ對シテハ噸稅ノ外別ニ手数料或ハ賦金ヲ課スルコトナカルヘシ但シ日本國ノ船舶及艇隻ハ最惠國ノ船舶及艇隻ノ噸稅ニ異ナルカ又ハ之ヨリ多額ノ噸稅ヲ納ムルコトナシト知ルヘシ

第十六條 清國ノ開港ニ來航スル日本國ノ商船ハ其ノ入港ノ際隨意ニ水先案内者ヲ雇入ル、コトヲ得該商船總テ正當ノ諸稅皆納ノ上出發セムトスル時ハ出港ノ際ニモ亦水先案内者ヲ使用スルコトヲ得

第十七條 日本國ノ商船破損又ハ其ノ他ノ理由ヲ以テ避難所ヲ要スルノ止ムヲ得サルニ至リタルトキハ最寄ノ何レノ清國港口ニモ入港スルコトヲ得尤モ其ノ船舶ノ修繕ヲ遂ル爲メ陸揚シタル物品ニ對シテ諸稅若ハ噸稅ヲ拂フコトナ

カルヘシ

但シ該物品ハ稅關吏ノ監督ニ屬スルモノトス右等ノ船舶清國沿岸ニ於テ淺瀬ニ乗揚ケ亦ハ難破シタルトキハ清國官吏ハ直ニ其ノ乗客及乗組員ヲ救助シ該船舶竝ニ其ノ積荷ヲ安全ナラシムルノ措置ヲ施スヘシ而シテ救助シタル人々ニハ懇篤ノ待遇ヲ與ヘ必要ノ場合ニハ最寄ノ領事館マテ送届クヘシ

清國ノ商船破損亦ハ其ノ他ノ理由ヲ以テ最寄ノ日本港口ニ避難所ヲ要スルノ止ムヲ得サルニ至リタルトキハ該船舶ハ日本官吏ヨリ同一ノ待遇ヲ享有スヘシ

第十八條 諸開港地ニ於ケル清國官吏ハ詐僞又ハ密商ノ爲メ收入ニ減少ヲ來タサル様其ノ必要ナリト認ムル措置ヲ施スヘシ

第十九條 日本國ノ船舶清國ノ強盜又ハ海賊ノ掠奪ニ遇フトキハ該強盜海賊ヲ逮捕處罰シ其ノ贓品ヲ取戻シ之ヲ其ノ持主ニ還付スルコトヲ務ムルハ清國官吏ノ職務タルヘシ

第二十條 清國ニ在ル日本國臣民ノ身體財產ニ關スル裁判管轄權ハ當該日本國官吏ニ專屬ス日本國臣民或ハ一切ノ他國臣民又ハ人民ヨリ日本國臣民竝ニ其



ノ財産ニ係ル訴訟ハ總テ清國官吏ノ干涉ヲ受クルコトナク右官吏ニ於テ審理判決スヘシ

第二十一條 清國官吏又ハ臣民カ清國ニ在ル日本國臣民ニ對シ又ハ其ノ財産ニ關シ民事訴訟ヲ起ストキハ日本國官吏ニ於テ之ヲ審理判決スヘシ  
清國臣民ニ對シ又ハ其ノ財産ニ關シ清國ニ在ル日本國官吏或ハ臣民ヨリ起ス所ノ民事訴訟ハ總テ清國官吏ニ於テ之ヲ審理判決スヘシ

第二十二條 清國ニ於テ犯罪ノ被告トナリタル日本國臣民ハ日本國ノ法律ニ依リ日本國官吏之ヲ審理シ其ノ有罪ト認メタルトキハ之ヲ處罰スヘシ  
清國ニ在ル日本國臣民ニ對シ犯罪ノ被告トナリタル清國臣民ハ清國ノ法律ニ依リ清國官吏之ヲ審理シ其ノ有罪ト認メタルトキハ之ヲ處罰スヘシ

第二十三條 清國臣民カ日本國臣民ニ對シテ負債ヲ償辨セス又ハ詐偽逃亡スルトキハ清國官吏之ヲ逮捕シ其ノ負債ヲ償還セシムルコトヲ務ムヘシ日本國官吏ニ於テモ日本國臣民カ清國臣民ニ對シテ詐偽逃亡シ又ハ其ノ負債ヲ償辨セサルモノヲ處分スルコトヲ務ムヘシ

第二十四條 清國ニ在ル日本人ニシテ罪ヲ犯シ又ハ負債ヲ償辨セスシテ詐偽逃亡シタル者清國ノ内地ニ通レ清國臣民ノ住居若ハ清國船舶中ニ潜伏スルトキハ清國官吏ハ日本國領事ヨリ請求次第日本國官吏ニ之ヲ引渡スヘシ  
又清國ニ在ル清國人ニシテ罪ヲ犯シ又ハ負債ヲ償辨セスシテ詐偽逃亡シタル者清國ニ在ル日本國臣民ノ住居若ハ清國領海ニ於ケル日本國船舶中ニ潜伏スルトキハ清國官吏ヨリ日本國官吏ヘ請求次第之ヲ引渡スヘシ

第二十五條 日本國ノ政府及臣民ハ其ノ現在効力ヲ有スル日清間條約諸條款ニ據リ得タル一切ノ特權免除及利益ヲ享有スルコトヲ更ニ茲ニ確定ス  
且日本國ノ政府及臣民ハ大清國皇帝陛下ヨリ他國ノ政府又ハ臣民ニ現ニ附與又ハ將來附與スヘキ一切ノ特權免除及利益ヲ享有スヘキコトヲ茲ニ規定ス

第二十六條 締盟國ノ一方ハ本條約批准交換ノ日ヨリ十箇年ノ終ニ於テ稅目及本條約ノ通商ニ關スル條款ノ改正ヲ要求スルコトヲ得然レトモ若シ最初十箇年ノ終ヨリ起算シ六箇月以内ニ兩締盟國ノ何レヨリモ右要求ヲ爲サス改正ヲ行ハサルトキハ本條約並ニ稅目ハ前十箇年ノ終ヨリ起算シ更ニ十箇年間其ノ儘効力ヲ有スヘシ而シテ其ノ後各十箇年ノ終ニ於ケルモ亦同様タルヘシ

第二十七條 締盟國ハ本條約ノ効力ヲ完全ナラシムルニ必要ナル章程ヲ協議決

第五十一章 通商條約



定スヘシ尤モ右章程ノ實施セララル、ニ至ル迄ハ現ニ清國ト泰西諸國トノ間ニ  
存スル取極及章程ニシテ其ノ本條約ノ規定ニ矛盾セスシテ適用セラレ得ル限  
ハ締盟國ニ於テ之ヲ遵守スヘキモノトス

第二十八條 本條約ハ日本文漢文及英文ニ調印スヘシ然レトモ將來議論ヲ防ク  
爲メ締盟國ノ全權大臣ハ日本文本文ト漢文本文トノ間ニ解釋ヲ異ニシタルト  
キハ其ノ異ナル點ハ英文本文ニ依テ之ヲ決裁スヘキコトヲ協議決定セリ

第二十九條 本條約ハ大日本國皇帝陛下及大清國皇帝陛下ニ於テ之ヲ批准セラ  
ルヘク而シテ其ノ批准書ハ本條約調印ノ日ヨリ三箇月以内ニ可成速ニ北京ニ  
於テ之ヲ交換スヘシ

右證據トシテ兩國ノ全權大臣本條約ニ記名調印スルモノナリ

明治二十九年七月二十一日即光緒二十二年六月十一日北京ニ於テ作ル

大日本帝國北京註劄特命全權公使正四位勳一等男 林 董(記名)印

大清帝國欽差全權大臣總理各國事務大臣尚書銜戶部左侍郎 張 蔭 桓(記名)印

天佑ヲ保有シ萬世一系ノ帝祚ヲ踐ミタル大日本國皇帝(御名)此書ヲ見ル有衆ニ宣  
示ス

朕明治二十八年四月十七日帝國ト大清國トノ間ニ締結セシ媾和條約第六條ノ規  
定ニ基キ明治二十九年七月二十一日北京ニ於テ兩國全權委員ノ記名調印シタル  
通商航海條約ノ各條目ヲ親シク閱覽點檢シタルニ善ク朕ノ意ニ適シ間然スル所  
ナキヲ以テ右條約ヲ嘉納批准ス  
神武天皇即位紀元二千五百五十六年明治二十九年九月二十九日東京宮城ニ於テ  
親カラ名ヲ署シ璽ヲ鈐セシム

御名 國璽

外務大臣 伯爵大隈重信印

### 獨逸國通商航海條約

○勅令 明治二十九年一月十九日

#### 獨逸國通商航海條約

日本國皇帝陛下及獨逸帝國ノ名義ヲ以テスル獨逸國皇帝普漏西國皇帝陛下ハ日



本國及獨逸國間ノ交際ヲ皇張増進シ以テ幸ニ兩國間ニ存在スル所ノ厚誼ヲ維持セムコトヲ欲シ而シテ此ノ目的ヲ達セムニハ從來兩國間ニ存在スル所ノ條約ヲ改正スルニ如カサルヲ確信シ公正ノ主義ト相互ノ利益ヲ基礎トシ其改正完了スルコトニ決定シ之カ爲メニ日本國皇帝陛下ハ獨逸國駐劄帝國特命全權公使子爵青木周藏ヲ獨逸國皇帝普瀋西國皇帝陛下ハ其ノ國務大臣外務大臣男爵アドルフ、マルシヤル、フオン、ビーベルスタインヲ各其ノ全權委員ニ任命セリ因テ各全權委員ハ互ニ其ノ委任狀ヲ示シ其ノ良好妥當ナル認メ以テ左ノ通商航海條約ヲ協議決定セリ

第一條 兩締盟國ノ一方ノ臣民ハ他ノ一方ノ版圖内何レノ所ニ到リ旅行シ或ハ居住スルモ全ク隨意タルヘキ而シテ其ノ身體及財産ニ對シテハ完全ナル保護ヲ享受スヘシ

該臣民ハ其ノ權利ヲ伸張シ及防護セムカ爲メ自由ニ且容易ニ裁判所ニ訴出ルコトヲ得ヘク又該裁判所ニ於テ其ノ權利ヲ伸張シ及防護スルニ付内國臣民ト同様ニ代言人辯護人及代人ヲ撰擇シ且使用スルコトヲ得ヘク而シテ右ノ外司法ニ關スル各般ノ事項ニ關シテ内國臣民ノ享有スル總テノ權利及特典ヲ享有

スヘシ

居住權、旅行權及各種動産ノ占有ニ關シ及生前行為ニ由リ取得スルコトヲ得ヘキ各種財産ヲ遺言又ハ死亡ニ由テ取得スルコト並ニ合法ニ得タル所ノ各種財産ヲ處分スルコトニ關シ兩締盟國ノ一方ノ臣民ハ他ノ一方ノ版圖内ニ在リテ内國若ハ最惠國ノ臣民或ハ人民ト同様ノ特典自由及權利ヲ享有シ且此等ノ事項ニ關シテハ内國若ハ最惠國ノ臣民或ハ人民ニ比シテ多額ノ取立金若ハ賦課金ヲ徵收セラル、コトナカルヘシ

兩締盟國ノ一方ノ臣民ハ他ノ一方ノ版圖内ニ於テ良心ニ關シ完全ナル自由、及法律、命令及規則ニ從テ公私ノ禮拜ヲ行フノ權利、並ニ其ノ宗教上ノ慣習ニ從ヒ埋葬ノ爲メ設置保存セラル、所ノ適當便宜ノ地ニ自國人ヲ埋葬スルノ權利ヲ享有スヘシ

何等ノ名義ヲ以テスルモ該臣民ヲシテ内國若ハ最惠國ノ臣民或ハ人民ノ納ムル所若ハ將來納ムヘキ所ニ異ナルカ又ハ之ヨリ多額ノ取立金若ハ租稅ヲ納メシメサルヘシ

第二條 兩締盟國ノ一方ノ臣民ニシテ他ノ一方ノ版圖内ニ住居スル者ハ陸軍、海



軍、護國軍、民兵等ニ論ナク總テ強迫兵役ヲ免カレ且其ノ服役ノ代リトシテ賦課  
スル所ノ一切ノ取立金ヲ免カレ又一切ノ強募公債及軍事上ノ賦斂或ハ取立金  
ヲ免カルヘシ

第三條 兩締盟國版圖ノ間ニハ相互ニ通商及航海ノ自由アルヘシ

兩締盟國ノ一方ノ臣民ハ他ノ一方ノ版圖内何レノ所ニ於テモ總テ賣買ヲ許サ  
レタル各種ノ生産物、製造品及商品ノ卸賣若ハ小賣營業ニ從事スルヲ得ヘシ右  
營業ニ從事スルニ於テ自身ニ之ヲ爲シ、或ハ代理人ヲ以テシ、又ハ一人ニテ之ヲ  
爲シ、或ハ外國人若ハ内國臣民ト組合ヲ結ヒテ之ヲ爲スモ隨意タルヘク又家宅、  
製造所、倉庫、店舖其ノ他ノ構造物ヲ占有シ、或ハ之ヲ借受ケ之ニ住居シ且住居、工  
業及商業ノ爲メニ土地ヲ借受クルコトヲ得、尤内國臣民同様其ノ國ノ法律、警察  
規則及稅關規則ヲ遵守スヘシ  
該臣民ハ他ノ一方ノ版圖内ノ各地諸港及諸河ニシテ商品ノ輸出入ノ爲メ開カ  
レ又ハ將來開カレタル場所ヘ船舶及貨物ヲ以テ自由ニ且安全ニ到ルヲ得且商  
業、工業及航海ニ關シテハ政府、官吏、公吏、一私人或ハ團體若ハ何等施設ノ名義ヲ  
以テシ又ハ其ノ利益ノ爲メニ課セラル、所ノ稅金、賦課金或ハ關稅ハ其ノ性質

若ハ名稱ノ如何ヲ論セス國內臣民若ハ最惠國ノ臣民或ハ人民ノ拂フ所ニ異ナ  
ルカ或ハ之ヨリ多額ノモノヲ拂フコトナク内國臣民若ハ最惠國ノ臣民或ハ人  
民ト同一ノ取扱ヲ受クヘシ但シ常ニ各、其ノ國ノ法律、命令及規則ニ從フヘキモ  
ノトス

第四條 兩締盟國ノ一方ノ臣民カ他ノ一方ノ版圖内ニ於テ有スル家宅、製造所、倉  
庫、店舖及住居、工業若ハ商業ノ爲メニ供スル總テノ附屬構造物ハ侵スヘカラス  
右建物等ハ猥ニ侵入搜索スヘカラス又帳簿書類或ハ諸計算書ヲ検査點閱スヘ  
カラス但シ内國臣民ニ對シ法律、命令及規則ニ從ヒ右侵入搜查ヲ爲シ得ヘキ條  
件及定式ニ據ルトキハ此ノ限ニ在ラス

第五條 日本國ノ生産或ハ製造ニ係ル物品ヲ何レノ地ヨリ獨逸國ニ輸入シ又獨  
逸國ノ生産或ハ製造ニ係ル物品ヲ何レノ地ヨリ日本國ニ輸入スルニモ總テ別  
國ノ生産或ハ製造ニ係ル同種ノ物品ニ課スル所ノ關稅ニ異ナルカ或ハ之ヨリ  
多額ノ關稅ヲ課セラル、コトナカルヘシ  
又兩締盟國ノ一方ノ版圖内ヘ第三國ノ生産或ハ製造ニ係ル物品ノ輸入ヲ禁止  
シ又ハ其ノ禁止ヲ存續スルニ非サレハ他ノ一方ノ版圖内ノ同種ノ物品ヲ何レ



ノ地ヨリ輸入スルコトヲモ禁止シ又ハ其ノ禁止ヲ存續スルコトナカルヘシ但シ此ノ末段ノ取極ハ公衆ノ衛生、畜類ノ安全或ハ農業ニ有用ナル植物ノ安全ヲ保護スルニ必要ナル衛生上及其ノ他ノ禁止ニハ適用スヘカラサルモノトス

第六條 兩締盟國ノ一方ノ版圖内ヨリ他ノ一方ノ版圖内へ輸出スル一切ノ物品ハ他ノ各外國へ輸出スル同種物品ニ對シ賦課シ若ハ將來賦課スヘキ所ニ異ナルカ或ハ之ヨリ多額ノ關稅又ハ取立金ヲ賦課スルコトナカルヘシ又兩締盟國ノ一方ノ版圖内ニ於テ他ノ各外國ニ向ヒ物品ノ輸出ヲ禁止スルニ非サレハ他ノ一方ノ版圖内へ同種ノ物品ヲ輸出スルコトヲモ禁止セサルヘシ

第七條 兩締盟國ノ一方ノ臣民ハ他ノ一方ノ版圖内ニ在リテ總テノ内地通過稅ノ免除並ニ倉入、輸出獎勵、便益及税金拂戻等ノ事項ニ就テハ内國臣民ト均等ノ取扱ヲ享クヘシ

第八條 兩締盟國ノ一方ノ版圖内ニ到ル他ノ一方ノ商人、工業者、及注文取集旅商カ見本トシテ輸入シタル總テノ有稅物品ニ對シテハ其ノ國ノ法律ヲ以テ定メラレタル期日内ニ賣捌カレスシテ再輸出スルコト、ナリ而シテ右再輸出ノ爲メ及稅關倉庫へ送戻ス爲メニ必要ナル定式ヲ履行スルニ於テハ輸出入ニ關ス

ル一切ノ取立金ヲ免除スヘシ但シ右見本再輸出ニ付テハ最初輸入ノ際其ノ輸入地ニ於テ其ノ税金ニ均シキ金額ヲ預ケ入ル、カ又ハ擔保ヲ差入レテ之ヲ保障スヘシ  
又見本帖、見本ノ一部及見本ニシテ唯タ見本用ニ適スルニ過キサレモノハ前項ニ掲載セシヨリ以外ノ方法ニ依リ輸入セラル、トキト雖モ其ノ輸入稅ヲ免除スヘシ

第九條 國、市、町、村若ハ團體ノ爲メニスルニ論ナク兩締盟國ノ一方ノ全版圖内又ハ其ノ一部分ニ於テ或物品ノ生産、製造又ハ消費ニ對シ内國稅ヲ賦課スルトヤハ他ノ一方ノ版圖内ヨリ輸入セラレタル同種ノ物品ニ對シテモ前記ノ全版圖内又ハ其一部分ニ於テ同一ノ稅ヲ賦課スルコトヲ得ルモ之ヨリ多額又ハ苛重ノ稅ヲ賦課スルコトヲ得ス  
同種ノ物品ニシテ前記ノ全版圖内又ハ其一部分ニ於テ生産、製造セラレス若ハ生産、製造セラレ、モ之ニ對シテ課稅セラレサルトキハ何等ノ税金ヲモ賦課スルコトヲ得ス

第十條 日本國ノ諸港へ日本國ノ船舶ヲ以テ適法ニ輸入シ若ハ輸入セラルヘキ



總テノ物品ハ亦獨逸國ノ船舶ヲ以テ同様ニ之ヲ右諸港ニ輸入スルコトヲ得此ノ場合ニ於テハ日本國船舶カ右様ノ物品ヲ輸入スルトキ課スヘキ關稅或ハ取立金ノ外何等ノ名義ヲ以テスルモ更ニ別種或ハ多額ノ關稅取立金等ヲ課セサルヘシ又獨逸國ノ諸港ヘ獨逸國ノ船舶ヲ以テ適法ニ輸入シ若ハ輸入セラルヘキ總テノ物品ハ亦日本國ノ船舶ヲ以テ同様ニ之ヲ右諸港ヘ輸入スルコトヲ得此ノ場合ニ於テハ獨逸國船舶カ右様ノ物品ヲ輸入スルトキ課スヘキ關稅或ハ取立金ノ外何等ノ名義ヲ以テスルモ更ニ別種或ハ多額ノ關稅取立金等ヲ課セサルヘシ右相互對等ノ取扱ハ右物品ノ直ニ原產地ヨリ到ルト其ノ他ノ場所ヨリ到ルトヲ問ハス必ス之ヲ施スモノトス

輸出ニ關シテモ前項ノ場合ト同様全ク均等ノ取扱ヲ施スヘシ故ニ兩締盟國ノ一方ヨリ適法ニ輸出セラルヘキ物品ハ其ノ輸出ノ日本國船舶ニ依ルト獨逸國船舶ニ依ルトニ拘ハラズ又其ノ仕向先ノ兩締盟國ノ一港タルト第三國ノ一港タルトヲ問ハス兩締盟國ノ版圖内ニ於テハ之ニ課スルニ同一ノ輸出稅ヲ以テシ又之ニ許スニ同一ノ輸出獎勵並ニ稅金拂戻ノコトヲ以テスヘシ

第十一條 國官吏、公吏、私人、團體若ハ何等施設ノ名義ヲ以テシ又ハ其利益ノ爲

メニ課セラル、所ノ噸稅、港稅、水先案内料、燈臺稅、檢疫費其ノ他之ト同種ノ稅金ハ其ノ性質並ニ名義ノ如何ニ拘ハラズ同様ノ場合ニ於テ同一ノ條件ヲ以テ内國船舶又ハ最惠國船舶ニ課スルモノニ非サレハ兩締盟國ノ一方ハ其ノ版圖内ノ港ニ於テ之ヲ他ノ一方ノ船舶ニ課セサルヘシ此ノ如キ均等ノ取扱ハ兩國ノ船舶カ何レノ地或ハ港ヨリ來リ又何レノ所ニ往クモノタリトモ相互同一タルヘキモノトス

第十二條 兩締盟國ノ一方ノ版圖内ノ海港、海灣、船渠、碇泊所及川河ニ於テ船舶ノ繫留又貨物ノ積卸ニ關シテハ内國船舶ニ許與セサル特典ハ均シク他ノ一方ノ船舶ニモ許與セサルヘシ但シ本件ニ關シテモ亦兩締盟國ノ目的ハ兩國ノ船舶ニ對シ互ニ全ク均等ノ取扱ヲ施スニ在ルモノトス

第十三條 兩締盟國ノ沿海貿易ハ本條約ニ於テ規定スルノ限ニ在ラス各其ノ法律、命令及規則ニ從ヒ之ヲ規定スヘキモノトス然レトモ獨逸國ニ於ケル日本國臣民又ハ日本國ニ於ケル獨逸國臣民ハ此ノ事項ニ關シテハ各右法律、命令及規則ヲ以テ他ノ外國臣民或ハ人民ニ許與シ若ハ將來許與セラレタル諸權利ヲ享有スルモノトス



獨逸國ノ二箇以上ノ港ヘ仕向ケタル荷物ヲ外國ニ於テ積載シタル日本國船舶及日本國ノ二箇以上ノ港ヘ仕向ケタル荷物ヲ外國ニ於テ積載シタル獨逸國船舶ハ輸出入ヲ許サレタル仕向港ノ一ニ於テ其ノ積荷ノ一部ヲ陸揚シ而シテ其ノ最初ニ積載シタル荷物ノ剩餘ヲ陸揚スル爲メ他ノ一港若ハ數港ヘ進航スルコトヲ得ヘシ但シ常ニ兩國ノ法律及稅關規則ニ從フヘキモノトス

但シ日本國政府ハ本條約ノ期限間是迄ノ通り獨逸國船舶カ帝國ノ現開港場間ニ積荷ヲ運搬スルコトヲ許スコトヲ承諾ス尤大坂新潟及夷港ハ此ノ限ニ在ラス

第十四條 兩締盟國ノ一方ノ軍艦或ハ商船ニシテ暴風又ハ其ノ他ノ危難ニ遭遇シ避難ノ爲メ已ムヲ得ス他ノ一方ノ海港ニ進入スルモノハ內國船舶ノ拂フヘキ賦課金ノ外何等ノ賦課金ヲ拂フコトナク其ノ港ニ於テ更ニ修覆ヲ爲シ一切ノ需用品ヲ求メ再ヒ航行スルヲ得ヘシ但シ商船ノ船長ニシテ其ノ費用ヲ支辨スル爲メ其ノ積荷ノ一部ヲ賣却スルヲ要スル場合ニハ該船長ハ其ノ寄港地ノ規則及稅目ヲ遵守スヘキモノトス

兩締盟國ノ一方ノ軍艦或ハ商船ニシテ他ノ一方ノ沿岸ニ於テ淺瀬ニ乗上ケ或

ハ難破シタルトキハ地方官廳ヨリ其ノ事件ノ生シタル地方ニ在ル所ノ總領事、領事、副領事又ハ代辨領事ヘ其ノ旨ヲ通知スヘシ但シ若其ノ地方ニ領事官ノ駐在セサルトキハ最寄地方ノ總領事、領事、副領事又ハ代辨領事ヘ通知スヘシ

獨逸國ノ領海ニテ難破シ若ハ淺瀬ニ乗上ケタル日本國船舶ノ救助ニ關スル一切ノ手續ハ獨逸國ノ法律、命令及規則ニ從テ之ヲ爲スヘク又之ト同ク日本國ノ領海ニテ難破シ若ハ淺瀬ニ乗上ケタル獨逸國船舶ニ關スル一切救助ノ手續ハ日本國ノ法律、命令及規則ニ從テ之ヲ爲スヘシ

右難破若ハ乗上ケタル船舶竝ニ其ノ部分及其ノ他一切ノ備付品、附屬品及該船舶ヨリ救上ケタル貨物竝ニ商品及右等ノ諸物件ニシテ海中ニ投棄セラレタルモノ又ハ之ヲ賣却シタルトキハ其ノ收得金、竝ニ該遭難船内ニ發見セラレタル一切ノ書類ハ右船舶ノ持主、或ハ代理人ヨリ要求スルトキハ之ニ引渡スヘシ右持主或ハ代理人ノ現場ニ在ラサルトキハ內國法律ニ定メタル期限内ニ當該總領事、領事、副領事或ハ代辨領事ヨリ請求アレハ之ヲ引渡スヘシ而シテ右領事官、持主或ハ代理人ハ內國船舶難破ノ場合ニ於テ拂フヘキ難破救助手當ヲモ籠メタル物品救揚費及物品保存費ノミヲ拂フヘキモノトス



難破船ヨリ救揚ケタル貨物及商品ハ消費ノ爲メニ通關手續ヲ爲スモノニ非サレハ一切ノ關稅ヲ免除スヘシ但シ消費ノ爲メニ通關手續ヲ爲ス場合ニハ普通ノ取立金ヲ納ムルヲ要スルモノトス

兩締盟國ノ一方ノ臣民ニ屬スル船舶ニシテ他ノ一方ノ領海ニ於テ淺瀬ニ乗上ケ或ハ難破シタルトキ其ノ持主、船長若ハ持主代理人不在ノ場合ニハ當該總領事、領事、副領事若ハ代辨領事ハ其ノ自國臣民ヲシテ必要ノ補助ヲ受ケシムル爲メ職權上ノ助力ヲ爲スヲ許サルヘキモノトス此ノ規定ハ持主、船長若ハ持主代理人現ニ其ノ場ニ在ルトキト雖モ右様ノ補助ヲ與フルヲ請求スル場合ニハ亦適用スヘキモノトス

第十五條 本條約ニ於テハ獨逸國ノ國法ニ從ヒ獨逸國船舶ト見做サルヘキ一切ノ船舶ハ之ヲ獨逸國船舶ト見認メ又日本國ノ國法ニ從ヒ日本國船舶ト見做サルヘキ一切ノ船舶ハ之ヲ日本國船舶ト見認ムヘシ

第十六條 兩締盟國ハ其ノ一方ノ通商及航海ヲ他ノ一方ニ於テ總テ最惠國ノ基礎ニ置ク主意ヲ有スルニ因リ通商及航海ニ關スル一切ノ事項ニ關シ其ノ一方ヨリ別國ノ政府、船舶、臣民或ハ人民ニ現ニ許與シ或ハ將來許與シタル一切ノ特

典、殊遇若ハ免除ハ他ノ一方ノ政府、船舶或ハ臣民ニモ即時ニ且條件ヲ附セスシテ之ヲ許與スヘキコトヲ兩締盟國ニ於テ約定ス

第十七條 兩締盟國ノ一方ノ臣民ハ他ノ一方ノ版圖内ニ於テ發明、見本實用ニ供スル見本、共、雛形、商標、製造標、商社號及其ノ他ノ商號ノ保護ニ關シ法律ニ定ムル所ノ條件ヲ遵守スルトキハ兩國臣民ト同一ノ權利ヲ享有スヘシ

第十八條 兩締盟國ハ左ノ取極ニ同意スヘシ  
日本國ニ在ル各外國人居留地ハ全ク其ノ所在ノ日本國市區ニ編入シ爾後日本國市區組織ノ一部トナルヘシ  
然ル上ハ日本國當該官廳ハ之ニ關シテ其ノ市區施政上ノ責任義務ヲ悉皆負擔スヘシ又之ト同時ニ右外國人居留地ニ屬スル共有資金若ハ財產ハ之ヲ右日本國官廳ヘ引渡スヘキモノトス

尤前記外國人居留地ヲ日本國市區ニ編入ノ場合ニハ該居留地内ニ於テ現ニ因テ以テ地所ヲ所持スル所ノ現在永代借地券ハ有效ノモノト確認セラレヘシ而シテ右地所ニ對シテハ右借地券ニ載セタル條件ノ外ハ別ニ何等ノ條件ヲモ附セサルヘシ



右居留地内ノ地所占冇權ハ將來ニ於テハ從來或ル場合ニ於ケルカ如ク領事官廳若ハ日本國官廳ノ認可ヲ得ルコトヲ要セスシテ其ノ占有者ヨリ自由ニ之ヲ日本國人若ハ外國人ニ賣渡スコトヲ得ヘシ

原借地券ニ依リ領事官廳ニ屬シタル職務ハ日本國官廳ニ移ルモノトス

外國人居留地公共ノ目的ノ爲メニ無借料ニテ日本國政府ヨリ既ニ貸與シタル各地所ハ總テノ租稅及徵收金ヲ課スルコトナク最初貸與シタル時ノ目的ニ永代使用セラルヘシ但シ國土領有ノ大權ヨリ生スル諸權ニハ從フヘキモノトス

第十九條 本條約ハ兩締盟國ノ一方ト現ニ關稅同國ノ關係ヲ有シ若ハ將來右關係ヲ有スヘキ國ノ版圖内ニモ適用スヘシ

第二十條 本條約ハ其ノ實施ノ日ヨリ千八百六十九年二月二十日締結ノ條約並該條約ニ附加スル一切ノ諸約定ニ代ルヘキモノトス而シテ該條約及諸約定ハ右期ヨリ總テ無効ニ歸シ隨テ獨逸國裁判所カ日本帝國ニ於テ執行シタル裁判權及該權ニ屬シ又ハ其ノ一部トシテ獨逸國臣民カ右期日ニ至ル迄享有セシ所ノ特典特權及免除ハ本條約實施ノ日ヨリ自ラ消滅ニ歸スルモノトス而シテ此等ノ裁判權ハ本條約實施後ニ於テハ日本帝國裁判所ニ於テ之ヲ執行スヘシ

第二十一條 本條約ハ第十七條ヲ除クノ外ハ日本國皇帝陛下ノ政府ニ於テ之ヲ實施セムト欲スル旨ヲ獨逸國皇帝普瀋西國皇帝陛下ノ政府ニ通知シタル後一箇年ヲ經テ之ヲ實施スルモノトス尤本條約ハ千八百九十九年七月十七日以前ニハ實施セラレサルモノトス又本條約ハ其ノ實施ノ日ヨリ十二箇年間效力ヲ有スルモノトス

兩締盟國ノ一方ハ本條約實施ノ日ヨリ十一箇年ヲ經過シタル後ハ何時タリトモ本條約ヲ終了セムト欲スル旨ヲ他ノ一方ヘ通知スルノ權利ヲ有スヘシ而シテ此ノ通知ヲ爲シタル後十二箇月ヲ經過シタルトキハ本條約ハ消滅ニ歸スヘキモノトス

本條約第十七條ハ本條約批准交換ノ日ヨリ實施セララルヘシ而シテ兩締盟國ニ於テ別ニ取極ヲ爲サハルトキハ本條約ノ他ノ條項效力ヲ失フニ至ル迄其ノ效力ヲ存スヘシ

第二十二條 本條約ハ之ヲ批准シ其ノ批准ハ可成速ニ伯林ニ於テ交換スヘシ右證據トシテ兩國全權委員ハ之ニ記名調印スルモノナリ  
千八百九十六年四月四日伯林ニ於テ本書ニ通フ作ル



子爵 青木 周藏 印  
男爵 フォンマルシャル 印

天佑ヲ保有シ萬世一系ノ帝祚ヲ踐ミタル日本國皇帝(御名)此書ヲ見ル有衆ニ宣示ス

朕帝國ト獨逸帝國トノ交際ヲ永久親睦ナラシメンコトヲ欲シ明治二十九年四月四日伯林ニ於テ兩國全權委員ノ記名調印シタル通商航海條約ノ各條目ヲ親シク閱覽點檢シタルニ善ク朕ノ意ニ適シ間然スル所ナキヲ以テ右條約ヲ嘉納批准ス神武天皇即位紀元二千五百五十六年明治二十九年八月二十六日東京宮城ニ於テ親カラ名ヲ署シ璽ヲ鈐セシム

御名 國璽

外務大臣 侯爵西園寺 公望 印

議定書

下名ノ全權委員ハ本日調印シタル通商航海條約ト同時ニ左ノ約定ニ同意セリ  
第一條約第一條ニ付

日本國政府ハ内國ヲ開ク迄ハ獨逸國臣民ニ對シ現行ノ旅券方法ヲ擴張スルコ

トニ同意ス即獨逸帝國臣民カ在東京獨逸國代表者若日本國開港場ニ駐在スル獨逸國領事官ヨリノ紹介證書ヲ所持シテ出願スルニ於テハ十二箇月ヲ超ヘサル期間何レノ地ヘモ到ルコトヲ得ヘキ旅券ヲ東京外務省若ハ開港場所在地方官廳ヨリ交付スヘシ但シ帝國ノ内地ニ旅行スル獨逸國臣民ニ關スル現行規定ハ之ヲ保續スルモノト知ルヘシ

第二條約第一條及第三條ニ付

兩締盟國ハ其ノ一方ノ臣民カ他ノ一方ノ版圖内ニ於テ内國臣民ト同様不動産抵當權ノ取得及占有ヲ許スコトニ同意ス

第三條約第五條ニ付

兩締盟國ハ本日調印シタル通商航海條約批准交換後六箇月ヲ經タル後本議定書ニ附屬スル輸入税目ニ掲ケタル物品ニシテ獨逸國ノ生産品又ハ製造品ナルトキハ之ヲ日本國ヘ輸入スル場合ニ該税目ヲ適用スルコトニ同意ス尤兩締盟國ノ間ニ千八百六十九年締結ノ現行條約ノ有效ナル間ハ其ノ第十九條ノ規定ノ效力ヲ妨ケス又右條約消滅後ハ本日調印シタル通商航海條約第五條及第十六條ノ規定ニ準據スヘキモノトス但シ日本國政府ニ於テ純良ナラサル藥材製



藥食物若ハ飲料、猥褻ノ印刷物、圖書、書籍、紙牌、石版、彫刻畫、寫真及其ノ他ノ猥褻ナル物品並ニ日本國ノ發明、商標又ハ版權保護ニ關スル法律ニ違背スル物品及其ノ他衛生、公安若ハ風俗ニ關シ危害ヲ生スヘキ物品ノ輸入ヲ禁止シ又ハ制限スルノ權利ハ本議定書又ハ其ノ附屬稅目ノ爲メ制限セララル、コトナカルヘキモノトス

該稅目ニ掲ケタル從價稅ハ之ヲ實行シ得ヘシト認メラル、限リハ兩國政府間ニ成ル可ク速ニ締結セララルヘキ追加條約ヲ以テ日本國現行本位銀貨ニ換算スヘキ從量稅ニ改ムヘシ右換算ノ基礎ニハ本議定書ノ日附ヨリ前六曆月間ニ於ケル日本國稅關報告ニ明載スル平均價格ニ任入地、產出地若ハ製造地ヨリ陸揚地ニ至ル迄ノ保險料及運賃ヲ加算シ又手數料アルトキハ之ヲモ加算シタルモノヲ以テスヘシ

然レトモ兩締盟國ハ附屬稅目第二號、第十一號、第十八號、第十九號、第二十號、第二十一號、第二十四號、第三十號、第三十一號、第三十四號、第三十五號、第三十八號、第三十九號、第四十號、第四十一號、第四十四號、第四十七號、第四十八號、第五十六號及第五十九號ニ掲ケタル物品ニ關シテハ日本國ト大不列顛國トノ間ニ協定シタル

從價稅ヲ從量稅ニ換算スル方法ヲ獨逸國ヨリノ輸入品ニ對シテモ準用スルコトニ同意ス

從量稅ニ改正スル迄ノ間及其ノ改正ヲ爲サ、ルモノハ附屬稅目ノ末尾ニ掲ケタル規定ニ從ヒ從價稅ヲ取立ツヘシ

附屬稅目ニ掲ケサル物品ニ對シテハ本議定書批准交換後六箇月ヲ經タル後ハ千八百六十九年條約第十九條ノ規定及本日調印シタル通商航海條約第五條及第十六條ノ規定ノ效力ヲ妨ケスシテ日本國普通國定稅則ヲ適用スヘシ但シ右國定稅則並ニ後來之ニ改正ヲ加フル場合アルトキ其ノ改正ヲ獨逸國ヨリ日本國ヘノ輸入品ニ適用スルニハ六箇月以前ニ公布スヘキモノトス

前記ノ各稅目實施ニ至ルトキハ現今日本國ニ於テ獨逸國ノ物品及商品ニ對シテ施行スル稅目ハ其ノ效力ヲ失フモノトス

此ノ外總テノコトニ付テハ現行條約及其ノ附屬約定ハ本日調印シタル通商航海條約ノ實施セララル、ニ至ル迄ハ無條件ニテ其ノ效力ヲ有スヘキモノトス

第四條約第十七條ニ付  
兩締盟國ハ他ノ一方ノ臣民カ發明、見本(實用ニ供スル見本共)雛形、商標、製造標、商



社號及其ノ他ノ商號ノ保護ニ關シ法律ニ定メタル條件ヲ遵守スルトキハ各其ノ版圖内ニ於テ該臣民ニ右ノ保護ヲ與フルコトニ同意ス  
尤兩締盟國ハ專賣特許見本商標製造標ノ保護ニ關スル雙方ノ關係ニ付別ニ條約ヲ締結スルコトアルヘシ而シテ右條約ヲ締結スルニハ相當ノ商議ヲ開クヘシ

又日本國政府ハ日本國ニ於ケル獨逸帝國領事裁判權ノ廢止ニ先タチ版權思想上ノ所有權ニ關スル列國ベルン條約ニ加入スヘキコトヲ言明ス  
第五條約第二十條ニ付

日本國內ニ於テ獨逸帝國領事官廳ノ執行シタル裁判權ハ本日調印シタル通商航海條約ノ全部ノ實施ト同時ニ自然ニ消滅スルニ拘ハラヌ兩締盟國ハ右條約全部ノ實施ノ時ニ當リ裁判中ニ在ル總テノ事件ニ關シテハ其ノ判決ニ至ル迄該裁判權ヲ繼續スルコトニ同意ス  
下名ノ全權委員ハ本議定書ヲ本日調印シタル通商航海條約ト同時ニ兩締盟國政府ニ提供シ而シテ右條約批准セラルトキハ本議定書ニ掲載スル所ノ諸約定モ別ニ正式ノ批准ヲ要セスシテ亦均ク兩締盟國政府ノ認可セシモノト看做スヘキ

コトヲ約ス

又本議定書ノ規定ハ前記條約ノ無効ニ歸スルト同時ニ其ノ效力ヲ失フヘキコトヲ約ス

右證據トシテ兩國全權委員ハ之ニ記名調印スルモノナリ  
千八百九十六年四月四日伯林ニ於テ二通ヲ作ル

子爵青 木 周 藏 印  
男爵フォン、マルシヤル印

附屬

日本國ヘノ輸入税目

號

品

目

從價稅率

綿布類

一

綿天鷲絨類

百ニ付十

二

本税目ニ掲載セサル各種ノ純綿布及亞麻大麻若ハ羊毛其ノ他ノ紡績シ得ヘキ物料ヲ交ヘタル各種ノ綿布但シ綿ノ重ナル

同 十



三	鉛(塊、錠ノ別ナク)	同	五
四	化學製品及藥品	同	十
五	赤燐	同	十
六	次硝酸蒼鉛	同	十
七	貌羅謨化物	同	十
八	規尼涅	同	八
九	格魯兒酸剝篤亞斯	同	十
十	「ダイナマイト」	同	十
十一	沃度剝篤亞斯	同	十
十二	硝酸剝篤亞斯	同	十
十三	撒里矢爾酸	同	五
十四	金屬線	同	十
十五	鐵線、鋼線及經英一「インチ」ノ四分ノ一ヲ超ヘサル細竿鐵、細竿鋼	同	五

十五	鐵及鋼鐵塊	同	五
十六	軌條	同	五
十七	條、竿、板	同	七半
十八	鐵ノ	同	七半
十九	鋼ノ	同	七半
二十	電鍍板(波形ト否トノ別ナク)	同	十
二十一	葉鐵及葉鋼	同	十
二十二	筒及管	同	十
二十三	鐵道客車及同部分品	同	五
二十四	鐵釘	同	十
二十五	鐵螺旋釘、鐵牝牡螺絲釘(電鍍ンタルモノ共)	同	十
二十六	窓玻璃(尋常ノ)	同	十
二十七	無色及無著色ノ	同	八
二十八	有色、著色及砂磨ノ	同	十



染料及彩料類

二十七	「アニリン」	同	十
二十八	「アリザリン」	同	十
二十九	「ロケヅイト」越後斯	同	十
三十	色油	同	十
	織絲類		
三十一	綿ノ	同	八
三十二	織物用亞麻、大麻、シユートノ	同	八
	羊毛、梳理シタル羊毛共		
三十三	織物用ノ	同	八
三十四	其ノ他ノ	同	八
三十五	此税目ニ掲ケサル各種ノ織絲	同	十
三十六	絹綿繻子	同	十
三十七	苦草	同	十
三十八	帽子(フェルト帽トモ)	同	五

三十九 護謨製品

三十九	護謨製品	同	十
四十	麻布類	同	十
	熟皮		
四十一	靴底皮	同	十五
四十二	其ノ他ノ	同	十五
四十三	鐵道機關車及同部分品	同	五
	牛乳		
四十四	「コンデスド」又ハ「エヴァポレーテッド」	同	五
四十五	「ステリライズド」	同	五
四十六	紙類	同	十
四十七	無味香油	同	十
四十八	無味香蠟	同	五
四十九	「ポルトランドセメント」	同	五
五十	時計(懐中時計ヲ除ク)及同部分品	同	十
	各種ノ毛布類(ウルステット)絲ノ織物トモ(純毛ト他物		



ヲ交セタルトノ別ナク但シ毛ノ重ナル	
五十一 「フランケツト」	同 十
五十二 「フランネル」	同 十
五十三 縮緬吳呂	同 十
五十四 羅紗	同 十
五十五 「イタリアン、クローリス」	同 十
五十六 他ノ織物	同 十
亞鉛	
五十七 塊、錠、板	同 五
五十八 薄板	同 七半
五十九 精糖	同 十
從價稅算定ノ規定	
本稅目ニ從ヒ納ムヘキ從價稅ハ其ノ物品ノ仕入地、產出地若ハ製造地ニ於ケル原價ニ其ノ仕入地、產出地若ハ製造地ヨリ陸揚港ニ至ル迄ノ保險料及運送費ヲ加ヘ又手數料アルトキハ之ヲモ加ヘテ算定スヘキモノトス	

日本國皇帝陛下及獨逸帝國ノ名義ヲ以テスル獨逸國皇帝普漏西國皇帝陛下ハ相互ニ領事官ヲ接納シ且右領事官カ日本國及獨逸國ニ於テ其職務執行スルニ際シ享受スヘキ權利、特權及免除ニ關シ一層明確ノ規定ヲ設ケムコトヲ欲シ領事職務條約ヲ締結スルコトニ決定シ之カ爲メ日本國皇帝陛下ハ獨逸國駐劄帝國特命全權公使子爵青木周藏ヲ獨逸國皇帝普漏西國皇帝陛下ハ其ノ國務大臣外務大臣男爵「アドルフ、マルシヤル、フォン、ビーベルスタイン」ヲ各其ノ全權委員ニ任命セリ因テ各全權委員ハ互ニ其ノ委任狀ヲ示シ其ノ良好妥當ナルヲ認メ以テ左ノ諸條ヲ協議決定セリ

第一條 兩締盟國ノ一方ハ他ノ一方ニ於テ總領事、領事、副領事及代辦領事ノ駐在ヲ認許スルニ便宜ナラストスル場所ヲ除クノ外之ヲ他ノ一方ノ各港、各都市及各地ニ置クコトヲ得ヘシ但シ右ノ制限ハ別國ニ對シテモ均ク之ヲ適用スル場合ニ非サレハ兩締盟國ノ一方ニモ適用セサルヘシ

兩國ノ總領事、領事、副領事、代辦領事、領事館書記生、筆生、領事館事務員及屬員ハ兩國ニ於テ最惠國ノ同等官吏ニ許與ノ若ハ將來許與スヘキ一切ノ權利、免除及特權ヲ享受スヘシ



第二條 總領事、領事、副領事及代辦領事ハ各其ノ本國ニ於テ定メラレタル書式ニ據ル所ノ委任狀ヲ差出シタルトキハ兩國互ニ之ヲ接納承認シ而シテ其ノ認可狀ハ無料ニテ之ヲ付與スヘシ然ル上ハ右領事官ハ兩國カ互ニ許與スル所ノ諸權利及免除ヲ享受スヘキモノトス

委任狀ヲ差出スニ當リ該領事官ノ管轄區域ヲ通知シ且將來之カ變更ヲ生シタルトキモ亦其ノ旨ヲ通知スヘシ

認可狀ヲ付與シタル政府ニ於テ若其ノ認可狀ヲ取消スヲ至當ト認メタルトキハ其ノ理由ヲ示シテ以テ之ヲ取消スノ權利ヲ有ス

第三條 領事官ニシテ其ノ任命國ノ臣民ナルトキハ民事ニ於テハ引致留置セラレ、コトナク刑事ニ於テモ駐在國ノ法律ニ從ヒ重罪ト見做サルヘキ犯罪ノ場合ニ非サレハ勾留ヲ受クルコトナカルヘシ又陸海軍ノ宿營及捐資ヲ免カルヘシ又該領事官ハ商業、工業其ノ他ノ營業又ハ職務外ニ營利事業ニ從事セサル者ニ限り對人稅、奢侈稅並ニ直接又ハ對人的性質ヲ有スル各種ノ負擔及捐資ヲモ免セラルヘシ但シ關稅、內國消費稅、地方消費稅若ハ其ノ駐在國內ニ於テ取得シ若ハ占有スル所ノ土地ニ對スル賦課金ハ免除ノ限ニ在ラス

商業ニ從事スル領事官ハ其ノ特權ニ託シテ商業上ノ責務ヲ免カル、コトヲ得ス

領事若ハ領事官ヲ引致シタル場合ニハ之ヲ引致シタル國ノ政府ヨリ直チニ其ノ旨ヲ該領事等ノ所屬國ノ公使館ニ通知スヘシ

第四條 總領事、領事及其ノ部下ノ書記生、筆生並ニ副領事、代辦領事ハ駐在國ノ裁判所ニ於テ必要ト認メラル、トキハ該裁判所ニ出廷シテ證言ヲ爲スヘキ義務アルモノトス尤此ノ場合ニ於テハ裁判所ハ公文ヲ以テ其ノ出廷ヲ請求スヘシ前記ノ官吏ニシテ職務若ハ疾病ノ爲メ出廷スルコト能ハサルトキハ民事ノ場合ニ限り裁判官ハ其ノ居宅ニ就テ供述ヲ聽キ若ハ其ノ國ニ行ハル、所ノ定式ヲ履ミ供述書ヲ請求スヘシ此ノ場合ニ於テハ前記ノ官吏ハ指定ノ期日內ニ裁判所ノ請求ニ應シ而シテ其ノ供述書ニハ署名ノ上官印ヲ捺シテ之ヲ送達スヘシ

第五條 總領事、領事、副領事及代辦領事ハ其ノ事務所若ハ其ノ居宅ノ門戶ニ其ノ事務所タルコトヲ表示スル文字ヲ記シ本國ノ徽章ヲ掲クルコトヲ得前記ノ官吏ハ其ノ事務所ノ家屋上ニ本國國旗ヲ掲クルコトヲ得又港內ニ於テ



職務上ニ使用スル各船舶ニモ均ク其ノ本國國旗ヲ掲揚スルコトヲ得  
第六條 領事館ノ記録書類ハ何時モ侵スヘカラサルモノトス而シテ駐在國ノ官廳ハ何等ノ口實ヲ以テスルモ該記録中ノ書類ヲ檢閲シ又ハ差押ユルコトヲ得サルモノトス

領事官ニシテ他ノ業務ニ従事スルトキハ領事館ニ關スル書類ハ私用書類ト區別シ別ニ鎖シ置クヘシ  
領事官ニシテ其ノ任命國ノ臣民ニ係リ商業工業又ハ其ノ他ノ營業ニ従事セサルトキハ其ノ事務所及居室ハ何時モ侵スヘカラサルモノトス  
駐在國ノ當該官廳ハ犯罪取調ノ爲メノ外何等ノ口實ヲ以テスルモ該事務所及居室ニ侵入スヘカラス又該事務所及居室内ニ在ル書類ハ如何ナル場合ニ於テモ右官廳ニ於テ之ヲ檢閲シ又ハ差押ユルコトヲ得ス尤該事務所及居室ハ何等ノ事情アルモ犯罪人ノ庇護所ト爲スヘカラス

第七條 總領事領事副領事及代辨領事ノ死亡不在若ハ其ノ他事故アル場合ニハ其ノ部下ノ書記生又ハ筆生ニシテ獨逸國又ハ日本國ノ當該官廳ヘ豫メ其ノ資格ヲ通知シアル者ニ於テ一時領事官ノ職務ヲ執行スルコトヲ得而シテ其ノ職

務執行中ハ領事官ノ受クル所ト同一ノ諸權利及免除ヲ享受スヘシ但シ領事官ノ爲メニ定ムル所ノ條件及制限ニ依ルヘシ

第八條 總領事及領事ハ事故アルカ又ハ一時不在ナルトキハ本國政府ノ認可及駐在國政府ノ承諾ヲ經テ領事代理ヲ任命スルコトヲ得又其ノ管轄區域内ノ都市港及其ノ他ノ場所ニハ代辨領事ヲ任命スルコトヲ得

右領事代理又ハ代辨領事ハ其ノ之ヲ任命シタル領事若ハ其ノ本國政府ヨリ委任狀ヲ受クヘシ該領事代理及代辨領事ハ本條約中領事官ノ爲メニ定ムル所ノ特權ヲ享受スヘシ但シ領事官ノ爲メニ定ムル所ノ制限ニ依ルヘシ

第九條 兩國間ニ現存スル條約取極若ハ國際法ニ違反スル事件アルトキハ總領事領事副領事及代辨領事ハ其ノ管轄區域内ニ在ル所ノ駐在國ノ裁判所若ハ行政官廳ニ向テ救済ヲ求メ且右等官廳ニ問合ヲ爲シ並ニ自國臣民ノ權利利益ヲ保護スル爲メ申立ヲ爲スノ權アルモノトス而シテ若右等官廳ニ於テ之ニ對シ相當ノ措施ヲ爲サハルトキハ前記ノ領事官ハ本國代表者不在ノ場合ニ限り直接ニ之ヲ其ノ駐在國ノ政府ニ申出ルコトヲ得

第十條 兩國ノ總領事領事副領事及代辨領事又ハ其ノ部下ノ書記生ハ本國ノ法



律命令ノ許ス限リハ左ノ權利ヲ有スヘシ

一、領事事務所領事館所在地、當事者ノ住所又ハ本國ノ船舶内ニ於テ本國ノ船長、船員、乘客、商人及其ノ他ノ本國ノ臣民ノ陳述ヲ聽クコト

二、本國臣民ノ單獨法律行為、遺言並ニ本國臣民相互ノ間及本國臣民ト駐在國臣民又ハ駐在國在留ノ他國人トノ間ニ取結ヒタル契約並ニ該領事官ノ任命國ノ版圖内ニ在ル地所ニ關シ及右版圖内ニ於テ處辨スヘキ法律行為ニ關シ駐在國臣民又ハ駐在國在留他國人ノ取結ヒタル契約ヲ登錄シ及之ヲ證明スルコト

三、本國官廳又ハ官吏ヨリ發スル所ノ總テノ文書ヲ翻譯シ及之ヲ證明スルコト  
前記諸書類ノ原本又ハ其ノ謄本、拔萃及翻譯ハ右領事官ニ於テ之ヲ證明シ其ノ館印ヲ捺シタル上ハ兩國ニ於テ公證人又ハ兩國ノ一方ノ當該官吏、公吏若ハ裁判官ノ登錄證明シタルト同一ノ効力ヲ有スルモノトス但シ前記諸書類ニ就テハ之ヲ執行スヘキ國ノ法律ニ從ヒ印紙稅及其ノ他ノ手數料、賦課金ヲ拂フヘキモノトス

第十一條 兩國ノ代表者、總領事、領事、及副領事ハ其ノ任命國ノ法律ノ許ス限リハ

其ノ國ノ法律ノ規定スル所ニ從ヒ其ノ國臣民ノ婚姻ヲ取扱フ權アルモノトス  
此ノ規定ハ結婚者ノ一人カ駐在國ノ臣民ナルトキハ之ヲ適用セサルモノトス  
前記ノ規定ニ從ヒ婚姻ヲ取扱ヒタルトキハ當該領事官ヨリ其ノ旨直チニ地方官廳ニ通知スヘシ

第十二條 兩國ノ代表者、總領事、領事、及副領事ハ其ノ任命國ノ法律命令ニ從ヒ其ノ國臣民ノ出生及死亡ヲ證明スルノ權アルモノトス  
前項ノ規定ハ駐在國ノ法律ニ從ヒ當事者カ駐在國ノ當該官廳ニ出生及死亡届ヲ爲スヘキ義務ヲ妨ケサルモノトス

第十三條 總領事、領事、及副領事ハ各其ノ本國臣民ノ後見人及保護人ヲ命シ又其ノ本國ノ法律ニ從ヒ後見及ヒ保護ノ施行ヲ監督スルノ權アルモノトス  
第十四條 兩國ノ一方ノ臣民若他ノ一方ノ版圖内ニ於テ死亡シタルトキハ左ノ規定ニ遵フヘキモノトス

一、日本國臣民獨逸國ニ於テ又ハ獨逸國臣民日本ニ於テ各本國總領事、領事、副領事又ハ代辦領事ノ駐在地若ハ其ノ近傍ニテ死亡シタル場合ニハ地方ノ當該官廳ヨリ直ニ其ノ旨ヲ該領事官ニ通知スヘシ



若領事官ニ於テ地方ノ當該官廳ニ先タチ死亡ノコトヲ知リタルトキハ該領事官ヨリ其ノ旨ヲ地方ノ當該官廳ニ通知スヘシ

領事官ハ其ノ職權又ハ當事者ノ請求ニ依リ死亡者ニ屬スル一切ノ所持品動産及書類ニ封印ヲ施スノ權アルモノトス但シ之ニ封印スルニ先タチ該領事官ト立會共同封印ヲ施スヘキ職權ヲ有スル地方ノ當該官廳ニ通知スヘシ

右共同封印ハ地方ノ官吏タ協力アルニ非サレハ之ヲ開封スルコトヲ得ス但シ地方ノ當該官廳ニ於テ領事官ヨリ共同封印ノ開封ニ立會フヘサ請求ヲ受ケ其ノ請求ヲ受ケタル時ヨリ四十八時間以内ニ臨場セサルトキハ領事官ハ地方ノ官吏ノ立會ヲ待タス單獨ニテ開封スルコトヲ得ヘシ若地方ノ官吏ニシテ立會フタルトキハ領事官ハ開封ノ後該地方ノ官吏ノ面前ニ於テ死亡者ノ財産目錄ヲ作ルヘシ而シテ該地方ノ官吏ハ其ノ面前ニテ作りタル調書ニ連署スヘシ但シ地方ノ當該官廳ハ右諸務上ノ協力ノ爲メ何等ノ手數料ヲモ要求スルノ權ナキモノトス

二、地方ノ當該官廳ハ其ノ國ノ慣例ニ依リ又ハ其ノ國法律ノ規定スル所ニ依リ死亡者ノ遺産處分ノ開始及相續人債權者ノ徵招ニ關スル廣告ヲ爲シ其ノ旨ヲ

領事官ニ通知スヘキモノトス但シ領事官ハ該官廳ニテ右ノ廣告ヲ爲シタル爲メ自ラ同様ノ廣告ヲ爲スノ權利ヲ妨ケラル、コトナカルヘシ

三、死亡者ノ動産ニシテ之ヲ原狀ノ儘ニ保存シ置クトキハ遺産ニ對シ巨多ノ費用ヲ要スヘキ場合ニ於テハ領事官ニ於テ駐在國ノ法律及慣例ニ從ヒ競賣ニ付スルコトヲ得

四、領事官ハ遺産目錄ニ登記シタル所持品及有價物件並ニ債務者拂入金所得金其ノ他動産ヲ賣却シタルトキハ其ノ代金ヲ地方ノ當該官廳ニテ遺産ニ關シ最終ノ廣告ヲ爲シタル日ヨリ起算シテ十箇月間又地方ノ當該官廳ニ於テ右廣告ヲ爲サ、リシトキハ死亡ノ日ヨリ起算シテ十二箇月間駐在國ノ法律ニ從ヒ保管供託物ト爲シ預リ置クヘシ

但シ領事官ハ死亡者ノ治療費、埋葬費、雇人給料、借家賃、裁判費、領事館諸手數料及其ノ他同様ノ費用並ニ死亡者遺族ノ爲メ養料ヲ要スルトキハ其ノ費用ヲモ豫メ遺産中ヨリ之ヲ控除スルノ權アルモノトス

五、前項ノ規定ノ外領事官ハ死亡者ノ動産及不動産維持ノ爲メ相續人ノ利益ト認ムル一切ノ處置ヲ爲スノ權アルモノトス遺産ハ領事官ニ於テ自ラ之ヲ管



理シ若ハ他人ヲ撰テ代理人ト爲シ領事官ノ名義ヲ以テ之ヲ管理セシムルコトヲ得ルモノトス又死亡者ノ所有ニ屬スル有價物件ハ公私ヲ論セス何レノ處ニ在リトモ領事官ニ於テ其ノ引渡ヲ求ムルノ權アルモノトス

六、若本條第四項ニ掲ケタル期間ニ駐在國ノ臣民若ハ第三國ノ臣民又ハ人民ヨリ死亡者ノ遺産ニ對シテ爲シタル要求ニ關シ爭議ヲ生シタルトキハ其ノ裁判權ハ遺産相續權又ハ遺贈ニ關スル事項ノ外駐在國ノ裁判所ニ專屬スルモノトス

死亡者ノ遺産ニシテ其ノ債務ヲ完済スルニ足ラサルトキハ駐在國ノ法律ノ許ス限リハ債權者ヨリ地方ノ當該官廳ニ破産ノ申立ヲ爲スコトヲ得ヘシ而シテ破産ノ宣告アリタル後ハ領事官ハ地方ノ當該官廳又ハ破産管財人ニ諸書類所持品及有價物件ヲ引渡スヘシ而シテ引渡ノ際ニハ領事官ハ其ノ本國臣民ノ利益ヲ保護スルノ職責アルモノトス

七、本條第四項ニ掲ケタル期限ノ終ニ至リ遺産ニ對シ何等ノ請求ヲモ爲ス者アラサルトキハ領事官ハ駐在國ニテ定ムル所ノ稅率ニ照シ遺産ノ負擔ニ屬スル一切ノ費用及仕拂金ヲ支拂ヒタル上之ヲ受取り而シテ清算ノ上正當ノ

相續人ニ引渡スヘシ但シ領事官ハ其ノ本國政府ノ外ハ何人ヘモ右ニ關スル清算書ヲ差出スヲ要セサルモノトス

八、兩國ノ一方ノ臣民ノ遺産ノ處分開始管理及清算ニ關シ他ノ一方ニ於テ生シタル一切ノ事件ニ付テハ當該總領事、領事、副領事及代辦領事ハ法律上相續人ヲ代表スルノ職權ヲ有シ且委任狀ヲ以テ其ノ委任權ヲ證明スルヲ要セスシテ職務上其ノ代理者ト認メラルヘキモノトス  
因テ領事官ハ其ノ駐在國當該官廳ニ自身ニ出頭シ若ハ該國ノ法律ニ從ヒ代理人タルヘキモノ資格ヲ有スル者ヲ代理者トシテ出頭セシメ以テ遺産ニ關スル一切ノ事件ニ付相續人ノ利益ヲ保護シ又相續人ニ對シ要求ヲ爲ス者アルトキハ之ニ對シ答辯ヲ爲スコトヲ得  
然レトモ遺言執行者アル場合ニハ右執行者若ハ相續人現ニ其ノ地ニ居ルカ又ハ代人ヲ其ノ地ニ置キタル場合ニ於テ遺産ニ對シ要求ヲ爲ス者アリタルトキハ領事官ハ右執行者、相續人又ハ代人ヲシテ其ノ要求ニ對シ故障ヲ申立ツルノ便ヲ得セシムル爲メ要求ノ趣ヲ右執行者、相續人又ハ代人ニ通知スヘキ義務アルモノトス



尤總領事、領事、副領事及代辦領事ハ各本國臣民ノ代理者ト見做サルヘキノ故  
ヲ以テ遺產ニ關スル事件ニ付該領事官ヲ裁判上被要求者ト爲スコトヲ得サ  
ルモノト知ルヘシ

九、相續權及遺產ノ分配權ハ死亡者ノ本國ノ法律ニ依リ決定スヘキモノトス  
相續權及遺產ノ分配權ニ關スル一切ノ要求ハ死亡者ノ本國ノ裁判所若ハ其  
ノ他ノ當該官廳ニ於テ其ノ國ノ法律ニ依リ決定スヘキモノトス

十、獨逸國臣民日本國ニ於テ及日本國臣民獨逸國ニ於テ自國ノ領事官ノ駐在セ  
サル場所若ハ最寄ニ自國ノ領事官ノ駐在セサル場所ニテ死亡シタルトキハ  
地方ノ當該官廳ニ於テ各本國ノ法律ニ從ヒ死亡者ノ遺產目錄ヲ調製シテ之  
ニ捺印シ右目錄ノ正當贖本ハ死亡證書及死亡者ノ國籍ヲ證明スル一切ノ書  
類ヲ添ヘ可成速ニ遺產所在地ニ最モ近キ場所ニ駐在スル領事官ニ送付スヘ  
シ

地方ノ當該官廳ハ死亡者ノ遺產ニ關シ其ノ國ノ法律ニ定ムル所ノ一切ノ處  
置ヲ施シ而シテ遺產ハ本條第四項ニ掲ケタル期間經過後可成速ニ前記ノ領  
事官又ハ其ノ代理者ニ引渡スヘシ

當該領事官若ハ其ノ代理者ニシテ遺產所在地ニ到着シタル上ハ夫迄ニ之ニ  
干與シタル地方ノ當該官廳ニ於テ本條前諸項ニ掲ケタル規定ニ遵由スヘキ  
コトハ勿論ナリトス

十一、本條約ノ規定ハ兩國ノ一方ノ臣民ニシテ一方ノ版圖外ニ於テ死亡シタル  
モ他ノ一方ノ版圖内ニ動產又ハ不動產ヲ遺シタルトキハ其ノ遺產ニモ亦均  
ク之ヲ適用スヘキモノトス

十二、兩國ノ一方ノ海員船客其ノ他ノ旅行者ニシテ他ノ一方ノ版圖内ニ於テ陸  
上若ハ船舶中ニテ死亡シタルトキハ其ノ遺產目錄ヲ調製シ及其ノ他遺產ノ  
維持清算ニ關シ必要ナル職務上ノ取扱ヲ爲スノ任務ハ死亡者ノ本國ノ總領  
事、領事、副領事又ハ代辦領事ニ專屬スルモノトス

第十五條 總領事、副領事、領事及代辦領事ハ自由交通ヲ許サレタル本國船舶ニ自  
身ニ赴キ又ハ代理者ヲ派遣シテ乗組役員及海員ヲ訊問シ、船舶書類ヲ檢閲シ、航  
行ノ目的、仕向地及航行中ノ事跡ヲ聞キ、積荷目錄ヲ領受シ入港及出港手續ヲ爲  
スコトヲ幫助シ並ニ通譯者又ハ附添者トシテ右役員及海員ニ附添ヒ駐在國ノ  
裁判所及行政官廳ニ出頭スルコトヲ得ヘシ



兩國ノ一方ノ總領事、領事、副領事又ハ代辦領事ノ駐在スル港ニ於テハ他ノ一方ノ官吏、公吏ハ該領事官ヲシテ立會フコトヲ得セシムル爲メ豫メ通知ヲ爲シタル後ニ非サレハ普通ノ稅關上及衛生上ノ監督ノ外商船ニ赴キテ取調、引致、差押、搜索、訊問其ノ他各般ノ強制的處分ヲ施スコトヲ得サルモノトス

役員又ハ海員中ノ人員ヲシテ其ノ他ノ裁判所又ハ地方官廳ニテ證言又ハ陳述ヲ爲サシムル場合ニ於テモ領事官ヲシテ立會フコトヲ得セシムル爲メ相當ノ時期ニ其趣ヲ通知スヘシ而シテ右通知書ニハ之ヲ行フ爲メニ定メタル時刻ヲ記載スヘシ若該領事官又ハ其ノ代理者出頭セサルトキハ裁判所又ハ地方ノ官廳ハ其闕席ニ拘ハラス直チニ之ヲ行フコトヲ得

第十六條 本國商船内ノ秩序ヲ保維スルコトハ專ラ總領事、領事、副領事又ハ代辦領事ノ職責ニ屬スルヲ以テ該領事官ハ船長、役員及水夫ノ間ニ生シタル紛議殊ニ雇入料及其ノ相互ノ義務履行ニ關スル紛議ヲ仲裁スヘキモノトス故ニ商船内ニ於テ生シタル紛議ニシテ港内若ハ陸上ノ安寧、秩序ヲ妨害スル場合若ハ其ノ船ノ役員及海員外ノ者ニシテ右紛議ニ關係シタル場合ヲ除クノ外ハ何等ノ口實ヲ以テスルモ該地ノ裁判所若ハ其他ノ官廳ニ於テ之ニ關涉スルコトヲ得

サルモノトス

但シ當該官廳ハ其ノ國ノ臣民ヲ除クノ外ハ領事官ヨリ依頼ヲ受ケ該官廳ニ於テ引致ヲ必要ト認メタル所ノ船舶乗組員ヲ搜索、引致、留置スル爲メ有效ノ援助ヲ與フヘキ義務アルモノトス而シテ右乗組員ハ領事官ヨリ船舶登錄簿又ハ船員名簿ノ正當ナル拔萃ヲ添ヘ當該官廳ヘ宛書面ヲ以テ依頼シタルトキニ於テ之ヲ引致シ其ノ船ノ港内ニ碇泊スル間ハ領事官ノ爲メニ之ヲ留置シ領事官ヨリ書面ヲ以テ請求アルヲ待テ之ヲ放免スヘキモノトス右引致、領置ニ關スル費用ハ領事官ニ於テ之ヲ支辨スヘキモノトス

第十七條 總領事、領事、副領事及代辦領事ハ本國軍艦又ハ商船ノ士官、役員、水夫其ノ他ノ乗組員ニシテ脱艦、脱船ノ罪アル者又ハ脱艦、脱船ノ廉ヲ以テ告訴セラレタル者ヲ右艦船又ハ本國ニ送還スル爲メ逮捕ヲ求ムルコトヲ得ヘシ  
右逮捕ヲ求ムルニハ領事官ハ船舶登錄簿及艦船員名簿ノ正當ナル拔萃若ハ其ノ他引渡ヲ請求スル所ノ罪人カ該艦船ノ乗組員ナルコトヲ判明ナラシムル公文書ヲ添ヘ書面ヲ以テ駐在國ノ當該官廳ニ依頼スヘシ斯ク領事官ヨリ依頼アリタル場合ニ於テハ右脱走者カ其ノ乗組ノ時ニモ又著港ノ時ニモ引渡ノ依頼



ヲ受ケタル國ノ臣民ニ非サルトキニ限り該領事官ノ宣誓ヲ要セスシテ之ヲ引渡スヘキモノトス

又當該官廳ハ右脱走者ヲ搜索逮捕スルニ必要ナル援助ヲ領事官ニ與ヘ其ノ國ノ獄舎ニ投シ領事官ニ於テ之ヲ送還スルノ便ヲ得ル迄其ノ依頼ニ應シ領事官ノ費用ヲ以テ獄舎ニ留メ置クヘシ

但シ逮捕ノ日ヨリ六箇月以内ニ領事官ニ於テ還送ノ便ヲ得サルトキハ右脱走者ヲ放免シ而シテ同一ノ事件ニ關シテ再ヒ逮捕スルコトヲ得サルモノトス

脱走者ニシテ若其ノ搜出セラレタル國ニ於テ重罪又ハ輕罪ヲ犯シタルトキハ其ノ事件ヲ管轄スル當該裁判所ニ於テ判決ヲ下シ之ヲ執行シタル後ニ非サレハ領事官ノ處分ニ任カセサルモノトス

第十八條 兩國船舶ノ航海中ニ受ケタル總テノ損害ハ船舶所有者、荷主及保險者間ノ契約ニ反セサル限りハ該船舶カ任意ニ寄港シタルト避難ノ爲メ寄港シタルトヲ問ハス總テ總領事、領事、副領事及代辦領事ニ於テ之ヲ決定スヘキモノトス

但シ領事官ニシテ本件ニ付利害ノ關係ヲ有スル場合又ハ該船舶若ハ積荷ノ關係者ナル場合又ハ駐在國ノ臣民若ハ第三國ノ臣民或ハ人民ニ於テ本件ニ關係ヲ有スル場合ニ於テ此等當事者間ニ協議一致セサルトキハ駐在國ノ當該官廳之ヲ裁決スヘキモノトス

第十九條 本條約ハ本日兩國間ニ協定シタル通商航海條約全部ノ實施ト同時ニ效力ヲ生シ而シテ實施ノ日ヨリ十二箇年間效力ヲ有スヘシ

兩締盟國ノ一方ハ本條約實施ノ日ヨリ十一箇年ヲ經過シタル後ハ何時タリトモ本條約ヲ終了セシムヘキ旨ヲ他ノ一方ヘ通知スルノ權利ヲ有スヘシ而シテ此ノ通知ヲ爲シタル後十二箇月ヲ經過シタルトキハ本條約ハ消滅ニ歸スヘキモノトス

第二十條 本條約ハ之ヲ批准シ其ノ批准ハ本日兩締盟國間ニ協定シタル通商航海條約ノ批准交換ト同時ニ伯林ニ於テ交換スヘシ

右證據トシテ兩國全權委員ハ之ニ記名調印スルモノナリ

千八百九十六年四月四日伯林ニ於テ二通ヲ作ル

子爵青 木 周 藏 印



男爵フォン、マルシャル 印

天佑ヲ保有シ萬世一系ノ帝祚ヲ踐ミタル日本國皇帝(御名)此書ヲ見ル有衆ニ宣示ス  
朕帝國ト獨逸帝國トノ交際ヲ永久親睦ナラシムコトヲ欲シ明治二十九年四月四日伯林ニ於テ兩國全權委員ノ記名調印シタル領事職務條約ノ各條目ヲ親シク閱覽點檢シタルニ善ク朕ノ意ニ適シ間然スル所ナキヲ以テ右條約ヲ嘉納批准ス  
神武天皇即位紀元二千五百五十六年明治二十九年八月二十六日東京宮城ニ於テ親カラ名ヲ署シ璽ヲ鈐セシム

御名 御璽

外務大臣 侯爵西園寺 公望 印

議定書

下名ノ全權委員ハ本日記名調印シタル領事職務條約ト同時ニ左ノ約定ニ同意セリ

一、本日締結シタル領事職務條約實施ノ日ニ當リ兩締盟國ノ一方ノ版圖内ニ於テ他ノ一方ノ保護民ト認メラレタル無籍者アルトキハ兩國ノ領事官ハ本條

約ニ依リ本國臣民ノ事件ニ關シ付與セラレタル權利ヲ該保護民ニモ其ノ生存中適用スヘシ而シテ此ノ如キ人民ノ名簿ハ兩國政府ヨリ相互ニ通知スヘキモノトス

二、犯罪人交付及刑事ニ係ル依頼ヲ處理スルコトニ關シテハ兩國ノ間ニ別ニ約定ヲ取結フヘシ而シテ右約定ノ實施ニ至ル迄ハ獨逸國ヨリ右ノ請求ヲ爲スニ當リ日本國ニ對シテモ同様ノ事件ニ付相互ノ措置ヲ爲スヘシト保證スル限ハ獨逸國ハ日本國ヨリ本件ニ關シ別國ニ對シ現ニ許與シ又ハ將來許與シタル所ト同一ノ權利及特典ヲ日本國內ニ於テ享有スヘシ

下名ノ全權委員ハ本議定書ヲ本日記名調印シタル領事職務條約ト同時ニ兩締盟國政府ニ提供シ而シテ右條約批准セララル、トキハ本議定書ニ掲載スル所ノ諸約定モ別ニ正式ノ批准ヲ要セスシテ亦均ク可認セラレタルモノト見做スコトヲ約ス  
又本議定書ノ規定ハ前記條約ノ無効ニ歸スルト同時ニ其ノ效力ヲ失フヘキコトヲ約ス

右證據トシテ兩國全權委員ハ之レニ記名調印スルモノナリ

千八百九十六年四月四日伯林ニ於テ二通ヲ作ル



子爵 青木 周 藏 印  
男爵 フォン、マルシャル 印

日獨條約ニ關スル公文 日獨兩國通商航海條約及領事職務條約ニ關シ青木特命全權公使ト獨逸國外務大臣トノ間ニ往復セシ公文左ノ如シ

以書翰致啓上候陳者獨逸帝國ト日本帝國トノ間ニ締結スヘキ新通商航海條約協定可相成ニ付テハ帝國政府ハ現今日本國內ニ執行致居候領事裁判權ヲ新條約實施ノ時ヨリ放棄致候儀異存無之候得共右ノ放棄ハ他ノ各外國カ執行致居候領事裁判權ノ消滅スルト同時ニ始メテ效カヲ生セシムヘシト相考居候右帝國政府ノ存念ニ付テハ下名ハ日本國皇帝陛下ノ特命全權公使青木子爵ニ於テ他日疑義ヲ生セラレサル様ナスヘキ義務アルモノト存シ候ニ付同子爵ヨリ此書翰ノ領收書ヲ御送附相成候様及御依頼候下名ハ茲ニ重テ青木子爵ニ向テ敬意ヲ表シ候敬具

千八百九十六年三月三十日伯林ニ於テ

日本國皇帝陛下ノ特命全權公使青木子爵閣下

マルシャル

以書翰致啓上候陳者下名ハ茲ニ外務大臣國務大臣「マルシャル」男爵ヨリ本月三十日附ヲ以テ下名宛ニテ送附相成候書翰 (H. 1000) 正ニ接受致候本使ハ茲ニ重テ閣下ニ向テ敬意ヲ表シ候敬具

千八百九十六年三月三十一日

青木 周 藏

外務大臣國務大臣男爵「マルシャル」フォン、ビーベルスタイン閣下

以書翰致啓上候陳者下名ノ日本國皇帝陛下ノ特命全權公使ハ日獨新通商航海條約談判ノ際國務大臣獨逸帝國外務大臣男爵「マルシャル」フォン、ビーベルスタイン閣下ヨリ申陳ヘラレ候疑念ヲ免除致候爲メ茲ニ下名カ本國政府ヨリ接受シタル訓令ニ基キ帝國國法ニ從ビ設立セラレタル商事會社ハ縱令獨逸帝國臣民カ該會社ノ社員トシテ加入致居候場合ト雖モ現行ノ帝國法律ニ從ヒ帝國内ノ土地所有權ヲ取得シ之ヲ占有シ得ヘキ旨ヲ同閣下ニ通知スルノ光榮ヲ有シ候下名ハ茲ニ重テ男爵「マルシャル」閣下ニ向テ敬意ヲ表シ候敬具

千八百九十六年三月三十一日伯林ニ於テ

青木 周 藏



國務大臣獨逸國外務大臣

男爵マルシャル、フォン、ビーベルスタイン閣下

以書翰致啓上候陳者下名ノ日本國皇帝陛下ノ特命全權公使ハ日獨間ニ協定相成候新條約ニ記名調印致候處新條約第二十條ニハ單ニ千八百六十九年二月二十日ヲ以テ日本國ト北獨逸聯邦並ニ該聯邦ニ加盟セサル獨逸關稅通商同盟國トノ間ニ協定セラレタル條約ノ廢止ノ事ノミ記載有之候ニ付テハ獨逸帝國政府ハ千八百六十一年一月二十四日ヲ以テ日本國ト普漏西國トノ間ニ締結セラレタル修好通商航海條約ハ該條約ニ依リ廢止セラレタルモノト認メ被居候儀ニ有之候哉豫メ承知致度希望ニ有之候因テ下名ハ國務大臣獨逸帝國外務大臣男爵マルシャル、フォン、ビーベルスタイン閣下ヨリ右ニ關シ御回答相成候様及御依頼候下名ハ茲ニ重テ男爵マルシャル、フォン、ビーベルスタイン閣下ニ向テ敬意ヲ表シ候敬具

千八百九十六年三月三十一日伯林ニ於テ

國務大臣獨逸國外務大臣

青木周藏

男爵マルシャル、フォン、ビーベルスタイン閣下

以書翰致啓上候陳者日本國皇帝陛下ノ特命全權公使青木子爵ヨリ去月三十一日附書翰ヲ以テ御問合ノ件ハ獨逸帝國政府ノ意見ニテハ千八百六十一年一月二十四日ノ普日修好通商航海條約ハ千八百六十九年二月二十日ヲ以テ北獨逸聯邦及該聯邦ニ加盟セサル獨逸關稅通商同盟國トノ間ニ締結セラレタル修好通商航海條約ニ依リテ當時已ニ其ノ全部ヲ廢止セラレタルモノト認メ居候ニ付右條約ノ廢止ハ今回帝國ト日本國トノ間ニ協定相成候新通商航海條約第二十條ニ記載スルコトヲ要セスト存候下名ハ茲ニ重テ青木子爵ニ向テ敬意ヲ表シ候敬具

千八百九十六年四月二日伯林ニ於テ

マルシャル

日本國皇帝陛下ノ特命全權公使青木子爵閣下

以書翰致啓上候陳者下名ノ國務大臣獨逸帝國外務大臣ハ獨逸國及日本國トノ間ニ協議決定シタル通商航海條約ニ記名調印セムトスルニ際シ左記ノ事項ヲ申陳シ以テ商議中已ニ言明セラレタル一二ノ點ニ付疑感ヲ生セシメサラムコ



トヲ必要ト相認メ候

- 一、日本國ニ在留スル外國人ハ日本國ニ行ハル、所ノ法律ニ從ヒ現今尙土地所有權ノ取得ヲ禁セラレ居ルト雖トモ獨逸帝國臣民ハ條約第一條及同第三條ニ掲載シタル目的ヲ達セムカ爲メ其ノ時々ニ行ハル、國法上ノ規定ニ從ヒ内國臣民ト均ク長期ノ借地權、地上權其ノ他土地ニ關スル物權ヲ取得シ並ニ之カ爲メニ定メタル登記簿ニ登録シ以テ人權ニ屬スル土地ノ賃貸借權ニ物權ノ性質ヲ附スルコトヲ得ルコト
- 二、日本帝國政府ハ通商ノ爲メ特ニ緊要ナル國內ノ各地ニ通商上ノ需用ニ應シ倉庫及無稅物置ヲ建設スルコトニ注意スヘキコト
- 三、條約第十八條ニ記載シタル外國人居留地内地所ノ所有權ハ將來ニ於テモ亦日本國政府ニ屬スルヲ以テ該地所ノ占有者及其ノ權利承繼者ハ該地所ニ對シ約定ニ依ル所ノ借地料ノ外何等ノ取立金又ハ租稅ヲ上納スルコトヲ要セサルコト
- 四、本條約施行前若ハ施行中兩締盟國ノ一方ノ臣民ノ他ノ一方ノ版圖内ニ於ケル既得權ハ本條約消滅後ニ於テモ其儘存續セシムヘキコト

下名ハ前記事項ノ適當ナルヤ否ニ付日本國皇帝陛下ノ特命全權公使青木子爵ノ御意見ヲ承知致度且日本帝國政府ハ何時本條約第二十一條第一項ニ掲ケタル通知ヲ爲サルヘキ御見込ナルヤ併テ承知致度候下名ハ茲ニ重テ青木子爵ニ向テ敬意ヲ表シ候敬具

千八百九十六年四月四日伯林ニ於テ

男爵 フォン、マルシヤル

日本國皇帝陛下ノ特命全權公使青木子爵閣下  
 以書翰致啓上候陳者下名ノ日本國皇帝陛下ノ特命全權公使ハ國務大臣獨逸帝國外務大臣男爵マルシヤル、フォン、ビーベルフタイン閣下ヨリ送附セラレタル本日附書翰中第一項乃至第四項ニ陳ヘラレタル土地ニ關スル物權ノ取得、倉庫ノ建設、外國人居留地地所ノ免稅及既得權ヲ本條約消滅後ニ存續スルコトニ關スル事項ハ悉皆適當ト相認メ候旨同閣下ニ答復スルノ光榮ヲ有シ候之ト同時ニ下名ハ帝國政府ノ特命ヲ奉シ男爵フォン、マルシヤル閣下ヨリノ御問答ニ關シテ左ノ通及御通知候即日本帝國政府ハ日本國ト獨逸國トノ間ニ現存スル條約ノ消滅ニ歸スル時ニ當リテ日本帝國ノ各法典ノ實施セラレ居ルコトノ利便ナル